
俺の異世界譚

ズック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の異世界譚

【Nコード】

N7979G

【作者名】

ズック

【あらすじ】

普通の高校生、浅木勇輝あなぎゆうきはいきなり異世界へと飛ばされてしまう。なぜ異世界へと飛ばされたのか？はたして勇輝は元の世界へ帰ることが出来るのか？これは、普通じゃなくなってしまった少年の異世界での物語……。

Page0:プロローグ(前書き)

これは作者の初めての作品です。

御見苦しいところが多々あるとは思いますが目を通してやって下さい。

何を言っているか分からないと思うが聞いてくれ。
唐突ではあるが、俺は、森の中にいた。

自己紹介から始めようか。俺の名前は浅木 勇輝、今年で17歳。
身長はまあ平均くらい、黒髪黒眼で、体格も、学校の成績も、運動
も、（言いたくは無いが顔も）良くも悪くも無い平凡な高校生、だ
った。

両親と姉と俺の、これもまあ普通の家庭で、別に小説とかでよくあ
るような幼い頃に事故にあったとか、可愛い幼馴染がいるとか、そ
んなこともなかった。

俺は今日……と言っているのか判らないが、いつも通り学校へ行き、
いつも通り授業を受け、いつも通りそこそこの仲の良い友人たちと話
して、いつも通り一人で帰って来る筈であった。（帰り道が同じ奴
がいないんだよ……）

だけど、そんな帰り道の途中、漫画やアニメであるような魔法陣？
が突然目の前に現れて…
次に視界に飛び込んだきたのは、今俺の眼前に広がる森だった。

「ここ、どこだよ？」

地面に座り込み、樹にもたれ掛かりながら言ってみる。

気持ちを落ち着かせる為というのもあるが、大部分は不安を払う為に発した。

当たり前だ。いきなりこんな森の中に独りにさせられて不安にならない人間はいない。

というか、不安なのはさつきからやけに犬の遠吠えの様な声が聞こえるからなんだが…

「さつきより近い気がするんだよね……」

オオーン、とこれで数えただけでも7回目の遠吠えらしき声。

少なくとも1回目や2回目とは比べる必要がないほど近くで聞こえる。

うむ、怖いな。

正直パニック寸前なんだが、どうにか騒ぎ立てるのは抑えている。

騒いだら死ぬような気がするんだよね。

Be cool、俺。 cool じゃないぜ？

それは難見な沢の主人公の得意分野だ。間違っても俺ではない。

「ふう」

馬鹿なこと考えてたら少しは落ち着いたな…

まずは現状確認。

ここはどこ？

よくわからん森の中。

今何時？

携帯は午後8時だけどそこまで暗くない。恐ら

く午後5〜6時。

森の中だから3〜4時ってことも考えられる。

持ち物は？

カバンが無くなっているから、言うтусれば財

布と携帯。当然のように圏外だけど。

服装は？

学校の帰りだったから学ラン。少し汚れてる…

現状を打破出来るか？

お手上げ。助けが無い限りここで俺の

人生は終わり。

…なんの解決にもなっていないな。絶望感が増しただけ、溜息しか出ないっつーの。

「ここにいてもどうしようもないしな、移動してみるか」

言って、自分を奮い立たせる。そうでもしないと動けなかった。立ち上がって辺りを見回す。

少し時間を状況確認に掛け過ぎたようで、さっきよりも暗くなっている。ものすごく不気味だ。

特に樹々の葉が揺れる音しかないだなんて

！？

瞬間、左の茂みから何かが飛び出してきたのが横目で見えた。

「ああああ！！！」

声を上げ、左腕を全力で振るう。

手刀と呼ばれる部分に鈍い衝撃と痛み、それを頭で理解するよりも

先に俺は駆け出していた。

馬鹿か！俺は！？

遠吠えのことなどすっかり忘れていた。

全く動かない俺は、奴らにとって格好のエモノであつたろう。聞こえていた遠吠えが威嚇とかならまだいいけど、仲間を呼ぶものだとしたら……

刹那、全身を貫くような悪寒。

地面に太く木の根が這っているのが見えるが気にしてはいられない。転がるように前へ跳ぶ。

そのまま鮮やかに前回り受身…とはいかず、思いっきり木の根に背中を打ちつけた。

くそ、学ラン泥だらけになっちまうじゃねえか。

酷く場違いなことを考えているとは思うが、気が動転しているんだろうさ。

前の方から音が聞こえる。どうやら追跡者は俺を跳び越えてしまったらしい。

咳き込みながら体を起こすと、茶色と灰色の毛が混ざった、大型犬より一回りほど大きな狼のような生き物がこちらを見ている。

二度も逃げられたのが悔しいのだろうか。目の前の追跡者、改め捕食者は低く唸り声を上げ、前足に体重をかけている。あの状態ならいつでも飛び掛ってこれる筈だ。

対する俺はまだ立ち上がることも出来ていない。それどころか足が震えてる。

さっき殴った左手が熱い。

怖い。

今まで平和に過ごしていた分、余計に。

明確な死が目の前にあるということが、恐ろしい。

泣きそうだ。むしろもう、ちょっと涙目である。

かさり、と後ろから何かを踏んだような音が聞こえる。

前を警戒しながら、恐る恐る視線だけそちらに向けようとする。

無理。

体も回さなければ見ることは出来ない。

そんなことが出来るならとつくに立って走り出している。

後ろを見ることは出来ないが、きつと目の前にいる奴の仲間であると予測し、こいつらに食い殺される未来を想像して、叫び声を上げようとした直後

「少しだけ、目を閉じていて」

俺の頭に何かが乗る様な軽い感触と共に、優しげな声が掛けられた。少女だ。

暗くてよく見えないが、声と背丈で大体そうあたりをつける。

森は歓迎するかのように薄っすらと月明かりを射し込ませ、少女は月明かりの下、ゆっくりと狼へと向かう。

彼女は丸腰である。

「お、おい……」

殺されるぞ、と言いかけ、少女はそれよりも早く

狼の首を断ち切った。

これが俺と、ここから始まる物語に深く関わる少女の出会いであった。

サブタイトルの通りです。

風が森を通り抜ける。ざわざわと木の葉が揺れる音がするがそんなものは気にならなかった。

少女の周りだけさつきよりも明るくなっている。

月明かりに照らされて、彼女の肩の下まである蒼い髪が微かに揺らめいている。少女はこちらに振り向き、俺と眼が合うと柔らかく微笑んだ。

……綺麗だな。

って、違う！俺は断じてロリコンなんかじゃない！

首を思いっきり左右に振って、先ほど考えてしまったことを忘れようとする。

少女が不思議そうにこちらを見ているのが見えるが、そんなものは無視。

眼を閉じて、煩惱退散 煩惱退散。

「あの、大丈夫？」

声に反応して眼を開けると、至近距離に俺を助けてくれた少女の顔がある。

髪と同じ色の、空の色の様なつぶらな蒼い瞳。すっきりとした鼻。整った顔。

「あ、ああ。ありがとう」

もっとなんとしたお礼が言いたかったのだけど、まださっきの恐

怖は完全には抜けておらず、そんな言葉しか返せなかった。
せめて立ち上がるうとは思うが、足はまだ震えている。

「まだそこにいて。囲まれてるから」

俺が立ち上がろうと悪戦苦闘している最中、彼女は辺りを見回し言葉
を放つ。

囲まれてる……？

「さっきの魔物は遠吠えで仲間を呼ぶんだよ」

ああ、そうかい。すごく嬉しくない情報をありがとう。
ただでなく全身に、震えが広がってゆく。どうにかして止めたい
とは思うが、無理。

怖くて、恐くて、コワクテ。自分の体じゃないみたいで、震えを止
めることが出来ない。

ガチガチと歯を鳴らして俯く。体はどんどん冷たくなっていつてる。

そつと、頭にさっきと同じ軽い感触がある。

「大丈夫、私が護ってみせるから」

……ああ、こんなところで震えている俺が馬鹿みたいじゃねえか。
女の子に護ってみせるから、なんて言われるのは格好悪いな。
こんなこと思っようが体は動かないんだけどさ。震えはもう、な
い。

だから俺の頭に手を乗せて立っている少女を見上げ、精一杯強がつ
て言う。

「女の子が怪我とかすんじゃないぞ。」

少女は一瞬キョトン、とした顔になり

「そういうことは君が私を護れるくらい強くなってから言って欲しいな？」

などと、邪気を感じない綺麗な笑顔で返された。

ちくしょう、人の心配は素直に受け取れつつうの。恥ずかしいだろうが。

何でだろうな？ 彼女といれば何も恐くない。

さっきまであんなに震えてたのに、あんなに心が押し潰されそうだったのに。

彼女の言葉はストーンと胸に収まる。

今、少女は俺ではなく周りの木々の影から姿を現した狼に注意を向けながら何かを呟いている。

俺の前方だけでも4匹、囲まれているってことは大体その倍。たったそれだけ。

狼の包囲網の中心に俺と少女がいる。包囲網の半径は俺の目測でおおよそ8m くらい。

彼女は俺から見て正面に向かって1歩、左足を踏み出し半身となる。脚を曲げて重心を下げ、刀を持っているかの様に両手を胸の右辺りで横に構える。

様に、と表したのは彼女が何も携えていないから。いや、携えてはいる。ただそれが、俺には見えないだけで

不可視の刃が閃く。

左へと薙いだ斬撃は空間ごと狼を2匹、真横に断ち切る。

そのまま勢いをつけ回転、俺の頭上を通るように振り抜き、ちょうど4分の3回転したところで止まる。

重い音が2つ。後ろから2匹迫っていたようだ。

次いで俺の左右、彼女からすれば前後から2匹同時に迫って来る。遅れて俺の前から1匹。

だけど相手は獣。駆け引きも何も無くただ迎え撃つだけ。同時に跳びかかって来る。

左へ1歩、彼女はズれる。それだけで獣達の挟撃は失敗に終わる。

1匹の首をすれ違いざまに斬り落とす。目の前でやるな、生々しすぎる。

振り向きもう1匹は着地直後に袈裟に斬る。

踊るように、舞うように、祈るように、彼女は獣を屠^{ほふ}ってゆく。

「ふう」

少女は息を吐きながら見えない刀を一振り、付いた血を払っている。気が付いたら終わっていた、としか言いようが無い。今更辺りにぶちまけられた血の臭いが鼻を突く。

「怪我は、無い？」

確かに護られている間に怪我はしてないが：

俺は何やらぼんやりしている視界で左手を見て、次いで背中からの鈍い痛み顔に顔を歪める。

「お前さんの目じゃ怪我には見えないんだな、これは」

左手を彼女に見やすいよう上げようとするが力が入らない。
血を流しすぎたかな……視界に霞がかかってきた。

目の前に彼女の顔があるんだが、輪郭がはつきりしてない。

「よっと！ 大丈夫！？ しかりて！」

何言ってるのか分からねえよ。いきなり真っ暗になって何も見えな
いし。

死因は多量出血かねえ？

あ、お礼言つの忘れてたな……

ここから俺の記憶は、ない。

誰かが呼んでいる。

家族でも友人でもない、誰か。

何かを言っているのだけれど、それを理解することが出来ない。

「

」

男なのか女なのかも分からない誰か。

だけど俺はこの声を聞いたことがある。

いつだったか覚えていない。

俺はこの人にとっても、大切なことを言われた気が

目を開けると真ん前に少女の顔があった。

開いた窓から気持ち良い風が入ってきて、カーテンと俺の前髪を揺らす。

「くっ、くくくくっ」

笑うのを我慢しているくぐもった声が聞こえる。

すげえ恥ずかしい。

何がつて、思いつきり叫んでしまったことが。

普通は怒られるだろうが何というか、こう、変な叫び声でそれがツボったらしい。

「おい、笑うなら笑え」

ベッドで上半身だけ起こして横の椅子に座っている人物をジロリと睨む。

余計に恥ずかしいだろうが。

俺の自業自得ではあるが、それでも顔を俯かせて肩を震わせている、後ろ向きのアホ毛がついた蒼い髪の少女　鈴谷　蒼香すずたに　あおかというらしい　に恨みがましい視線を向けるのをやめなかった。

「はあ。ごめんごめん」

ようやく一息ついたか。こいつ10分ぐらい笑うのを我慢して肩を震わせてやがった。

いつもの友人たちの誰かなら殴つてでも止めさせるけど、女の子だし、恩人でもあるわけで。

結局止まるのを待つしかなかった。

「じゃあ何から聞きたい？」

少し顔を緩ませて鈴谷が聞いてくる。やっぱり殴つてやろうか、こいつ。

いやいや、ここでいちいち反応してたらいつまで経っても話が進まん。

そつだな…

「あの後、どうなったんだ？」

あの後とは俺が気絶した後のこと。

「そっか、そこから話さなきゃいけないね」

話によると、鈴谷は俺の左手にちよつとした治療をして、背負って近くの町まで運んでくれたらしい。

そのまま治療院（？）へ直行。治療費用も立て替えてくれたとのこと。鈴谷には頭が上がりらん。

治療してくれた人が言うには、結構危ない状態だった、らしい。

「じゃあ何で俺生きてんだよ？」って聞くと、どうやら魔術って言うものがあるらしい。うさんくせーとか思いながら聞いてたら鈴谷に真顔で「魔術、知らないの？」とか聞かれた。割と一般的なものなんだとか。

俺が知らなかっただけでももしかしたらあったのかもしれないけど、少なくとも俺の周りで聞いたことはない。だけど鈴谷は知ってて当たり前のように言ってきた。

だから、ちよつと聞いてみたんだよ。「日本、アメリカ、ヨーロッパ。どれでもいいから聞いたことある？」って。

案の定、鈴谷は横に首を振った。

まあ、魔術なんて単語が出た時点で覚悟はしていたけど、それでもそんな覚悟だなんて無駄に終わった方が良かった。

……異世界、つてやつかねえ？

多分、あの時の魔法陣みたいなのが、あっち（俺のいた所）とこっち（鈴谷がいるここ）を結ぶ門^{ゲート}みたいな物で、事故なのか意図的な

のかは分からないけどこっちに飛ばされた、と。
推測でしかないけど大体こんな感じだろう。

「ねえ浅木君、ちょっと聞いてもいい？」

鈴谷が真面目な顔してる。

何だろうか？

「昼ご飯は何がいい？」

くっ、と俺の腹が鳴く。タイミングいいな、俺の腹。

もうそんな時間なのか。この部屋時計が無いから分からなかったな。
ベッドから降り窓に向かう。

ここは2階の一室らしい。地面が少し遠い。

なるほど、窓から身を乗り出して空を見上げると、そろそろ太陽が
真上に来るような感じである。

キョロキョロと見回してみる。

どうやら俺が寝かされていた建物は表通りに面しているようだ。

大人が両手を広げて5、6人は並ぶことが出来そうな道が左右に
続いていて、昼だというのに少なくない人数が歩いている。

「どうしたの？」

後ろから鈴谷が声をかけてくる。

「いや、昼なのに結構人が歩いてるな、と思つてさ」

鈴谷の方へは向き直らず、外を見ながら言葉を返す。

向かいの店の看板らしきものを見ると漢字でただ一文字“漢”と書

いてあった。

建物の外観を見ると真っ白な壁に“漢”とでかでかと書いてあるだけだった。

……何の店なんだろうな、あれ。

「この通りは結構何でもそろってるからね。お昼時ならレストラン目当ての人たちじゃないかな？」

へえ、そうなのか。

でも向かいの店はレストランって雰囲気じゃあないよな。すげえ気になる……。

「ちなみに向かいは今人気のレストランだよ？ 行ってみる？」

マジかよ！？

そこもレストランなの！？

しかも人気があるの！？

好奇心は猫をも殺す、という諺ことわざもあるが、人間好奇心には勝てないのだよ。

「昼飯はそこがいい」

いいよー、と鈴谷の返事。

どんな店なんだろうな？

この時はまだ、俺に降りかかる災難を知るよしもなかった……。

P a g e 1 : 助 かつ た ! 腹 減 っ た ! (後 書 き)

更 新 速 度 が 遅 く て す み ま せ ん 。

1 週 間 に 1 度 出 来 れ ば 良 い 方 な の で ご 了 承 下 さ い 。

俺たち二人はピクピクと指先を動かすことしか出来なかった。

「大丈夫う？ おしほり持ってきたわよあ？」

従業員の1人が声をかけてくる。

その気持ちは嬉しいが、あんたも今は恐怖の対象なんだよ……。従業員はおしほりをテーブルに置き、厨房へ戻って行く。

いや、うん。

確かに俺が行こうとは言ったよ。

好奇心に負けた俺が悪いのも分かってる。

でも鈴谷、先にここの店の特徴を言っておいて欲しかった……。

「あらん？ 御注文はお決まりいん？」

「いらつしゃいませえん。何名様かしらん？」

「またのご利用、お待ちしてますわん」

この店、従業員が全員オカマだった。

少しだけ時を遡るさかのぼ

「あっはっはっはっは！」

女性の笑い声が店内に響き渡る。

俺の右隣で大笑いしてるのは俺たちがいるレストラン“漢”の店長、フレアさん。

日本人でも有り得ない様な真直ぐ腰まで伸びた綺麗な黒髪とツリ目がちの黒目、火が付いていない煙草を咥えているのがトレードマークの美人さんである。

ちなみに服装は紺のジーンズと黒い長袖のシャツ、その上に漢と書かれたエプロンをつけている。

で、なんで大笑いしているかという俺たちの状態が原因だろう。

「あの、笑ってないで助けてよ……」

鈴谷が消え入るような声でフレアさんに助けを求めているが効果はない。

何というか、今の俺たちを表す言葉は1つしかない。

オカマに埋もれている。

2人や3人ではなく総勢12人のオカマに顔や体を触られている。少し見方を変えればただの変態集団である。

「結構いい体してるわねえ、ボウヤ」

「でも私たちのカラダの方がすごいわよん？」

「この子なら私は捧げてもいいわねえん……」

周りのオカマたちが何か言っている。

なんというか、普通に狙われていた。

つか体を触るな捧げるとか言うな目の前で服を脱ぐんじゃない！

最初はよかった。

鈴谷とこの店長、フレアさんは知り合いだったらしく、店に入つて顔を合わせた時には久しぶりー、みたいな会話をしていた。

で、そこから急展開。フレアさんが近くにいた従業員に鈴谷の倅せがれが来たぞ、などと言ったらいつの間にか店の一番奥の席に座らされもみくちやにされ、さきほどの会話がなされ、冒頭に至る。

短い説明だとは思うが実際こんな感じだった。

「あー、悪かったね。」

ぐったりとした俺たちにフレアさんが声をかけてくる。

昼飯食いに来たのに、何も食わずに疲れ果てるってどういうことだよ……。

少しだけ体を起こす。

俺の前で突つ伏している鈴谷は最早体を起こす気力も無いのだろうか、右手だけふらふらと何かを探すようにテーブルの上をさまよっている。

下手したらトラウマになるよな、あれは。

とりあえず目の前でふらふらとうつとおしい鈴谷の右手に、先ほど持ってきてもらったおしぼりを投げつける。

キャッチ、そして俺の顔面にリリース。
べしやり、とテーブルへおしぼりが落ちる。
……元氣あるじゃねえか。

「ふーちゃん、誰あの人たち……」

少しだけ顔を上げて鈴谷が尋ねる。
ていうかふーちゃんって……フレアの“ふ”だけ取ったのか。
なんて安直な。

「あいつらは全員元傭兵でね、あんたの父親を目標にしていた奴らさ」

ふーん、傭兵ねえ。

まあ森にあんな凶暴な動物もいるから必要なんだろうな。
でも、あの人たちに守られたくはないな……。

オカマたちにもみくちゃにされている時に聞いたが、鈴谷の親父さんは傭兵や魔術師の間では結構有名な人なんだとか。

ちらり、と店内を見回す。

人気があるというのは本当のようで、オカマたちがせわしく店内を行ったり来たりしている。

「綺麗な魔力だと思ったら傭兵さんだったのか……」

綺麗な魔力？

カラダハキレイデシタヨ？

……っは！危ねえ、変な世界に連れて行かれるところだった。
変な妄想を消すために鈴谷に向かって問い掛けてみる。

「なあ、魔力に綺麗とか汚いとかあるのか？」

そもそも魔力って見えるもんなのか？

「ん？ 少年は魔術師じゃあないのか？」

問いかけた鈴谷ではなくフレアさんから言葉を返される。

声がした方を見るといつの間にかフレアさんの背後に目を見開いたオカマたちが集まっている。

お前ら仕事はどうした。

「あー、そっか。浅木君は魔術知らないんだっけ」

ようやく体を起こした鈴谷が言ってくる。

まあ、そんなもんが無い世界にいたしな……。

「……」

フレアさんは膝を組んで右手をあごに当てて何やら考え込んでいる。
美人はこういう姿も絵になるな。

「軽く説明するね？ 綺麗、汚いっていうより澄んでいる、濁っているって言ったほうが表現的には合ってるかな」

鈴谷はどこから取り出したのか、ペンで紙に魔力、と書いている。
あんまり変わらん気もするけど軽く頷いておく。

「それでね、これはまだちゃんと解明されてないんだけど魔力っていうのは循環するんだよ。人の体でも、動物の体でも、世界という

大きなくくりになっても。人は循環させる過程で自分たちが扱いやすいように無意識に魔力を変換させちゃう」

悪いことじゃないんだけどね、と言いながら鈴谷は紙に世界という円と、その中に木と人と犬？の絵を描き、魔力が循環しているように外側から内側へ、内側から外側へと矢印をつける。

「簡単に言えば魔力っていう透明な水に自分の色の絵の具を足すんだけど、魔力の制御っていうか、扱いが下手だと体の内から外に出すときに濁った感じで出て来るんだよ。だから澄んだ色を纏まとっている人はちゃんと修練を積んだ人が大半で、ここの人たちは修練は欠かさなかっただろうから、澄んだ、綺麗な色の魔力を纏まとってる」

命に関わるからね、と最後に付け加え鈴谷はペンを置いて肩をすくめた。

途中までちゃんと説明に使われていた紙は、今はただの落書き用紙になっていた。

「要するに濁り具合で真面目に修練してるか分かって、ここの人たちは澄んだ魔力を纏まとっているからちゃんとした実力を持っている人たちってことか」

「ん、まあ真面目に修練しても壊滅的に才能が無い人とかは濁ったままだったりするけどそれは例外だし、相手の実力を計る目安にはなるよ」

へえ、あのオカマたちは実力者で澄んだ色を纏まとっている、ねえ……。一瞬、カラフルなオカマたちを想像してしまいテーブルに伏せて悶絶する。

くう、と俺たちの腹から音が聞こえる。

そういえばまだ何も食べてないんだっとな。俺は注文するためにフレアさんに向き直って口を開こうとした

「少年、何であんたはここにいるんだい？」

有無を言わせない声音で問いかけてくる。

どうやら昼飯はもう少し後になりそうだ

空気が張り詰めている。

それは俺の隣にいるフレアさんからの重圧プレッシャーが原因。

なんで俺がここにいいのか、ねえ？

そんなもんこっちが知りたいわ。

鋭い視線に気圧されるが、負けじと睨み返す。

「ここは魔術師のための町でね、周囲の森の入り口に結界が張ってあって、魔術師しか通れないようになってるんだ」

要するに魔術師ではないと言った俺がここにいるのはおかしい、と。関係ない人を拒む結果ね、魔術って便利だな。

俺だったら部屋の入り口に張っておくね、主に家族が勝手に入らないように。

「蒼、あんたも分かってたんだろう？ 何で連れて来たの？」

む？

そうだ、鈴谷は分かかって一緒にいたんだよな。

何でだ？

「……放っておけなかった」

「なんだって？」

「放っておけなかったんだよ！ 森にいたから魔術師だと思ってたらベアウルフに襲われて逃げ回ってるし、そのまま殺されそうにな

つちゃうし！ そりゃあ怪しいとも思ってたさ！ だけど！ そんなことよりも目の前で人が死ぬのは嫌だし、もう友達だもん、見捨てられないよ……」

叫び、そして消え入るように声が小さくなってゆく。

目の端に少しだけ涙を浮かべながらフレアさんを見据えている。

まあ、な。

死なれるのは怖い。

ただ、鈴谷の定義が人より少し広いだけの話だ。

知り合って間もない俺を友と呼ぶのだからどれほどお人好しなのかとも思うが、その言葉は今の俺にとっては嬉しいものだ。

だから

「ありがとう鈴谷、もういいよ」

俺がここにいないればいいだけの話。

わざわざ命の恩人の立場を悪くしてまでここにしようとは思わん。

「簡単に引き下がるんだね」

「鈴谷に迷惑を掛けたくないんでね」

即答して立ち上がる。

それにここで説明しようにも俺自身、どうやってここに来たのか知っている訳じゃないから納得のいく説明なんて出来ないし。

さて、他の所に行くにしたって森の中を通らなきゃいけないんだよな……。

「なあ、誰か近くの町まで連れて行ってくれないか？」

フレアさんとオカマたちを見る。

この際オカマのうちの誰かでもいいから一緒に来てくれ。

俺1人じゃ道が分からないうえに確実に死ぬだろうからな。

「……いいわ。うちの「私が一緒に行くよ」蒼!？」

鈴谷も立ち上がった。

なんでそこでお前が出てくるんだよ!

お前に迷惑掛けたくないから行くのに!

俺がこの空気に耐えられないってのもあるけど!

「ちょうど良かったんだよ。私もそろそろこの町から出るつもりだ
つたし」

「……あかい暁さんを探しに行くの？」

?

アキラって誰だ?

「それもあるけど、夢があるからね」

行こう、と声をかけてさっさと店を出ようとする鈴谷。
慌てて追いかける。

「待ちな少年」

後ろから呼び止められたので、上半身を捻って見ると、フレアさんがこっちに緩く何かを投げていた。

片手で受け止めるとジャラリ、と音がする。
多分、お金が入った袋。

「客に対して何もしてやれなかったからね。少しだけ持って行きな」

俺には価値は分からないがオカマたちがフレアさんに何か言ってるから、結構なもんなんだろう。

フレアさんにちゃんと向き直り、深く頭を下げてから既に行ってしまった鈴谷を追う。

「蒼を頼むよ」

店から出る時に小さくだけど、確かに聞こえた。

店の前で鈴谷は待っていてくれた。

「遅いよ、浅木君」

鈴谷は笑いながら言ってくる。

朝俺たちがいた、向かいの家に歩き出す。

10秒ほどで玄関に着き、家にかかる。

「なあ、本当にいいのか？」

付いて来てくれるのは嬉しいが、俺の為にこいつを引っ張りまわすことはしたくない。

「いいんだよ。本音を言えば何かきつかけが無ければずっとここにいたかもしれないから」

私は君を利用して一緒に、などと付け足して言うが利用されているだなんて思えないし、思わない。

荷物持ってくるから待ってて、と鈴谷は2階へと上がっていく。持つてくるってことは一応準備はしてたんだな。上で物音がしている。

旅に出るようなもんだからな……。

あ、そういえば。

「アキラって誰なんだ？」

大きな鞆を持つて降りてきた鈴谷に聞く。
夢も聞いてみたいが今は後でいいや。

さて、アキラね。名前からして男だよな。

彼氏が、彼氏なのか！？

お父さん許しませんよ！？

どこの馬の骨とも知れない奴にうちの娘はやれません！

馬鹿なことを考えてると思いつつ言葉を待つ。

「ああ、私のお父さんだよ」

調子に乗って申し訳ありませんでした。

マズイ、土下座したいくらい恥ずかしい。

何がお父さん許しませんよ、だ。相手はそのものじゃねえか。

「私が小さい頃に出かけたまま帰ってこないんだよ」

「……」

重いな……。

鈴谷は笑っている。

なんでこいつは笑ってられるんだ？

「大体考えてることは分かるけどね、ふーちゃんとか優しかったから寂しくもなかったんだよ」

「あ、フレアさんといえば」

先ほど投げ渡された物を鈴谷に渡す。

「少ないけど持って行けっさ」

「……！」

驚いているから、やっぱり結構な額だと思う。

俺に頼む、って言ったくらいだからな。よっぽど心配しているんだろっ。

旅立つ子を見守る親、じゃちょっと失礼だから旅立つ妹を見守る姉といったところかな。

「ふーちゃん、ありがとう……」

さて、感動的な場面なんだが何も食べてないんだな。

だから人の生理現象なんだから仕方ない訳であって。

ぐうう、と大きな音が俺の腹から響く。

顔が熱い。きつと俺の顔は真っ赤であるう。

恐る恐る鈴谷を見ると、向こうも顔を真っ赤にしてこちらを見ていた。

ブルータス、お前もか。

「つぶ、あははは」

「くっ、くくくく」

耐えられずに俺たちは笑い出す。

「何か食べて、それから出発かな」

「ああ、よろしく」

どんな旅になるかは分からないけど、少なくともこいつが一緒なら
退屈なんてなさそうだ。

「むむむむむ、むゝ？」

昼過ぎということもあって、明るい森の中歩きながら唸る俺。
それを3歩ほど先から変な目で見る鈴谷。

集中集中。

俺がまだ理解しえないものが右手の掌に集まって行くイメージ。
……来た！

「てりゃああああ！」

気合と共に右手を前に突き出すが別に何も起こらなかった。

「はぁ……」

おい、溜息を吐くんじゃない。悲しくなるだろうが。

町を出てから20分後の出来事である。

さて、何をしているかは少しかけ時間を遡って説明しよう。

鈴谷と俺は適当に作ったサンドイッチを食べて、町の外へ出た。

町の外に出る為に鈴谷は少し着替えていたが、白いポロシャツのよ
うなものと膝上5センチ程度の青いスカートだった。

本人曰くスパッツを穿いているからスカートでいい、だそうだ。

どのくらい掛かるのか聞いてみたところ森を出るのに30分、そこ
から近くの町まで行くのに30分。合計1時間。
流石にそんな時間を無駄にはしたくないから目下、一番気になって
いることを聞いてみた。

「なあ、俺も魔術を使えるようになれないかな？」

「ん？ なんで急に」

ひょい、とそれほど高くない段差を飛び降りて言葉を返してくる。

俺も鈴谷に続くが着地音が明らかに重い。

急って訳じゃない。言うタイミングが無かっただけで、この世界に
魔術があると理解した時に本当は聞きたかった。

自分の身を守るためってのもあるけど、もっと馬鹿らしい理由。
だってカッコいいじゃないか、魔術師だなんて。

「まあ、ずっとお前に守られてるのも気が引けるし、何よりも格好
悪いしな」

本音は言わずに当たり障りのないことを言っておく。
くるり、と振り返ってくる。

そんなことをしたら危ないぞ。

「うん、確かに私もそんなに強い訳じゃないからちよつどいいかも
ね」

お？

「じゃあ……」

「使えるかどうかは努力（と才能）次第だけど私の知ってることは教えてあげる」

ガッツポーズ。

よっしゃ！

なんかボソツと言ってた気もするけど無視！

「じゃあ軽く説明するね」

「頼むよ」

軽く伸びをしながら鈴谷は俺の一步前を歩く。

木の根が張り出したりもしているが軽く飛び越えて行ってる。

「んゝ、基礎から説明しなきゃいけないんだから……。そうだね。

魔術には“属性”があってね、1人1人属性は違うんだけど大切なのは『自分の属性以外は例外を除いてほとんど使えない』ってこと」

どんなものでも使えるわけじゃないのか。

合体魔術！ とかやってみたかったのに。残念だ。

説明をしながらでも鈴谷の速度は落ちることなく森の中を歩いて行く。

「色の話をしたときに『自分の色』って言ったでしょ？ あれはち

「やんと言つと自分の属性の色なんだよ。」

「属性の色？」

あれか、炎は赤とかそんな感じか？

「うん、例えばふーちゃん。ふーちゃんは純粋な“火”の属性だから真っ赤なんだよ」

「純粋な、つてのは？」

「ああ、ごめん。別に属性は1人1つって決まってる訳じゃなくて、3つくらいまでなら結構ありえるんだよ。それで、2つ以上属性を持つてる人のことを総称して“ヴァリアル”。古代の言葉で“様々な”って意味。それに対して1つだけの人は“ゼヌイン”。“純粋な”って意味なんだ。でもこれは総称だから1人に対しては純粋な！、とかって言うだけ」

これは別に覚えなくていいよ、と付け足される。

3つまでなら普通にあるのか！

夢の合体魔術の可能性が再浮上！？

階段状になっているところを軽々登っていく。俺は無理。

「ちなみに鈴谷は？」

息を整えながら聞いてみる。

こいつが2つ以上持ってたなら合体魔術出来るのか聞いてみたいし。

「……」

……こいつ、指折って数えてやがる。

「色は虹、っていうか、なんかよく分からなくて、属性は今のところ、8つ、かな？」

おい。

お前3つくらいまでが普通って言ってたじゃねえか。

倍以上あるお前はいつたい何なんだ。

しかも今のところとか言いやがった。それ以上増やすつもりか。才能のない人たちに分けてやれ。

いろんなことを考えてはいるが殆ど逆恨みのようなものだ。

「いや、私もおかしいとは思っし、実際大変なんだよ？」

天才様がなんか言ってやがるよこんちくしょう。

溜息なんぞ吐いてやがる。幸せが逃げるぞ。

「ねえ、浅木君。例えばホースを使って水を撒くときに出す所が広いのと、狭いの。どっちが遠くまで飛ぶ？」

ん？

どっちがって。

「そりゃ、狭い方だな」

家の庭でよく遊んだよ。

こっちにホースがあることに驚いたけど。

「そうでしょ？ 私が持つてるのは全部広い奴で、狭いのを持って

る人と力比べすると絶対に負けるんだよね」

あー、器用貧乏なのか。そりゃ辛いわな。

ゲームとかでも火力が足らなきゃ長期戦になってそのままズルズルと負けたりするし。

ん？

でもゲームだと基本的にそういう奴は後のほうになるといきなり強くなったり……。

最終的には究極の器用貧乏で最強ですね。

「やっぱり卑怯じゃねえか！」

「えええ！？」

とりあえず行き場のない俺の憤りを叫ぶことで発散させておく。
あ、話ずれてた。

「それは別にいいや。2つの魔術を合体！とか出来ないの？」

別にいいと言われた、などといじけているが無視。

俺の質問の方が大事です。よってさっさと詳細をリリース。

「魔術を合わせることは……出来ないことはない、くらいかな。聞いたことはあるけど実際に使ってる人は私の周りにはいなかったし」

そつえば忘れてたよ、などと思いつくように言っている。

一応出来るのか。いや、俺が2つ以上属性無いと意味無いんだけどさ。

「で、じゃあ俺はいくつ持ってた何の属性なんだ？」

「……」

おい、なんだその遂にその話になっちゃったか、みたいな顔は。目を逸らすなこつちを見る溜息なんぞ吐くんじゃない！

「……分からない」

「は？」

なんて言った、こいつ。

「だーから！ 分からないの！ 魔力があることは確かなんだけど色が見えないんだよ！ こんなことは初めてだし全く検討もつかないの！」

Oh, shit!

神様はどれだけ俺のことが嫌いなんだよ！ 別に信じてないけど。

「じゃあ俺はどうすればいいんだよ？」

「とりあえず初歩の初歩からやってみようよ。一通りやって何も変化が無かったら町で調べてみよう」

はあ、俺の魔術師への道のりは酷く困難なものなようだ。

以上、回想終了つと。

で、今俺がやってるのは鈴谷が言ってた初歩の初歩、自分の中にある魔力を感じることに。

その前に魔力がどんなものか分からんって言ったら、そこらへんは気合で！　なんて言われた。

ちょっと殴ってやろうとも思ったけどこっちは教えてもらおう側だし、何より1人1人感覚が違うそうなので手探りでやるしかないらしい。

「ぬおおおお！」

気合と共に右手を突き出す。

変化無し。

「いや、さつきから掛け声変わってるだけじゃん」

鈴谷から冷静なツツコミが入るが気にしたら負けなので無視。

しかし、かれこれ50回はやってると思うんだけど何も変化が無いってどういうことだよ。

叫びすぎて喉が痛いっつうの。

「もしかして壊滅的に才能が無いのかなあ」

前から何か聞こえる。

「つかおい、人がせつかく考えないようにしてた事をそんなに簡単に言うんじゃない！」

「おい、鈴た「しっ！」……？」

文句を言ってやろうと口を開いたらいきなり片手で制された。

何なんだよ？

「小さくだけど、遠吠えが聞こえる。急ごう」

そう言っただけ鈴谷はスピードを上げる。

俺には全く聞こえなかったけど鈴谷が言うなら間違いないのだろう。あの時の恐怖を思い出し、そりゃマズイ、と鈴谷を追って少し駆け足になる。

「これくらいの速さなら多分追いつかれないから、少し落ち着いて」
半歩前に行く鈴谷に声を掛けられる。

そんなに焦ってたか？ 俺。

汗が目に入りそうだったから手で拭^{ぬぐ}うと、結構ベツタリと手に付いてくる。

どうやら自分の状態が分からないくらいには恐怖で頭が麻痺していたらしい。

「仕方ないと思うけど、もう少し心を鍛えたほうがいいかもね」

いい案だとしても言わんばかりに楽しそうに笑っている。

俺が馬鹿みたいじゃないか。

大きく深呼吸して、むせる。

少し疲れてて、しかも遅くない速さで歩いてるんだから当たり前だよな。

大丈夫？ と声を掛けてくるが問題ない、さっきよりは落ち着いている。

心、ねえ。

恐いもんは恐いが、それに立ち向かうだけの勇氣を持ててことかね。

どっかのマンガであつたけど『大切なのは1歩を踏み出す小さな勇氣』だっけ？

……無かつたかなあ？

まあ、今の俺に必要なのは正にそれだろう。

1歩というのが具体的にどういうものなのか分からないけど、分からないなりに進んで行くしかないだろう。

俺にもはつきりと聞こえるほどの遠吠え。

「やばっ、見つかった！？ 走るよ！ って早っ！？」

言つと同時に鈴谷は駆け出す。

俺は遠吠えに反応して言われる前に走っていたけどな！

つか見つかるの早いな！ さっきからそんなに時間は経ってないぞ！？

「ごめん！ 多分警戒網に引っかつた！」

頼むぜ、お前さんが頼りなんだから。

所々にある段差を全力で飛び越えて速度を落とさないように走り、鈴谷について行く。

うん、2、3秒で抜かされたよ。

あんまり運動してない割には足は速いほうだったんだけどな。

「全力で走つてて大丈夫なの！？ まだ少しあるよ！？」

真横から少し大きめな声で言ってくる。

ふと言われて気付いたけど、疲労感っていうのはあまり感じてない。

だけど、俺より速く走ってるお前に言われたくはないわ。

「大丈夫だ、それほど疲れてない」

とりあえず返事はしておく。

俺、体力無かったんだけどなあ。

「じゃあとりあえず森から出るよ!？」

「わかった」

横目で見ると鈴谷は腰の小さなポーチから何やら小さな石を取り出して右手に収めている。

前はもう森の出口のようで、森の外は光で見えなくなっている。

『集え、赤き炎。我が敵を貫け!』

眩しい光に包まれるように飛び出して、後ろに振り向く。

殆ど同時に4匹飛び掛かってきているが、鈴谷は向かえ打つように右手を突き出す。

『イグニス・ジャベリン
業火の槍!!』

刹那、10数本の燃え盛る細身の槍が飛び掛ってきていた狼たちに突き刺さり、その体を燃やしていく。

これで弱いのかよ、と思うほどの火力で燃えている。
炎に巻かれ、重い音をたてて地に伏していく狼たち。
生きた肉が焼ける特有の臭いがするが我慢する。

「すげえな」

灰も残らずに燃え尽きてしまった。

この世に生きていた証拠はもう無いのだ。

こんな物騒なもんをそこらの奴がポンポン使うつてのは結構恐いな。気分を変える為に、これから行くであろう道を見てみる。

どうやらこの森は小高い丘の上にあるようで、少しだけ下っていく様な道である。

「ん……、悪いね」

小さく声が聞こえたのでそちらを向くと、鈴谷は両手を胸の前で組んでいた。

……少し優しすぎる気もするけど、これがこいつの善い所なのだろう。

俺は鈴谷に合わせるように、1歩後ろで形だけでも同じように両手を組んで祈った。

「なあ、あれで威力が低いのか？」

先ほどの炎の槍を見て疑問に思ったことだ。

こいつは自分の魔術の威力は低いって言っていたけど、あれはそんな生易しいもんじゃないかった。

風で飛んだだけかもしれないけど最終的には灰も残らなかったし。

「ああ、あれは威力を高める道具を使っただよ」

そう言つて、森で取り出していた石を見せてくる。

手の平に収まるほどの透明で綺麗な石で、それ自体が淡く輝いているように見える。

しかしまあ、そんな道具があるのか。

「このチート野郎！」

「意味は分からないけど何か馬鹿にされてる気がするよ」

そんな、森を出た後のやり取り。

それからはこれといってハプニングは今のところは無い。

周りは見通しの良い緑の丘で、街道沿いに歩いて行くだけである。

所々に小さな村の様な集落があったがそこにも寄らず、ひたすら魔術の練習をしながら歩いて行くのだが、つまらん。

いや、練習がつまらない訳じゃない、継続は力なりってどこかの偉

い人も言ってたし何より地道な作業は嫌いじゃない。
ただ全く魔術が使える予兆も何もなく、頼みの綱は時折こっちを見て笑っただけ。愚痴の1つや2つ言いたくもなるつつの。

「あ、忘れてた」

目線だけ鈴谷に向ける。

何だよ、こっちは忙しいんだ。

それともようやく何かコツでも教えてくれるのか？ などと思った
が違うようで。

「いや、直接的な魔術のことじゃないんだけどね？ 町に着いたら
って言うか、まあ、名前で呼ぶようにしてね？」

「……なんか理由があんのか？」

いや、だってねえ。いきなり名前で呼べ、だなんて言われても訳が
わからんよ。

「魔術には他人を呪うようなものもあるから、フルネームだとそう
いったものの対象になりやすいし、呪いの効果も完全なものになっ
たりするんだよ。だからフルネームで自己紹介する時は相手のこと
を信頼してる時が普通なんだよ」

ふーちゃんも本当はもっと長い名前なんだよ、と言ってくる。

呪いか。やっぱりどこの世界にもあるもんなんだな。

そこでふと思い至る。

………待て、俺とお前は普通にフルネームで自己紹介してたじゃねえ
か。

「ちなみにユーキは信頼出来ると思って名乗ったから！」

ピースしながらそんなことを言うんじゃない、こっちが恥ずかしい
つつの。

しかもいきなり呼び捨てかよ。

顔赤くなってるやないよな、と手を当てて確かめてみると、案の定風邪
でも引いたかのように熱い。

こいつのその信頼の基準はどこから来てるんだろっとな、などと思い
つつも歩みは止めずにむしろスピードを上げる。

いや、だってこんな（恐らく赤くなっているであろう）顔を見られ
たら恥ずかしいし。

ええいつ！ 気を紛らわせるために練習だっ！

「あ、ほら。名前で呼ぶ練習もしておいてよ？ 呪いって結構厄介
なんだから」

え？

首をゆつくりと、いつの間にか横に並んでいた鈴谷に向ける。

俺も、お前を、名前で？

目線で訴えかける。

名前、ちゃんと、呼んでね？

微笑を返してくる。

アイコンタクト成功！ 全く嬉しくねえ！

いや、鈴谷の返事は俺の勝手な想像だけだな、大体合ってると思う。

「何さ、ちよっと『蒼香』って呼べばいいだけの話でしょうに」

俺が呼ぼうとしてないのが分かった途端に頬を膨らませている。
子供か、お前は。

「そのちよつとが難しいんだよ……」

はあ、と溜息1つ。

女子を名前で呼ぶだなんて女友達がいなかった俺にはハードルが高すぎるんですよ、鈴谷さん。

……友達、か。あいつら元気かな？

父さんと母さん、姉貴も心配してるかな？

……姉貴は何も言わずにぶん殴ってくるだろうな。

もつと小さい時に家出をして、帰ってきたときに父親でも母親でもなく、姉貴に殴られたことがあったな。

元の世界のことを考えてしまう。

あそこにいた時はつまらないと思っていたものがこんなにも貴いものだとは思ってもいなかった。

「ま、考えてもしょうがないか」

せつかく来たんだ、何かを成してから帰ろっじゃないか。

前向きに前向きに、っと。

「で、私の名前は？」

「人がせつかく上手く纏めようとしてんだからちったあ空気を読めよ！」

思いっきり叫んで返してやる。

うまく逃げたと思ったんだが、駄目だったか。

「そもそも何で苗字じゃ駄目なんだよ？」

鈴谷って呼べばいいじゃねえか。

別にフルネームが分からなければいいんだし、俺が呼びやすいし、一石二鳥じゃん。

「え？ 名前の方がパートナーっぽいじゃん、なんとなく」

「いつの間に俺とお前はパートナーになったんだよ！？ 初耳だよそんなこと！」

さつきから叫んではかりで喉が痛い。

鈴谷はこちらを不思議そうに見ているが、俺は鈴谷の思考回路が不思議でしょうがない。

ああ、そっか。と鈴谷はどこか納得したような表情になる。

「ごめんごめん、言うの忘れてたよ。私の夢はね、自分の旅団を作ることなの。でも2人以上じゃないと作れないから今までは出来なかったんだけど、今はユーキがいるからね。ユーキはよく考えことしてるから探し物とかだと思っただけで、それだったら旅団が有名になれば見つけやすくなるし」

それに行く当ても無いでしょ？と、言われる。

まあ確かに行く当てもない、頼れる人っていうか知ってる人がこいつとフレアさんくらいだし、ついでに言えば金も無い。

更にこの世界には魔物もある。対抗する手段も無い。

無い無い尽くしの俺に最初から選択肢なんぞも無いわけであって。

「はあ、分かったよ。よろしく、蒼香」

「うん！」

満面の笑顔と一緒に返される。

正面に小さくだけど町が見えてきた。

蒼香は今は前だけを見ている。

まあ、取りあえずしばらくは厄介になるとしますかね。

「結構デカイ町なんだな」

誰とも無く独り呟いてみる。

そう、独りでだ。

結論から言おうか。

迷子だ。

「ここは町のどこら辺なんだかな」

俺の言葉は店の呼び込みの声にかき消され、誰の耳に入ることはない。

太陽がまだ真上にある、と言っていい時間に町に入ったのだが、5分くらいしてはぐれてしまった。

それというのも俺が見たことのないものに目を奪われあっちへフラフラ、こっちへフラフラと彷徨さまよっていたからなんだが。

今俺がいるのは狭くも広くもないが、それなりに人通りの多い道の端。

そこでポツンと立って鈴谷、じゃなくて蒼香を探しているのだが一向に見つからない。

前を老若男女様々な人たちが通っているのをよく観察してみる。なにやら3メートル程の馬鹿でかいおっさんや、1メートルもないよ

うな老人もいるが、ここは異世界。気にしたら負けだろう。

「よう兄ちゃん、うちの商品見ていってくれねえか!? 珍しいもんばかりだぜ!?」

ずっと同じところに立っている俺に、座っているガタイのいい、上半身裸のひげを生やした露天のおっさんが大きな声をかけてくる。

「おっさん、俺金が無いんだよ」

町に入るときに蒼香から少しだけ貰ったが、これでどのくらいの物が見えるのかは分からないので無難に答えておく。

「金が無い!? なに、気にするな! 見るだけだったら無料だからなあ!」
タダ

正面に向かい合って言葉を返すがおおよそ商人のものとは思えない返事が返ってきた。

このおっさんいい人だ。

遠慮なくシートの上に並べられた物とおっさんの後ろにある刀剣類を見してみる。

イヤリングやネックレスの様な小物、ちょっとしたナイフ、大振りの剣、怪しげなビン、何に使うのか分からない変な形の置物など多種多様なものが雑然と置かれている。

手に取って見てもいいとのことなので取りあえずナイフに手を伸ばす。

所々に装飾があるがそれほど華美なものではなく、素人目だがまとまった感じがする。

刃渡りは大体20センチ程度、明らかに殺傷を目的としたもの。

「お、それか？ それは魔術師が鍛えたナイフで岩ぐらいならパテルのように切れるってもんよ！」

それなりに値も張るがな！と笑っている。

パテルってのは分からないけど言い回しからしてバターみたいなもんだろう。

こんなナイフでそんなことが出来るのか。魔術ってのはつくづくすげえな。

ナイフを元の位置に戻して他の物を見る。

「おっさん、これは？」

黒い石がはめ込まれている小さなイヤリングを手につ。

「おう、それはオブディアンのイヤリングだな！ 簡単に言えば魔除けだ！」

「これは？」

「それはドラゴンのウロコだ！ といってもそんなちっぽけなものじゃただの装飾品だな！」

「これはー？」

「そりゃただの置物だあ！ 家にでも飾っておけ！」

あー、楽しかった。

結構な時間おっさんと話していた気がする。その証拠に太陽が少し傾いている。

もう説明してもらってないものは無いな、と商品を見ているとおっさんが話しかけてくる。

「兄ちゃん、何か珍しいもん持ってんだったら物次第で交換してやつてもいいぜ？」

「いや、生憎連れから貰ったわずかな金くらいしか」

金で思い出した。

ズボンのポケットから財布を取り出して中を確かめる。
結構持つてるな。

数枚の小銭を取り出しておっさんに見せるようにする。

「なあ、これはどのくらいの価値があるかな？ 合金ばっかなんだけどさ」

「おお？」

俺の手から小銭を取っていつて目を皿のようにして見ているおっさん。

確か青銅とかで出来ていた筈だから、少しは価値があるんじゃないか？

ここでの金属の価値なんて分からないけれど、それでも換金すれば少しは足しになると思う。

おっさんは一通り見てからこちらに向き直る。

「結構いいもん持ってんじゃねえか！　ちよつとばかし量が少なえが、まあいい！　まけてやるよ！　何かひとつ持ってけ！」

「いいのか！？」

頷いてくれるおっさん。

驚いた。

せいぜいこっちの小銭で数枚返ってくる位だと思っていたのに、まさかそこまでしてくれるとは。

それにしても何かひとつ、か。

今の俺に必要なものを考えてみる。

……有りすぎて泣けてくるな。

優先順位の高いものはやっぱり身を守るための物だろう。となると

「これ、かな？」

「……兄ちゃん、そりゃ俺は嬉しいが流石に客にそんなもの持たせられねえよ」

俺が持ったのは刀身が80センチほどの剣。大体1キロくらいの重さで俺でもまだ振り回すことが出来る。

ブロードソードと言えはいいのだろうか。装飾品もなく簡素な造りの幅広の剣である。

うん、こいつが一番手に馴染む。

「おっさん、俺はこれがいいんだよ」

「でもよ……」

おっさんが洩るのは、これはおっさんが造った剣だからである。

このおっさんも魔術師で、傭兵業もやっているのだが鍛冶屋が夢だ
そうで簡易な工房でこんな剣や盾を造っているらしい。

おっさんの後ろに並んでいる刀剣類も全部造ったものだとか。

いやはや、格好いいね。

夢の為に傭兵になったとか、最高の武器を造るんだとか、そうい
った話を聞かせてくれるおっさんは子供のようだった。

「こいつらも使ってやらなきゃただ朽ちていくだけだぜ？」

「……」

いや、おっさんが洩る気持ちもよく分かるけど、これが一番使いや
すそうなんだからくれなきゃ困る。

俺が何も言わずに待っていると、遂に諦めたのか溜息を吐く。

「わかったよ。だがそれだけじゃ兄ちゃんに申し訳ねえからな、こ
いつも持ってたけ」

そう言つて、懷から小さな箱を取り出して俺に渡してくる。

開けてみると中には指輪がひとつ入っている。

これは……？

「魔力を高めるミスリル銀で出来ている。俺が作った物の中では最
高のもんだ」

ミスリル……ってあのゲームとかで希少価値の高い？

「いやいやいや！ 流石にそんな物を貰うわけにはいかないよ！」

「いや、それじゃあ俺の気が済まねえんだ！ 持って行ってくれ！」

お互いに譲り合わず、時間だけが過ぎていく

「何してんの、ユーキ？」

かと思つたらそうでもなかった。

蒼香がいつの間にか横に立つて呆れた様な目でこちらを見ている。
ちよつど良かった。

「なあ蒼香、これくらいのミスリルってどのくらいの値段になる？」

そう言つて箱に入れたままの指輪を蒼香が見やすいように差し出す。

「ミスリル？ ……この大きさなら小さな家位は買えるよ？」

「ちよつ、おっさん！ やっぱり受け取れないって！」

こんなんで家が買えるのかよ！？

おっさんに返そうとするが受け取ってくれない。

そつば向いたつて可愛くねえっの！

「で、一体何なの？」

「いや、実はな……」

蒼香に大体のあらましを説明。
終わつたところで蒼香は一言

「いいじゃん、貰いなよ」

「いや、だってこんな高価なもんを貰うわけには」

「それはこの人に対して失礼だよ。貰ってくれて言ってるんだから素直に貰っておきな」

確かにそうなんだけどな……。

おっさんの前に立って、改めて問う。

「本当にいいのか？」

「ああ。兄ちゃんは俺の夢を笑わずに聞いてくれたしな。それくらい当然よ」

そうか……。

俺はおっさんの夢はかっこいいとしか思わなかったけど、回りからなんか言われてたのかね。

「分かったよ、おっさん。ありがとう」

礼を言っ、取りあえず箱ごとポケットに突っ込む。
何だ？

おっさんを見ると何やら手招きをしている。
1歩近寄る。

「兄ちゃん、一回しか言わねえ。ちゃんと覚えろよ？」

さっきまでと違って小さく、真剣な声で話しかけられたので取りあえず頷いておく。

「『バルドロス・ディーノ』 俺の名前だ。バルドスって呼べ」

！？

フルネームか！

蒼香が言っていたことを考えれば俺のことを信頼してくれたってことなんだろう。

このおっさん、いや、バルドスもどれほど人が善いのだろうか。それだったらこっちも名乗り返さなければいけないだろう。

「『浅木勇輝』 ユーキでいい」

ぬっ、とバルドスの手が伸びてきてガシガシと頭を撫で回される。ええい！ うっとうしい！
1歩下がってバルドスの手から逃れる。

「よろしくな、ユーキ。困ったときは助けてやるよ」

「ああ、こっちこそよろしく」

そう言って二人で笑いあう。

やっぱりいい人だな。

「で、何ではぐれたのかな？」

後ろを見ると蒼香が笑っている。

物凄くイイ笑顔だ。

思わず1歩後ずさりしてしまうくらいには、その笑顔は凄かった。

「いや、それは……」

とっさに言葉は出てこなかった。
俺ピンチ。

「バルドスのおっさん！ 助けて！？」

さっき助けしてくれると言っていたのだから！

「ユーキ、流石に俺も痴話ゲンカの仲裁までしたくねえよ！ よそでやりなあ！」

豪快に笑って俺に死ねと言ってくる。
使えねえ！

襟首を掴まれて引つ張られる。

蒼香さん？ 少し首が絞まってるんですけど？

「じゃあ向こうでお姉さんと話をしようか」

そのままズルズルと引き吊られて行く。

気分はドナドナの仔牛だね。

「あーるー晴れた昼下がり、^{ひー}市場へ続ーく道ー」

あれ？

この道が市場へ続くかは知らないけど今の状況にぴったりじゃね？

周りからは変な眼で見られている。

まあ、歌っている男を引き吊る少女だなんて可笑しな光景だもんな。
おっさんがこちらに力無く手を振っているのが見える。

縁起悪いからやめてくれ。

余談ではあるがその後、カップルで男性が女性を放っておくと街中を引き吊り回されるということが多々あったそう。

Page 6：迷子と友情と（後書き）

かなり長くなってしまいました。

そして話の進まないこと。

飽きずに読んで下さっている読者様方、本当にありがとうございます。
す。

……別に長期停止のお知らせなどではありませんので。
これからもしよく願います。

ああ、神よ

汝が我等に試練を科すというのなら、我等は汝から授か
った力でそれを乗り越えよう

おお、神よ

汝が戯れで我等に災禍を与えするというのなら、我等は汝
から授かった力でそれに抗おう

厳かな雰囲気の中、静かにピアノの音が流れ聖歌が歌われている。
歌っているのは白い法衣を着て壇上に並んで立っている十数人の少
年少女。

子供たちの上にあるステンドグラスはそれほど大きくはなく、1人
のひと1匹の妖精の様なものが互いに向き合っている構図だ。

俺たちは今、町の中心部辺りにある教会にいる。

俺に魔術を教えるに当たって、俺の属性が何であるかが全く分から
ない為それを調べる事が出来る教会にやってきたのだ。

しかし今はちょうど午後の聖歌の時間だったらしく、やることも無
いのでこうして子供たちの歌を聞きながら蒼香と2人で後ろのほう
の長椅子に座って待っている。

ただ歌詞を聞く限り、この歌は明らかに神様を敬う様なものじゃな
いと思うんだが。

子供たちの歌は続く。

我等は子を育み、剣を手に取り、術を昇華させ

魂と命を賭して汝に抗おう

我等は生を喜び、死を悲しみ、愛を慈しみ
魂と命をもって此処に帰ってこよう

さあ我等の手で始まりの鐘を打ち鳴らそう

ピアノの音が小さくなっていく。

どうやら終わりのようだ。子供たちも壇から降りて一番前の長椅子に座っていた神父さんに駆け寄っている。

蒼香も立ち上がって子供たちに囲まれている神父さんの方へと向かう。

蒼香が近づいたのが分かったのか子供たちを少しだけ離す。

「こんにちは、蒼香さん」

「お久しぶりです、神父さん」

柔和な笑みを浮かべている神父さんと笑顔で話す蒼香。

周りではしゃいでいる子供たちに対してはピアノを弾いていたシスターが注意をしている。

シスターも中々新鮮でいいなあ。何より本人が美人だし。

ポケッツ、とシスターを見ていると誰かに蹴られ、殴られ、後頭部を叩かれた。

誰だよ、と思つて周りを見ると少年たちと蒼香がこちらを白い目で見ている。

「……」

「……」

「……」

何か言ってくれよ！

直接非難されるより無視されるほうがよっぽど心が痛いわ！
見回していると神父さんと目が合う。

神父さん、助けて！

若さとは省^{かえり}みない事ですよ、少年。（想像）

かつこいいけど、この場では使えないよ神父さん！

馬鹿なことを考えている間にもどんどん子供たちの目は冷たくなつていく。

「さて、そちらのかた。私について来て下さい」

どうしたものかと悩んでいると神父さんが助け舟を出してくれた。
そそくさと子供たちから逃げるように神父さんについて行き、小部屋に入る。

「ふう……、ありがとうございます。助かりました」

助けてくれたお礼を言う。

礼というのは基本的なことだからな。

神父さんの顔を見るとまだ何やら苦虫を噛み潰した様な表情である。

「私のこと、忘れてるのかな？」

あ。

鈍く重い音が教会に響いた。

S I D E : A o k a

「ユーキは放っておいて、と。調しらべを行いたいです」

「それはいいですけど……。彼は大丈夫なですか？」

地面に伏しているユーキ。

うん、動いてるから大丈夫。ちょっとやり過ぎたかな？　とも思っ

けどまあ子供たちに囲まれて叩かれるよりかはいいよね。

あ、痙攣けいれんしてる。

「大丈夫です。頑丈ですから」

見なかったことにして何でもないように言う。

神父さんの顔は引きつってはいるけれど、気にしない。

「そうですか……。では、私は準備をしますので」

先ほどのユーキみたいに逃げるように奥の部屋へと移動する神父さ

ん。

本人が言っていたように調の準備をしてくれているだろう。

「うう……」

うなされているユーキへと近づく。

うーん、ここまで見事に気絶するとは思わなかったなあ。

とりあえず頬を突いてみる。

起きない。

「ふう……」

横に立て掛けてあった折りたたみの椅子を広げて座ってから一息吐く。

浅木勇輝、私のパートナー！。

透明な魔力を持つ、素性も分からない不思議な男の子。

何故かこの人は悪い人ではないと、あの夜に出会った時から感じている。

それは私の虹と対照的な色に惹かれたのかもしれないし、違う要因があったのかもしれない。

だけど私はそんなことよりも、ユーキにある特別な何かを感じるから一緒に居たいと思ったのだ。

……うーん、これじゃあまるで恋する乙女だねえ。

そんな事を考えて、顔が熱くなるのを感じた。

いや、恋なんてしたことないからこれがどんな感情なのかは分からないけどさ！

決して私が恋をしている訳ではないんだよ！？

誰に言っているのかは分からないけれど取りあえず弁明しておく。

落ち着いて、耳を澄ますと隣の礼拝堂から子供たちの声が小さく聞こえる。

この壁は結構厚いようだ。

ユーキもまだ起きないし、調の準備もまだ終わらないだろうから少しだけ魔術の練習でもしようかな……？

椅子から立ち上がり、目を瞑って深呼吸。

自分の体を駆け巡る魔力を認識する為に、自己の深いところまで潜って行く。

自身を1つの魔術の装置として切り替え、形を持たせる為に魔力を練り上げる。

属性は氷、イメージは部屋の中で振り回せる程度の長剣。

ある程度イメージで形が整ったら、そのイメージという鞘から抜き放つように右手を振り抜く！

風を切る音が聞こえた。

目を覚ましたら蒼香が剣を振り回しているのが見えた。

蒼香は剣なんて持っていないかったから魔術で作ったのだと思う。

思わず息を呑むほど、蒼香の魔術は綺麗だった。

蒼香が持つ剣は薄らと青みを帯びている。

いや、剣だけではない。蒼香自身、青い光を纏っている。

ん？ 青い光？

もう一度、今度はよく見てみる。

だが確かに、纏っている色は蒼香が言っていた虹ではなく青である。

「ふう……」

風を切る音が止む。

どうやら終わったみたいだ。

蒼香の手から剣が消え、次いで体に纏っている青色も見えなくなる。

「なあ、何で虹色じゃないんだ？」

「うわぁ！？」

休んでいるところで座ったまま声をかけたら驚かれた。

何でだ。

そんなに俺が嫌いか、お前は。

「あ、ごめん。考え事してたから気付かなくて」

申し訳なさそうに謝ってくる。

こいつがこんなに素直だなんて珍しいな。

この町に着いてからは謝られることなんて無かったなあ……。
ドナドナされたし。

「で、何だっけ？」

「だから、お前の色だよ。虹じゃなかったのか？」

もう一度聞く。

分からないままにしておく気分悪いからなあ。

「ああ、それはね」

「準備が出来ましたよ」

神父さんが入ってくる。

ぬああ、一番気になるタイミングで割り込まれた。

「ちようどいいや、向こうで説明するよ」

そう言つて、蒼香は神父さんが出てきた部屋に入っていく。

神父さんを見ると手招きをしているので俺も入ってことなんだろう。

ドアを開けて待っていてくれるのでさっさと向かう。

部屋に入ると中央に石造りの台座、部屋の四隅にも台のような物がある。

蒼香が中央の台座の近くにいたので俺も向かう。

台の上は器のようになっていて、水が滾々こんこんと湧き出ているのが分かる。

「見ててね？」

台の横に立っていた蒼香が水の中に手を入れる。
水の色が少しずつ変わっていく。
だけどこれは……。

「虹って言うか、混沌としてるな」

虹って言うのは普通、赤、橙、黄、緑、青、藍、紫の7つの色が見える。

だけど水の色はそれどころではなく、たくさんの色が混ざり合って何とも言い難い色になっている。

もつと綺麗な色が良かったんだけどね、とぼやく声が聞こえる。

「で、さっきユーキが見たのはこの色でしょう？」

蒼香がそつと息を吐いて何かを呟く。すると合わせる様に水の色が混沌としたものから青だけになっていく。

ああ、さっき見た色だ。

鋭いような、冷たいような青である。

「“氷”の属性の特色ですね」

黙っていた神父さんが俺に向かって言うてくる。

青は氷の属性なのか。

だったらさっき蒼香が持っていたのは

「氷の剣、か」

「正解」

よく出来ました、と褒めてはいるが素直に喜べん。
蒼香は濡れた手をハンカチで拭いている。

「私だけなのは分からないけど、何か属性を使っているとその属性の色だけが表層に出てくるんだよね」

普通は混ざり合って出てくる筈なんだけどなあ、と首を捻っているのだから、蒼香自身、なんでそうなるのかは分からないのだろう。
神父さんが俺の横に来る。

「あの水は魔力を通しやすく、また影響されやすいものなんです。だから自分の属性が分からない人たちはみな、教会へ来てこれに手を浸していくんです」

そのまま触媒としても使えるんですよ、と補足説明もされる。
で、俺もあの水に手を入れろってことだよな？

恐る恐る右手を伸ばす。

指の先が水の表面に触れる、が何も起こらない。
そのままゆっくりと手首まで入れる。

「ふむ……」

神父さんが声を漏らすが、特に何もない。
泣きたい。

あれか、俺の不思議ばわあが足りないともいうのか！？
駄目で元々、蒼香から教わった最初の練習を試してみる。

イメージする。

自分の体にあるチカラを右手に集める。

ただ集めるのではなく、体を巡^{めぐ}って最終的に右手へと行く感じだ。
右手に熱が籠^{こも}っていくのを感じる。

集められたチカラは放出され、世界へと還^{かえ}っていく。

「あれ、色が……？」

何か聞こえるが今の俺に反応する余裕など無い！

イメージする。

ノイズが走る

その人は優しく微笑んで、こちらを見ている

「ねえ、。私お願い、聞いてくれるかな？」

何も無い空間。白い世界がずっと続いている

「そう、良かった。私ね、疲れちゃったんだよ」

誰かは珍しく溜息を吐いて、気だるそうな感じである

「大体なんで私が事後処理だとか組み直したとかやらなきゃいけないのよー？」

いや、俺に聞かれてもどうしようもないんだが

「あ、ごめんねー。最近 たちがうるさくってさー」

何だか大変そうである。というか何なんだここは

「そうそう、お願いだったね」

俺の意見は無視か

「私を、私たちをして」

頭に重い衝撃。

その後、倒れたようで体にも鈍い衝撃がくる。
組み立てていたイメージが崩れていく。

「ユーキ！ ストップ！」

蒼香が叫んでいる。

うん、出来れば殴る前に言っただけ良かった。
側頭部がズキズキと痛む。

「で、何だよ？」

体だけ起こして蒼香に聞く。

途中でそれたけど、それまでは結構いい感じだったと思う。
その証拠に右手がまだ熱い。

「何だよ、じゃないよ！ こっちは危うく消し飛ばされるとこだったんだからね！？」

「は？」

辺りを見回す。

部屋の中で台風が起きたかのように荒れている。
何が起きたんだ……？

「あなたの魔術が暴走したんですよ」

座って壁に寄り掛かっている神父さんが言ってくる。
よく見れば神父さんの服が所々切れてボロボロである。
これが、俺の魔術の暴走で……？

「これぐらいで収まったんだからいい方なんだよ？ 暴走して町が無くなるだなんてよくある話なんだから」

「……マジで？」

驚いて聞くと頷いてくる。

鈍痛が頭に響く。痛い。

「ですが、あなたの属性もその危険性も分かりましたし。何よりこれだけの被害で済んだのです、よしとしましょう」

散らかった部屋を見回しながら神父さんは言う。
いや、もう何かすみません。
って

「属性分かったのか？」

こんなことを起こした直後に聞くのも何だが、それでも聞きたい。

「……“光”と“無”の属性」

言いにくそうにしていた蒼香が口を開く。

光と……無？

光は分かりやすい。

あれだ、光の矢とか、なんか主人公みたいな感じのもんだろ？
だけど無って……。

「ちなみに主要な属性は無の方だから」

分かりにくい方がよ……。
蒼香は何か知らないのか？

「“無”の属性は私も今まで見たことがありません。御伽噺おとぎばなしの中だけのものだと思っていたのですが……」

神父さんが驚いた表情でこちらを見ている。

何か微笑んでいる以外の表情は似合わないな、この人。
しかし御伽噺、ねえ。

「具体的にどんな属性なんだ？」

「御伽噺にあるようなことだけですが……いいですか？」

頷く。

今は少しでも情報が欲しい。

あの、誰だかわからない人も気になる。

ポン、と手を叩く音が聞こえる。

「その前に片付けようか」

蒼香は笑っている。

あの顔は恐らく俺にほばやらせるつもりだ。

俺がこんな風にしたのだから文句も言えないが。

……逃げたい。

「はあ……」

礼拝堂の長椅子に崩れ落ちるように座る。

ようやく終わった……。

壊れた台を運び出し、壊してやんのー、などと言ってくる子供たちの攻撃を避けつつ予備のものと取り替えて、汚くなった床を雑巾で拭いたりしていた。

所々傷ついた壁や床は蒼香が魔術を使って直していたので心配ない。俺を攻撃していた子供たちは今頃シスターに説教をもらっている筈だ。

「お疲れ様」

修理が終わったのであろう蒼香がこちらへ近づいてきて俺の隣へと座る。

蒼香の顔は俯いていてよく見えない。

どちらも何も言わず、ただ時間だけが過ぎていく。

うあー、何だこの空気。

「ユーキは、さ」

「ん？」

不意に蒼香の言葉が漏れる。

搾り出すような、そんな感じの声音である。

「恐く、ないの？」

「……」

何が？ とは聞かない。

言うまでもなく、魔術のことだろう。

確かに、怖いけど

「大丈夫だよ。あの程度ならお前に引き吊り回されたほうが恐かった」

おどけるように肩をすくめて茶化す。

いや、実際あの市中引き回しは恐かったけどな！

何より周りの視線が、あの汚いものを見るような感じが俺の心を抉ったぜ！

あ、やばい。俺泣きそう。

「迷子になる方が悪いよ」

クスッ、と笑ってこちらを見てるのが横目で見える。

ああ、笑ってる方がこいつらしいな。

……例えばどんな笑顔であれ。

知ってるか、笑顔って凶器になることもあるんだぜ？

笑顔にもすぐに影が差す。

「私はね、怖いよ。魔術自体もそうだし、そんな力を持っている自分自身も」

ステンドグラスを仰いで呟いている。

それが、懺悔さんげのように見えるのはなぜだろうか。
蒼香の独白は続く。

「この力は相手を殺す為のものだよ。望めば、相手が誰だろうが殺すことが出来る。……いや、望まなくても、かな」

暴走。

確かに、あれだけの力が自分の意志とは関係なく周囲に被害をもたらすのだ。恐くない訳がない。
そして

「どれほど罪を償っても死んだ人はもう、戻らないんだよね……」

その被害者だろうが加害者だろうが、なってもおかしくは、ない

……しかも加害者の方かよ、めんどくせえ。

しっかりと蒼香の顔を見てやる。

死ねって言われたら今にも自殺しそうな顔しやがって。

「ああ、死んだ人間は生き返ったりしないさ。んで、お前が死のうが生き返る奴もいないからいつもの通り馬鹿みたいに生きている」

「だけど、私は！」

蒼香の声が静かな礼拝堂に響き渡る。

ああ、イライラするなあ！

何を悩んでるんだ、お前は！

「俺を助けてくれたのはお前と、その力だろうが！ 償いたいので

あれば死にそうになっている人を助けて来い！ お前と同じ思いをさせるな！」

いつの間にか、俺は立ち上がって蒼香の正面にいた。

「少なくともあの時は殺す為じゃなくて、護る為の力だっただろう！？」

そうだ。こいつは素性も分からない俺を、死ぬのを見たくないという理由で助けてくれた。

自分が見たくないという理由で、だ。

その場から離れればいいだけの話だったのに。

目を瞑り、耳を塞げばよかった。

あの町を出ずに、平和に暮らしていればよかったんだ。だけど

「お前は夢の為に、ついでだけ俺の為にここに来たんだろう！？ だったら、お前のやりたいようにやれ！ 暴走した！？ 人を殺した！？ 知るか、そんなこと！ 暴走を抑える為に、殺さない為に強くなれ！」

自分でも何を言っているのか判然としない。

だけど、こいつの言葉は許容出来ないものだった。

だから、俺の素直な感情をぶつけて“否定”する。

「俺が言ってるのは夢物語だろうよ！ バカなガキの絵空事だ！ だけど、今のお前みたいに立ち止まるよりかはよっぽどマシだ！」

俺の荒い息が響き渡る。

不規則だったそれは、やがて小さく規則的になっていく。

蒼香はこつちを見ようとしていない。俯いたままである。

その頭にボン、とあの時俺がされたように右手を乗せてやる。

「……頼むぜ、相棒。^{パートナー}今の俺にはお前しかないんだから」

「……っ！ バカッ……！」

両手を背中に回されて、引っ張られたと思ったら、俺の胸の辺りに蒼香の顔がうずまっていた。

時々嗚咽^{おえつ}が聞こえるが、聞こえていないふりをして、頭を撫でてやる。

サラサラとした感覚が手に残る。
まるで父親になった気分だ。

しかしまあ、何で俺はこんなにもこいつの信頼を得ているんだろうねえ？

別に何かした訳でもないのにな。

人の心なんぞ分からんが、こいつの心は見ても分からん気がするよ。

ようやく落ち着いたのだろう、嗚咽が止まってきている。

しかし蒼香は一向に顔を上げない。

「おい、腰が痛いんだが。離れていいか？」

「ごめん、顔酷いだろうからもうちよつと……」

座っている蒼香に引き寄せられる様な不安定な状態で立っているからか、足やら腰が痛い。

正直このまま蒼香に倒れこみたいくらいだが、流石にそんな事をしたら殴られそうなので踏ん張っている。

「……ありがとう、もういいよ」

許しが出て、体を元に戻そうとして

「あら？」

「え？」

そのまま蒼香に覆いかぶさるように倒れてしまった。
手は流石に長椅子の背もたれにかかっているが、端から見たら俺はただの変態である。

「す、すまん！」

急いで体を起こそうとしたのだが、何か虫の知らせというか、魔が差してそのまま子供たちが説教されているであろう部屋のあたりを見る。

神父さんとシスターがこちらを見ている。

蒼香はまだ気付いていない。

「……」

「……お邪魔でしたかね？」

「えっ！？」

ゆっくりと確かめるように問いかけてくる神父さん。

その顔は柔和な笑顔のままであるが、どこことなく納得したような、そんな感じが伝わってくる。

ようやく蒼香もどんな状況か気付いたようだ。

蒼香の上から体をどけたいが、無茶な体勢のためうまく力が入らない。

「いえいえ、いいですよ。ただ、一応礼拝堂するのは控えて頂きたいのですが……」

完璧に誤解して、理解を示してくれ、更に忠告までしてくれた。ありがたいけどそんな空気の読み方はいらんだよ、神父さん。

「蒼香も何か言ってくれ！」

俺が言っても効果は無さそうなので、助けを求める。

正直助けてくれるとも思っちゃいないけど、それでも藁^{わら}くらいには縋^{すが}りたい。

「……」

蒼香は漫画で見るような、プシュー、と湯気が出そうな感じで顔を真っ赤にして止まっている。

ああ、使えねえ！

神は俺を見捨てた……。

「ふふつ、冗談ですよ」

がつくりと項^{うなだ}垂れている俺に、依然として柔和な表情で足音を立てて近づいてくる。

シスターも特に何も言わずに神父さんの後ろにいる。

「取りあえず離れたほうがよろしいのでは？」

手を差し出してくれる。

今の俺では満足に立ち上がることも出来ないので素直に手をとる。ちよつとした浮遊感の後に地に足が着いている感覚が感じられる

と思ったが何も無く、上手く立ってられない。

支えてくれている神父さんが慌てて長椅子に座らせてくれる。

何だよ、これ？

まるで手足が無くなった様な感じである。

「暴走の反動が来ましたか」

「っ、反動……？」

手足がおぼつかない、気持ち悪い状態で聞き返す。

頭も痛くなってきた。

最悪な気分である。

「簡単に言えばさっきの暴走に体が耐えられなかったんだよ」

蒼香の声が聞こえる。

ようやく直ったようで、いつもの説明してくれる時の声だ。

「不完全な暴走だったから中途半端に意識が残っちゃったんだろっ
ね」

ちなみに完全に暴走してたら多分この町は地図から消えて、最悪ユ
ーキは死んでたんじゃないかな？ と恐いことを言ってくる。

あー、頭痛い。

ズズキと痛むんじゃないくて、ガリガリと削られるような痛みだ。

「ふむ、『癒しの旋律、彼を包み痛みを和らげなさい』」

神父さんの声。

両手を胸の前で組んで肅々と告げている神父さんの体は白い光に包まれている。

その光は次第に両手へと集まり、輝きを強くする。

『癒^{ヒール}しの風』

光が弾け、礼拝堂に降り注ぐ。

その光景はまるで輝く雪が降っている様である。

白い輝きは俺の体へと集まって、触れた途端に消えていく。

全ての光が消える頃には頭の痛みはほとんど無くなっていた。ただ手足の感覚はまだ戻らない。

「少しは楽になりましたか？」

言葉に頷いて肯定を示す。

実際、頭痛が無くなって大分楽になった。

手足が別のものになった様な感覚が不気味だがそれほど苦になるものではない。

「そうですか、それは良かった。ではお話をしても平気ですか？」

まあ話すのは私ではなくこの子なんですが、とシスターを前へと出させる。

シスターの格好は初めて見た時から変わっておらず、紺の修道服で

身を包んでいる。

こちらに目を合わせると深くお辞儀をしてくる。

その姿はよく似合っていてまるで1枚の絵画のようである。などと、
思うと同時に横　　蒼香がいるあたり　　から鋭い視線がとんでく
る。

何か悪いことをしただろうか？

考えても答えは出なかった。

「私が知っている限りのことをお話します」

「お願いします」

響くような声と少し硬い声。

どこにそんな不機嫌になる要素があつたんだよ、と思うほどの声音
である。

どれだけ頭を捻^{ひね}つても何も思い浮かばない。

「まず“無”という属性は御伽噺^{おとぎばなし}や伝説でしか存在が確認されてい
ませんでした」

それは先程神父さんに聞いたことである。

続きを促すために頷く。

「曰^{いわ}く、他の属性では扱えぬものを扱う、皇竜をも打ち砕く、など
と嘘^{うそ}の様なことばかりでしたから存在すら疑わしいものだったので
すが……」

「そのコウリユウってのは？」

知らない単語だ。

「皇竜。この世界を作った内の1人、……1体？ と伝えられている竜だよ。大きな体躯たいくと光り輝く翼で自分たちが作った世界を巡る。そんな伝説だったかな？」

蒼香の補足にシスターが頷く。

原初の神々に対抗するようなものか。

というよりもこの世界の人間は世界を作ることが出来るほどの竜と戦ったのか。

しかも勝つてどんだけ強いんだよ。

「そしてどの話にも共通したものが『魔術を消す』ということですよ」

「……は？」

魔術を消す魔術？

何それ、俺に最強にでもなれっていうの？

「ですが、これも確証はありません。あなたの暴走の痕跡を見ても周囲の魔力が消えているということはありませんでした」

ああ、そうですね。

期待した俺が馬鹿だったよ。

やはり魔術は初歩も出来ない俺には無縁のものなんだろうか……。

「私が知っているのはそんなところでしょうか。お役に立てず、申し訳ありません」

「いや、ありがとうございます。何となく方針が決まりました」

うん、例えば俺に才能が無かろうが努力すれば少しくらい使えるようになるだろ。

後で蒼香に練習を見てもらおう。

立ち上がるうとして、足に力を入れる。

随分と感覚が戻ってはいるがまだ頼りない感じがする。

1歩1歩確かめる様に歩いている俺を見かねてか、蒼香が支えてくれる。

「すまん」

「気にしない気にしない」

神父さんとシスターに向き直って礼を言ってから外へ出るための扉へと向かう。

蒼香に支えてもらっているが、それも相まって歩きにくい。

うーむ、こいつには迷惑を掛けっぱなしだな……。

「困ったときはいつでも来てください。お二人に祝福があらんことを……」

後ろから声を掛けられる。

神父さんいい人だな……。

ただ微妙にお二人に祝福の部分が物凄く優しげな声に聞こえたんだが。

……まあ、いいか。

「で、これからどうするんだ？」

横で支えてもらっている蒼香に問いかける。

時刻は大体4時ごろだろうか。

随分教会にいたようだ。

教会の前にはそれなりに大きな噴水がある広場になっていて、子供たちが駆け回り、お母様がたが雑談している。

平和だな……。

「うーん、ギルドに行ってユーキの登録申請しようかと思ってたんだけど」

今日のところは休もつか、と提案してくれる。

正直ありがたい。

支えてくれているのはいいのだが歩きにくいし、何より恥ずかしい。

「行こう、宿取らなくちゃ」

少しずつ歩いていく。

俺、格好悪いなあ……。

Page 9 : 教会と魔術と（後）（後書き）

どうも、ズックです。

不定期な更新で申し訳ありません。

ずいぶんと長くなつてしまいましたし……。

それにしても話が進まないこと。

そんなものでも見てくださっている方々、ありがとうございます。

相も変わらず不定期な更新になるとは思いますがよろしく願います。

夢を見ている。

こつちの世界に来てからよく見る夢だ。

真つ白な空間に1人だけポツンといる。

立っているのか座っているのかも分からない。

ただそこにいて、という感覚だけがある。

そしていつもそこにいる人

や、。また来たんだ。

その人が誰を呼んでいるのかは分からない。

聞いてよ、また仕事増やされたんだよ！ 信じられない！

ただ毎回愚痴を言われるんだよなあ……。

上が相変わらず人使い荒いのよね。逃げようかしら。

なんかお役所仕事してるみたいだな。

あ、逃げればいいのか。気付かなかったわ。

……毎回こんな調子だし。

うーん、じゃあ近いうちにそっちに行くから、よろしく！

え、ちよつ、待って。

ほら、呼んでるよ？ 行つてあげな。

だから

「待てっつーに！」

「あ、起きた」

チチチチ、と小鳥特有の高い鳴き声が聞こえる。

今日はいい天気らしく、陽の光が室内に眩^{まぶ}しいほど入ってきている。

またあの人か……。一体誰なんだよ。

今までは気にも留めなかったが、流石におかしい。

元々夢を見ない（覚えてない）人間だ。

だけどこうも立て続けに同じ夢？を見たら何かあると思ってしまう。

「蒼香、今何時だ？」

「8時。朝ご飯食べようよ」

ちゃっかりと椅子に座っている蒼香に尋ねる。こいつ部屋の鍵使って入ってきやがった。

格好は水色の半袖のパーカーと紺の膝上のスカートである。青い色がよく似合うことで。

腕を上げて、体全体を伸ばす。右手の肘を掴み、頭の後ろへとやる。肩を回してみる。大丈夫、問題ない。

ベッドから降りて屈伸。膝が鳴ったけど問題ない、昨日の後遺症は無し、と。

「着替えるから、先行っててくれ」

「うん、下で待ってるよ」

パタン、とドアを閉める音。

ま、着替えるつつつても学ランなんだけどな。

ハンガーに掛けてある俺の服を取る。

着替えを買わなきゃマズイよな……。

通し慣れた袖に腕を入れる。

面倒なのでボタンは留めずにそのまま。

ポケットの小さな箱の存在を確かめて洗面所兼トイレへと向かう。部屋についている洗面台で顔を洗い、口をゆすいでから、用を足す。つかこの世界、何でも魔術で補ってるからそんなに機械とか無いのな。

今使っている水道も、魔術で動いているらしい。原理は分からんけど。

壁に立て掛けてある幅広の剣を手に取り、鞘に入れたまま見よう見まねで正面に両手で構える。

これも使えるようにならなきゃ持ち腐れだよな。
元の場所に立て掛けなおし、今持つていくものが特にないことを確認してから部屋から出るドアへと近づく。

部屋から出て廊下を抜け、階段を下りていく。

ここの宿屋は3階建てで、1階は主にギルドの人や傭兵たちが使う食堂。

2、3階が宿屋となっている。

俺たちが使っていたのは2階の階段に近い2部屋。

理由は、まあ俺が動けなかったからなんだが。

ここに着いたのがまだ早い時間で、部屋が空いていて本当に良かったと思う。

流石に人が多いな……。

4人掛けの木製の丸テーブルを囲んでいくつものグループが座っている。

蒼香を探してみるとカウンター席に座っている。

ここでは色んな髪の色が見れるけど、それでも青い髪って見つけやすいね。

あいつ以外に青い髪はまだ2人しか見ていない。

蒼香の横に腰掛ける。

まだメニュー見てるし……。

何でもいいだろうに。俺もメニューを見てみる。

この世界の言葉や文字は不思議である。

ひらがなやカタカナ、漢字があると思えば、全く読めないミミズがのた打ち回った様な文字もある。

蒼香がいうには後者は古代文字だそうで、別に読めなくても生活に支障は無いとのこと。

パラパラとメニューをめくる。

ん、普通に朝の定食でいいわな。

メニューを閉じる。

「決まった？」

いつの間にか蒼香はメニューではなくこちらを見ていた。
決まらないんじゃないじゃなくてわざわざ俺を待ってたのかよ。

「朝定食」

「わかった。お姉さん、朝定食2つ！」

はい、とカウンターの奥の厨房からいい返事が聞こえる。
朝食が出来るのは少し時間が掛かると思う。

「なあ、光の魔術ってどんなもんなんだ？」

その間に蒼香に色々聞いてみることにする。

無の属性は手探りでやるしかないのだから後々やるとして、光の属性は確認できているのだから練習もしやすいだろうという考えである。

「うーん、小さな灯^{あか}りを点けることから始まって、光の矢や槍を作ったり、かな」

こんな感じだよ、と蒼香は人差し指を天井に向ける。
薄っすらと白い光が見えてくる。

昨日の神父さんの光よりもかなり薄い。

『灯^{とも}れ』

蒼香の眩きとともに人差し指から少しだけ離れた場所に小さな灯^{あか}りが発生する。
照明が点いているから分かりにくいけど、光の球体が確かにそこにある。

「これが出来てようやくスタートラインだね」

グサリと言葉の矢が突き刺さる。

どうせ初歩も出来ない未熟者だよ。

「でも、これくらいならコツさえ掴めば1日かからずに出て来たりするから、そう悲観することはないよ」

蒼香よ、お前は忘れていることがある。

森の中で初歩の初歩すら成功の兆しが見えなかった俺に、そんなことを求めるのは間違っているんだよ。

昨日のあの後、ここに着いてから体が動かないのでベッドの上で自

分の中にある魔力を感じ取ろうとひたすら唸っていたのだが、結果は惨敗。

少しも進歩は無かった。

「ふふつ、まあ焦らない焦らない。気長に頑張ればいいんじゃない？」

へいへい、気長に頑張るとしますよ。

厨房から若いお姉さんが盆を持って出てくる。

「はい、朝定食2つお待ちどう様！」

俺たちの前にどこでも出るような朝食のメニュー、オムレツやハムなどの軽いものが乗った皿と主菜 魚だった が置かれる。さて、まずは朝ご飯としますかね。

しゅーりょー。

オムレツが美味しかった。

お姉さんも綺麗だし、ここが繁盛してる理由も分かる気がするね。時刻は9時を少し過ぎた頃。

店内の人は少なくなってきた。

蒼香はアイスのようなデザートをようやく完食したところである。ちなみに追加メニューである。

「うん、じゃあそろそろ行こうか」

「その前に口を拭こうな」

アイスが着いているぞ。

ハンカチを差し出して、着いている部分を指差して示す。
慌てて俺のハンカチで拭っているが、何と云うか微笑ましいな。

「で、昨日言ってたギルド、だっけ？」

拭き終わったのを確認してから問いかける。

ハンカチを返そうとしてくるが、俺が持つてるのは何となく変態くさいので持たせておく。

「そう。ギルドでユーキの冒険者の登録申請と私の旅団の申請しなきゃいけないから」

うーむ、冒険者か。

それだけ聞くとゲームみたいだな。

覚めない夢を見ている気になるけど、それは自分で自分を否定するようなもんだからな……。

まあ、今俺は確かにここにいるのだからそんなことはないのだけだ。

「じゃあ行こう、登録が終わった後はユーキの魔術の練習か、簡単な依頼でもやってみようよ」

「はいよ」

代金を払って、店を出る。

この町は北から南へと縦に長い構造で、宿は南の大通りに面して建っている。

宿から出て右手に進むと町の外の方へと、左手に進むと教会がある広場へへ行ける。

一応言っておけば広場を通り抜けて進めば、北からも町の外へと出られる。

気性の荒い傭兵たちが町のと真ん中で喧嘩を起こされても困るため、ギルドは町の南の外れ、つまりここから右手の方である。

ちなみにバルドスのおっさんがいた露天の通りは南側の、大通りから1つ外れた道だった。

「着いたよ」

ブラプラと歩いて着いたのは十字の文様が描かれている看板が掲げられた、2階建ての石造りの建物。

筋骨隆々の男たちがその建物から入れ替わり立ち替わり出たり入ったりしている。

うーむ、むさ苦しそうだな。

しかし入らないわけにもいかない訳で。

深呼吸、深呼吸。

「？ ほら、入るよ」

ちよっ、まだ心の準備がっ！

ズルズルと引きずられて行く俺。

なんか既視感を感じるな……。

ドアを通って中を見回してみると案外すっきりとした内装だった。白を基調とした壁に、落ち着いた感じの木のテーブルや椅子。どうやら奥はちよつとした酒場になっているらしい。

手前は恐らく依頼や申請を受けるカウンターなのだろう。4人ほど受付嬢と思われる人たちが傭兵たちの相手をしている。

「一番奥の列に並んで。説明はしてくれると思うよ」

終わったらこつちに来てね、そう言って蒼香はさっさと手前から2番目の列へと並ぶ。

一番奥。

3人しか並んでいないところである。

とりあえず言われたとおり3人の後ろへ並ぶ。

結構簡単な手続きのようで割とあっさり俺の番までやってくる。

「お早う御座います、冒険者の登録申請ですね？」

「あ、はい」

「ではこちらの用紙に記入をお願いします」

そう言って紙とペンがカウンターに置かれる。

何々？

まずは名前。 ユーキ、と。

年齢。 17。

魔術師か、錬気師か。 一応魔術師。錬気師って何だろうな？

魔術師の場合は属性を記入。光、と1つだけ書く。

また、ある場合はその特性を記入。？ 分からないから空欄、つと。

戦闘経験。……無しでいいか。

……。

とりあえず書ける欄は書いた。

受付のお姉さんに用紙を渡す。

「はい、ユーキさんですね。年齢は17、魔術師で属性は光、戦闘経験は無し、特殊技能も特に無し。間違っていますね？」

頷く。

「では、ギルドの説明をしましょうか？」

「是非」

「かしこまりました。我々ギルドは世界各地に存在する大型の冒険者、及び傭兵登録所のようなものです。市民や国からの依頼を受け、成り立っています。冒険者の方々にはそれぞれランク分けされており大きく下位、中位、上位とそれ以上の4つとなっております。あなたは戦闘経験も無いようなので一番下のランク、下位の黒石です。ブラックストーンランクを上げるためには自分のランクの依頼を10個、もしくは自分より高いランクのものを5個完了し、報告すること。それ以外では自分より上位の魔物を5体倒し、その証拠をこちらへ持って来ることです。ちなみに、あまりにランクが離れている依頼を受けることは出来ませんのでご了承下さい」

ふむふむ。

まあ大体予想できる範囲内だな。

「ランクの細かい区分は？」

「下位は下から黒石、ブルーストーン、レッドストーン、ホワイトストーン、赤石、白石です」

下位は、つてことは中位と上位は違うのか。

ただ、大体同じように区切られているだろうから、下位から上位だけで約16段階か。

上位になるのに何年かかるんだか。

「1つずつしかランクは上げられないのか？」

「自分のランクと同じランクの依頼を受けていた場合は1つずつです。しかし自分より2つ以上高いランクを受けていたり、危険度の高い魔物を狩っている場合はその限りではありません」

他には……

「自分より上のランクの人と一緒にいる場合はどのランクの依頼まで受けられるんだ？」

「基本的には一緒にいる人と同じランクまで受けられます。ただし、あまりにもパーティーの方々に迷惑を掛けていたり、ギルドの方から見てあまりにも力や経験が不足している場合は我々から処分や注意の通告が行きます」

……どうやって分かるんだ？

ギルドの情報収集能力がそれほどまでに高いのだろうか。

「もうありませんか？　では、こちらのカードをお持ち下さい」

手の平に収まる大きさの鈍い黒色のカードが手渡される。

そこには俺の名前や年齢、属性などが書いてある。

いつの間に……。

「こちらが証明書になります。無くさない様にして下さい」

これで終わりです、と営業スマイルで見送られる。

うーん、それほど時間は掛からなかったな。

蒼香は、と見てみると2番目で蒼香の後ろには並んでいない。
しょうがない、行くか。

「終わったぞ」

近づくと前の人の申請も終わったらしく、蒼香の番である。

「こちらは旅団手続きです。今日はどのようなご用件で？」

先程のお姉さんと同じ営業スマイルで迎えてくれる。

うーむ、スマイルは無料ただっていつでも向こうではしてくれなかった
りするからな……。

仕事するのに愛想が悪いのはどうかと思うね。

「新規に旅団を作りたいんですけど」

「では、こちらの用紙に必要事項を記入して下さい」

渡されたのはさっき俺が書いていたものよりも1回りほど大きな紙。

「じゃあここに名前とランクを書いて」

蒼香からペンを受け取って言われた通りに書く。
こいつのランクってどれくらいなんだろうな？

「はいよ」

用紙を返す。

蒼香は用紙に色々と書き込んでいくが、聞かれることもないので俺は口を出さない。

ほとんど書き終えて、最後の項目で蒼香の手が止まる。
覗き込むと、旅団名が書かれていない。

「何がいい？」

こちらを向いて聞いてくる。

うーむ、名前ねえ……。俺にそんなことを聞くとは……。何だか格好よさげな漢字を並べたようなものしか思いつかんよ。

「ま、何でもいいよ。私は思いつかないから」

お前の夢の第一歩がそんな適当でいいのか……。？
少しだけ睨みつけてやるが特に気にした様子も無く、飄々としてい
る。

名前、名前……。

ふと思いついたのは蒼香の魔力の色。

お世辞にも綺麗とは言えない、あの色。

それをこいつは自分で虹だと言ったのだ。

だったらあんな色じゃなくて、本物の虹の色になるように

「イリス」

確かどこかの国の言葉で虹って意味だった筈だ。
ついでにアヤメの花って意味もあつた気がする。

「どこの国の言葉か忘れたけど“虹”って意味だ」

「虹……」

韻を確かめるためだろうが、呟くのは止める。恐いっつうの。
やがて呟きも消える。

「うん、いいね。イリスに決定！」

空いていた最後の欄に鼻歌混じりで書き足していく。

随分と上機嫌なんだが、思い当たることも無い。

こいつコロコロ機嫌が変わるよな。

何だっけ、変わりやすいのは乙女心と秋の空だっけ？

むしろ蒼香の心と秋の空にしておいてくれ。

「えー、旅団の新規作成、旅団員は青水晶ブルークリスタルのアオカさんと黒石のユ
ーキさんの2人ですね。冒険者証明書を見せてください」

先ほど受け取った黒いカードを見せる。

蒼香の物を見ると、鮮やかな青いカードである。

「はい、結構です。では確認致します」

読み上げていく言葉に1つずつ頷きを返す蒼香。

俺は今横から見てるけど、きつと後ろから見たら寝そうになって頭をカクンカクンやっている感じに見えると思う。

「最後に、旅団名“イリス”。よろしいですか？」

「はい！」

元気のいいことで。

俺はもう立ってるのもめんどくさくなってきたよ。

「では、こちらの旅団証明書をお受け取り下さい」

渡されたのは冒険者証明書と同じくらいの大きさのカード。色は透き通る雪の様な銀である。

「説明は必要でしょうか？」

「お願いします」

「かしこまりました。ええと、利点かどうかは分かりませんがその旅団へ直接依頼がくる、ということでしょうか。その依頼は我々ギルドを介さないものですから自己責任となりますが、ここで依頼を待つだけよりも効率的に仕事をこなせますね。そして冒険者のランクとは別に旅団のランク、まあ知名度のようなものです、があります。もちろんランクが高ければ良い仕事や危険な仕事がきますね」

うん？

ギルドを介さないってことは

「その、旅団が直接受けた依頼はギルドの方、例えば個人のランク

とかには何も加算されないのか？」

「そうですね。例えどれだけ危険な仕事を受けたとしても基本的にこちらの記録には残りませんから。それにギルドを介さない、ということはそれをするだけの費用が無いが、またはギルドに頼めないような仕事であるとか。そんなものの方が多いです」

良い事ばかりじゃないんだな。

「うーか、聞いてると悪い事の方が多い気がするぞ？」

「しかし、噂うわさの力とは侮れないもので。ある程度こなしていくとギルドにもその噂が入ってきます。その噂がギルドに頻繁に入ってくるようになった時、我々が審査を行い、信用に足る旅団であれば資金の援助などを受けることが出来るようになります」

なるほど、ギルドからの援助はありがたい。

生活だろうが旅団だろうが金は必要になるからな。

「何かご質問は？」

「いや、今のところは無いから、分からないところがあったら聞きに来るよ」

「そうですね。ではあなた方に良い巡り合わせがあることを願っております」

登録完了、つと。

あの程度ならまだ頭に詰め込める範囲内だ。

次は……

「少し依頼を探してみる？」

「いや、その前に服を買ってくれないか？ 流石にこれじゃ動き難い」

学ランのままだから脚に余裕がないし、それほど強度があるわけでもない。

蒼香は俺の体を上から下まで見回す。

「そつか、色々必要な物があるもんね」

そう言つてギルドから出る蒼香。

俺を置いていくなというに。

必要な物、ね。

薬や携帯食料とかかね。

そういえば。

「お前はナイフとか持つてなくていいのか？」

こいつ丸腰のような気がするんだが。

そう思い、蒼香のこれまでの格好を思い出してみるが、どこにもナイフなんかの刃物や身を守れそうな物は無かったと思う。

いくら魔術があるからって何も持つていないのは緊急時に危険だろう。

「ああ、大丈夫。私はこれがあるから」

ほら、と言つて取り出したのは小ぶりのナイフ。

刃渡りは15センチもないだろう。

特に何か細工がしてあるという訳でもなく、無骨な感じがする。

「つーか今どこからこれを取り出した!？」

右手にあった筈のナイフはいつの間にか消えていて、そうかと思うと左手にある。

視線を外していないのにも関わらず、気付いたときには左手に握られていた。

回転させるように上へ放り投げ、一番高く上がり下がってくる時には消えている。

そうこう見ているうちにまた無手へと戻る。

「ふふ、ちよつとした特技なんだ」

誇らしげに笑う蒼香。

悔しいが全く種が分らない。

さて、遊びはこのくらいにして、と。

服屋や武具屋はギルドの向かいと隣に建っている。

武器・防具は当たり前だが、冒険者や傭兵からの需要の方が圧倒的に多いためだ。

蒼香が言うにはちゃんと町の人用の服屋も町の中心にあるらしいが、今のところは町の外に出るための服が欲しいのでそちらには行かない。

武器は一応バルドスのおっさんの剣があるからいいとして、俺たちはギルドの向かいにある服屋へと入る。

「いらつしゃい」

恰幅^{かつぶく}のいいおばさんが挨拶をしてくれる。

この店員なのだろう。

エプロンを掛けて、ポケットからは採寸用のメジャーが見えている。店の内装は、売っている物が冒険者や傭兵用ということを除けば自

分の世界と殆ど^{ほとん}変わらない。

「どんな物をお探しで？」

「動きやすくて頑丈な服を」

それぐらいしか思いつかん。

採寸をしてもらって、少し時間が掛かると言われたので適当に店内を見る。

荷物を多く持てるつても魅力的だけどそれだけ動き辛くなりそうだし。

いや、荷物を多く持てて、なおかつ動きやすいつてのは一人旅とかで重要だから普通に売ってるか？

ああ、でも金を出すのは俺じゃないからな。

最低限の機能があれば十分だ。
安ければなお良し。

しかし、まあ色んな服があることで。

誰が買うのか分からないような物凄くキラキラした服とか、機動性が全く期待できないような全身を覆うフルプレートもある。

「はいよ、こんなんでいいかい？」

声をかけられて振り向くとさっきのおばさんが若草色のコートとズボンを持って立っていた。

一見すると普通の服にしか見えないが……？

いつの間にか蒼香が手に取って見ている。

「うん、しっかりした作りになってるし、中々いいと思うよ」

「試着してみても？」

どうぞ、と了解を得たので試着室に入り学ランを脱ぐ。
む、このコート、内側に何個かポケットがあるな。
羽織ってみるとそれほど重くも無く、むしろ軽い方である。
続いてズボン。

少し余裕があり、走ったりしても問題無さそうだ。
試着室内の姿見で格好を確認するが、いかんせんファッションに気
を使ったことがないのでよく分からない。
とりあえず聞いてみるか。

「蒼香ー、っ？」

カーテンを開くとそこには今日着ていたパーカーではなくドレスを
着た蒼香がいる。

髪の色とは反対の鮮やかな赤。

胸の上から膝上までピッタリとしたラインで、裾^{すそ}が広がっているマ
ーメイドドレスである。

「……何でそんなもん着てるんだ？」

「え？ いや、あつたから？」

「……相変わらずこいつの思考回路が分からん。

いや、確かに綺麗だがな？」

ただ、やっぱり普通のイメージからか可愛いの方が強い。

「何か言ってくれないの？」

「……まあ、似合ってるんじゃないか？」

何で疑問系なのよ、と言われるが照れ隠しだ馬鹿野郎。
元も良いから結構似合ってるんだよ。

「ユーキも中々似合ってるよ」

そうか、それだけ聞ければ十分だな。

後はインナーを何枚か買えばいいかな？

学ランは……、売るか？

そもそも買い取ってくれるのか？

そこまで考えて頭を振る。

まだ元の世界に返ることを諦めたわけではないのだ。
その時まで持っていなければならぬ。

「えーっと、いくらなんだ……？」

「あ、払うよー」

蒼香がおばちゃんに銀貨を渡している。

ここの金の価値も知らないんだよな、俺。

後で聞かないと。

知らないことが多すぎるな……。

仕方ないといえば仕方ないんだが、それで済ますつもりもない。

試着室に置きっぱなしだった学ランとズボンを畳んで持ってくる。

もちろんバルドスのおっさんから貰った指輪の小箱は今着ているコート
のポケットに移し変えた。

「まいど。お兄ちゃん、蒼香ちゃんを大事にしてやってくれよ？」

「はい？」

何だそれは。

まるで俺たちが恋人同士のような

「ち、違います！ ユーキは唯^{ただ}のパートナーです！」

最後まで考える前に顔を真っ赤にした蒼香の叫び声でかき消された。
うん、なんだろう。間違っではないけど複雑な気分だな。
蒼香はおばちゃんにからかわれながらお釣りを貰っている。
どうでもいいけど、そのドレスはちゃんと返しておけよ。

はあ、こんなんで大丈夫なのか……？

あー、疲れた。

あの後、薬やら何やら買いに行つたのだが、買った物の大部分を俺が持つて宿に戻つたのだ。

そういえばこの通貨は銅貨、銀貨、金貨の3種類のものである。

銅貨100枚で銀貨1枚分、銀貨100枚で金貨1枚分だ。

ちなみにバルドスのおっさんから貰つたミスリルの指輪は最低でも金貨50枚分らしい。

ここの小さな家1軒の値段の相場が分からないから何とも言えないけど、向こう換算だと、1000万だとして50で割るんだから…
…金貨1枚で20万。
20万を100で割つて銀貨1枚2000、それを100で割るから銅貨1枚20円。

……んん？

服屋で買ったコートが銀貨1枚でお釣りが返ってきたんだから2000円以下な訳で。

向こうなら2万以上したつておかしくないのに。

物価の違いか？

リングみたいな果物も1つ銅貨2枚だったし。

「ほら、手が止まつてるよ！」

「ぬあ、冷たっ！」

蒼香の怒鳴り声の後、頭に衝撃。

顔が濡れている。

あの野郎、動くのが面倒だから水の魔術使いやがった。

今何をしているかという町空き地で俺は剣の素振り、蒼香が少し離れたところで魔術の練習である。

買い物が終わったのが昼を少し過ぎた頃。

その後遅めの昼食でその時点で2時。

そこから依頼を受けると帰ってくるのが夕方になってしまふのととで、今日のところはこうして修練に励むことにしたのだ。

受ける依頼にもよると思うのだが、何も訓練していない状態で外に出るのは恐かったので言わないでいた。

「ふっ！」

「重心の移動を意識して、全ての動きが繋がる様に！」

相手の左肩から斜めに斬り下ろす袈裟斬り、突き、挟みながら引き抜き右足を1歩引きながら右肩から斜め、逆袈裟に切り払う。右足に力を入れてもう一度前へ踏み込む、が唐突にカクン、と膝が落ちる。

剣が落ち、重い音が聞こえる。

「限界、かな」

「……そうらしい」

蒼香が近寄ってきている。

手にも足にも力が入らない。

膝立ちは面倒なので、そのまま寝っ転がる。

あー、きつー。

「1時間半。正直ここまで持つとは思ってなかったよ」

俺も自分で驚いてるさ。

1キ口程度の物でもそんな長い時間振り回すだなんて、もやしっ子の俺には到底出来ない筈なのに。

けどまあ、限界はあったようで。

魔術で身体能力の強化？

それとも身体能力の底上げか？

考えたって分からないがそんなところだろう。

風が吹く

良い風だ。

少しだけだが体の熱を冷ましてくれた。

「まあ、毎日続けることだね。継続は力なり、ってね」

「ああ、そうだな」

ここに来てから妙に体が軽いというか、無駄なく使っているというか。

お得な特典とでも思っておけばいいのかね。

右手を目の前に持ってきて、握ってみる。

体力の回復も早くなっている。

いや、早すぎるくらいだ。

「休憩終わったら魔術の練習ね」

「りょーかい」

転がったまま手をパタパタと振って応え、そのまま大の字になって空を見上げる。

陽は少し傾いてきているが、それでもまだ3時半。

雲もまばらにあるが、周りに高い建物も無いので澄んだ青空がよく見える。

あっちの世界じゃこんな風に空を見上げたこともなかったな……。

『集う火は風に包まれ緋となりて、天をも焦がす剣とならん！』

炎の魔術か。

蒼香のほうを見ると予想通り、炎が燃え上がり赤い柱となっている。
あー、また失敗か？

『っ！
ディソルブスベル
術式霧散！』

蒼香の元へと集まっていた炎はコントロールを失ってそのまま荒れ狂う波と化す。
波が蒼香をも飲み込もうとしたその時、透明な魔力が放たれ業火を消し去っていく。

術式霧散

コントロール出来なくなった魔術を消すための魔術。
魔術師は初歩的な魔術とともにまずこれを出来るようにするのだとか。

俺はまだそこにも到達出来ないがな……。

体を起こして胡座こざをかき、目を閉じて集中。

蒼香は言っていた。

今の俺は、例えるなら電気の点け方を知らない子供なのだ。

要するにスイッチが分かっているのだ。

だから自己の深いところまで潜って自分の回路を認識するべきだ、と。

そんなこと言われたってやり方は全く分らないんだけどな。
とにかくイメージだけでも形作る。

しかし、スイッチねえ……。

スイッチっていうとドクロマークがついた自爆用の物しか思い浮かばないんだけどなあ。

魔術を使う度に毎回自爆か？

『術式霧散！』

おー、俺が数えただけでも今日8回目だな。

蒼香で思い出したが、確かあいつのスイッチの入れ方は自分を魔術の回路そのものにする事だったか。

俺は何だろうなあ……。

ゴロン、と再び寝っ転がる。

「まだ決まらないの？」

いつの間にか蒼香が隣に立っていた。

言うまでもなくスイッチのことである。

「影も形も出来てねえよ。お前はどうかやってスイッチに気付いたんだ？」

「うーん、どうやってって言われてもなあ。暴走の後からいつの間にか使えるようになっていたとしか」

「あ……、悪い」

教会での出来事と、蒼香の慟哭たういくを思い出してしまい、少し気まずい。

しかし蒼香は首を横に振っている。

「うっん、もう大丈夫だから」

蒼香の顔に暗い影はなく、むしろ晴れやかである。

……強いんだな。

絶対に言葉にしてやらないが、素直にそう思う。

この心境の変わり様の原因は分からないけど、少なくともいい方向に向かっているはずだ。

しかし困った。

スイッチに関しては何も分からず仕舞いである。

地道に頑張れってことなんだろうか。

早めに使えるようにしておきたいんだけど。

主に俺の身の安全の為にな！

……自分で言ってる情けないなあ。

これ以上考えていてもいい方向には行かなそうだから話題を変えるか。

目下、気になっていることといえば……

「お前はどんなんだよ。出来そうなのか？」

「私？ うーん、まだ何とも言えないかな……」

今話しているのは魔術を習う時に一番初めに言ってみた合成魔術のこと。

少なくとも俺は出来そうにないので蒼香にやらせてみている。

「出力が異常に上がっちゃうから制御が難しいんだよね。私の普通の状態より10倍近く跳ね上がるからなあ……」

おい、どこまで完璧超人になるつもりだ。

火力が低いのが欠点だったのにそれすら無くなるってどこのチートだ！

少しはその才能をよこせ！

「まあ魔力がごっそり持つて行かれるから、今の私じゃ2、3回使えれば良い方だよ」

「さっきからずっと練習してたじゃねえか」

さっきも言ったが俺が数えただけでも8回練習しているんだ。

魔力が足りないってことはないんじゃないか？

蒼香は首を横に振る。

「さっきまでは制御を全く考えてずに出力だけ上げる練習してたからそんなに負担もかからなかったの。だけど私の場合大きな魔術を制御するときは何かしらの武器の形にしなければいけないから」

「何で？」

思い出してみれば、俺が見たことのあるこいつの魔術は属性は違うが槍と剣だ。

「ああ、その説明もしてなかったね。魔術にはそれぞれ性質があるんだよ。その性質の他に特別な性質があったりすると特性、ってね」

確かに冒険者の登録のときにそんな欄があった。

で、その特性とやらが蒼香の魔術に関係している？

つまり

「魔術を武器の形にする特性？」

「うん。正確には武器の形にしか出来ない、だけどね」

燃え上がる音と熱気を立てて蒼香の右手に小さな赤い光が生まれる。火のナイフか。

よく見てみると、普通の炎のように燃え上がるだけでなく刃物としての形が整っている。

「特性“**武具**”。私はかなり選択肢が広い部類なんだけど、それでも**範囲殲滅魔術**みたいなことは出来ない」

その代わりに接近戦は得意な方だけど、と付け足してナイフを消した。

要するに近く中距離の魔法戦士？

でも出力の問題をどうにかすれば弓やら何やらで超遠距離から狙撃とか出来そうじゃね？

考えれば考えるほどチートくさい才能の持ち主だな。

しかし、特性は分からないにشتって基本性質くらいは知っておいたほうがいい気がする。

「とりあえず基本性質を教えてくれ。今は何でも知っておきたい」

「いいよー。まずユーキの属性の“**光**”は開放、かな？ 詳しくは後でね？」

「はいよ」

「次に“**火**”ね。燃焼、もしくは加熱。あ、基本性質って言うても

複数あったりするから私が知らないものもあるかも知れないよ?」

ふむふむ、火は燃焼と加熱。

そのまんまだな。

これなら他の属性も分かりやすそうだ。

「“水”は浸食、“風”は発生、“土”は造形、“氷”は冷却と凍結、“雷”は伝達、“闇”が収束。

……知ってるのはこれくらいかな」

微妙に分かり辛いものがあるがそれは後で聞こう。

敵を知り、己を知れば百戦危うからず、っと。

「それで開放は……、何て言えばいいかな?」

蒼香は両手を胸の前にあげる。

それはまるで壊れやすいシャボン玉を包み込む様に、優しくな手つきである。

白い光が蒼香の体を覆^{おお}っていく。

白は恐らく光の属性の特色なのだろう。

『^{ひかり}白の精霊、満ちて溢れよ』

蒼香の両手の間に光が集まって球体となる。

光の球がサッカーボール程の大きさになった直後、突然光が強まり視界を白に染め上げていく。

目がチカチカして痛い。

『開放』

蒼香の言葉と共に光の柱が生まれ、空へ昇って消える。
互いに無言のまま、時間だけが過ぎていく。

……え？

「結局何だったんだよ？」

「私もよく分からない」

……。

立ち上がるのも面倒なので手招きして近くに呼ぶ。

蒼香の頭に手が届くようになったのでとりあえず軽く引っ叩いておく。

鈍い音がするからちゃんと中身は入っているようだ。

「何すんのさ!？」

「いや、あんまりにもバカっぽかったんで中身の確認を」

魔術の使いすぎで頭が回らないのか、それとも最初からこういう奴だったのか。

…… 多分後者だろうなあ。

まだ何か言っている蒼香の言葉を聞き流して自己の中へと潜る。

恐らく開放っていうのはそのままの意味だ。

蒼香がやって見せたのは例なのだから、そのままやってやればいいだけの話。

両手を胸の前に。

スイッチ？

そんなもん知らん、何とかな……らないだろうけど、今は無視。
後は、唱えるだけ。

『^{ひかり}白の精霊、解放たれよ』

カチリ、と何かが噛み合う音がする。
手の中に、小さな光が生まれる。

『開放
』

「えっ？」

世界は白に
子供たちよ、私の言葉を

Page 12：魔術と訓練とゝその2ゝ（後書き）

更新が遅くなってしまい申し訳ありません。
生きてますよー。

読んで下さってる皆様方、ありがとうございます。
お時間があれば、どんなものでも構いませんので評価や、感想を頂けると嬉しいです。
でわでわ。

世界は白に

またあんたか。

子供たちよ、私の言葉を

今日はいつもの愚痴は無いんだな。

ええ。私とあの子は、違うから

いつもの優しいげな声から一変し氷の様に冷たい声が聞こえ、ぞわり、と全身に寒気が走った。

何だこいつは。

顔も姿も分からないあの人と似ている気がするが、決定的に何かが違う。

あなたがそうなのね

……何の話だ。

お人形さんと一緒にいるだなんてあなたも物好きよね

……何の話だと聞いているんだが？

知らないのね、可哀想な子。でも

こ　こ　で　死　ね　ば　関　係　な　い　わ　よ　ね　？

死神ガ持ツヨウナ大キナ鎌デ、オレノクビヲ

白の世界を赤が染めていった

「ユーキ、しっかりしてっ！」

蒼香の声だ。

いつの間にか瞑^{つぶ}っていた目を開けると、蒼香の顔と青い空が見える。

……空が見えるってことは倒れてるのか。

最後だけやけにはつきりと見えたな。

白い人、大きな鎌。

体を起こして首をさするとヌルリとした感覚がする。

案の定、見てみると赤い液体である。

「良かった、目を覚ました……。光が収まったと思ったら倒れてるんだもん、ビックリしたよ」

安心からだろう、息をついている。

俺の首の怪我には気付いてないようだ。

「……蒼香は、見てないのか？」

「え、何を？　って、血出てるよ!？」

蒼香は慌てて荷物が置いてあるところに行く。

もしもの為に簡単な治療道具はいつも持っているということなので、それを取りに行ったのだろう。

しかし、あれを見たのは俺だけなのか。

近くにいたから蒼香も見ているかと思ったんだが、どうやらハズレのようだ。

お人形さんと一緒にいるだなんて

言われた言葉を思い出す。

くそっ、一緒にいるって言ったらあいつしかないじゃねえか。
人形だとか好き勝手言いやがって。

大体何なんだよ、あいつは。

いきなり襲い掛かってくるなんておかしいだろ。

理不尽な出来事に怒りが込み上げてくるが、ぶつける相手もない。
小さく、短い間隔で足音が聞こえてくる。

蒼香が戻ってきたようだ。

手にはタオルと小さなウエストポーチを持っている。

「首、見せて」

顔を少しだけ上に向けて見やすいようにしてやる。
血をタオルで拭いて傷口を見ている。

「傷は深くないから大丈夫だろうけど……何でこんなところを」

恐らくあれに斬られたんだよな……。

……待てよ？

何で俺は生きてるんだ？

あれは本気で俺を殺す気だっただろう。

実際に首に傷が出来ているのだから影響が無いわけではない筈だ。
なら、なんで俺の首は繋がっていて、こうして生きていられる？

「どうしたの？ 怖い顔して」

「……いや、何でもない」

話そうと思ったが、どうしても『人形』という単語が頭から離れなかったのだ。

いや、人だろうが人形だろうが怪物バケモノだろうが、蒼香は蒼香以外の何者でもないのだから俺には関係ない。

だけど

何も出来なかった。

あいつが言っていた『人形』、それが示しているのが蒼香だと理解しても、自分の体は指先すら動かなかった。

へビに睨まれたカエル？

違う。

例えるなら自然の雄大さを見たとき自分が小さな存在だと感じるよ
うな、そういうものの類たぐいだった。

「はい、お仕舞い。きつくない？」

「ああ、大丈夫」

治療はあっさりと終わった。

触ってみると分かるが案外しっかりした巻き方で、きつくも緩くもない。

俺も高校で応急処置は一通り習ったがここまで短時間で綺麗には出来ないだろう。

器用なんだな。

人は見掛けによらないとは言うが、本当にその通りだと思う。
見た目どおりのアホの子だと思えば手先が器用だったり。

……魔術を使えるってこと以外は普通の女の子なんだよなあ。

「何がいけないんだろうね？」

「え？」

マズイ、何も聞いてなかった。

反射的に蒼香の方を見たはいいが、そこから続かない。

「ユーキのことなんだからちゃんと聞いててよ」

「悪い……」

他の事を考えて聞いていなかったのは確かなので素直に謝る。

「それで、何だって？」

「何でユーキは魔術が使えないのかって話だよ」

グサリ、と言葉の棘が刺さる。

まさかそんなにストレートに言われるとは思ってもみなかった。

そりゃあ使えないけどさ、もう少し言い方ってものが……。

「正確に言えば、魔術の発動は出来ているんだ」

「ん？」

ネガティブな思考の途中、蒼香の声で引き戻される。

魔術の発動は出来ている？

なら、足りないものは制御？

だけど制御が出来てないからって「使えない」だなんて言うか？

「魔術の構成は仕方ないとして、発動もしてるし特別に制御が必要な魔術でもなかった。魔力量が足りないって訳でもなさそうだし、

本当に何が原因なんだか分からないよ」

俺が思い当たることはあの夢しかない。

1回目は暴走、2回目で殺されそうになり、じゃあ3回目は……？
2度あることは3度あるなのか、それとも3度目の正直なのか。
もう一回あれに会ったら死ぬよな、俺。

「じゃあラスト1回。これで出来なけりや魔術は諦めよう」

「……いいの？」

死にたくないからな。

毎回あれが出てくるんじゃ命がいくつあっても足らんわ。

それに、ただのワガママだった訳だしな。

使えなくても悔しいだけで、困ることはない、筈。

目を閉じて、集中。

思い描くのは小さな光の球。

魔術を使う為に体の中の歯車を噛み合わせて回す。

始めはゆっくりと、少しずつ速く。

体中に熱が湧き上がるのを感じる。

体の中を駆け巡る、教会で属性を調べたときにも感じたモノ。

あの時は分からなかったけど、今なら分かる。

これが、魔力。

巡るチカラを右手へと集める。

『^{ひかり}白は消えず、^{かげ}黒を照らす

^{ゆめ}幻想と知りながら、尚も追い続ける』

目を開き、しっかりと差し出すように突き出した右手を見据えて

『^{ひかり}白よ、灯れ
』

閃光。

辺りを真っ白な光が包む。
眩しいが、左手を目の前に翳^{かざ}して光が消えるのを待つ。
数秒程して光は消えた。

「出来た……のか？」

実感など全くない。

残ったものもなく、ただ呆然としている。

それこそ夢だったのではないかと疑ってしまう。

「凄いじゃん！ あれだけ出来れば上出来だよ！」

唐突に背中を叩かれた。

不意に貰った一撃は結構痛い。

蒼香を見ると満面の笑みで俺の背中を何度も叩いている。

……そうか、出来たのか。

徐々に嬉しさが込み上げてきた。

「でも何で出来たんだろうね？ 詠唱も教えてないのに」

出来たのは、きっとあの白い空間に行っていないからだろう。

詠唱は……分からない。

先程、蒼香を真似した様なものではなく、まるで知っていたかの様に自然と口遊^{くちやう}んでいたのだから。

「まあ、細かいことはいつか！ さっきのイメージを忘れないようにね」

「はいよ」

蒼香に返事はしているが、別のことを考えていた。

あの白い空間のことである。

何が原因で向こうに行くんだ？

あいつらは誰なんだ？

何で殺されかけた？

疑問は尽きない。

だが答えてくれる人もいない。

「まあ、魔術が使えただけでもよしとしようか」

俺の呟きは風に吹かれて消えていった。

「やられたわ……まさかあの子が私に齒向かうとはね……」

白い空間に女がいた。

白い肌、白い髪、白い服。

全身が白で構成されている。
違う色を挙げるとするなら、女の瞳の赤と、右腕から流れ出ている
鮮血だろう。

「あんな人形と人間に何を望んでいるのかしら。あなたを救えるの
は私だけなのに……」

声に狂気が混じっていく。

右腕から鮮血が飛び散っていても気にした様子はない。

「そう、あなたを救えるのは私だけ。アハッ、アハハハッ！」

言葉はいつの間にか笑い声となって空間に響き渡る。

床に散った赤は少しずつ消えて無くなっている。

後に残ったのは誰もいない白い空間と一振りの大鎌、そして血に塗
れた右腕であった。

Page 14：喧嘩と拳と

鬱蒼^{うつそう}と茂っているが、陽の光が届く森の中。

息を潜め、身動きをせずに木々の陰^{かげ}に隠れている。

……来た。

ガサガサと草木を掻き分ける音が近づいてくる。

息を浅く吸って、深く吐く。

音が大きくなってきた。

腰におっさんから受け取った剣も差してはいるが無手である。

「ユーキ、行つたよ!」

了解!

聞こえてきた言葉に心の中で返事をして一気に飛び出す、が

「は……?」

「クエエエエ!」

大きな影が俺へと突っ込んで

「本っ当にありがとう!」

「いえ……」

ギルドの前、初めての依頼

下位の赤石『アストールを探して!』

の依頼主である女性からの何度目か分からない礼に、力無い声で答える。

アストールとは移動や荷物の搬送はんそうに使われる大型の鳥　俺たちの世界で言うところのダチョウを全身フサフサにして1周り大きくした様な
である。

「柵を越えちゃいけないっていつも言ってるでしょう!」

依頼主の女性は横にいるアストールを叱っている。

どうやらこの依頼の対象だったアストールは抜け出しの常習犯らしい。

いつもは平原で寝ていたりするらしいが、今回はそれほど凶暴ではないが魔物が出る森に入ってしまったのでギルドに依頼を出した、ということだった。

ただの搜索なら黒石のランクなのだが、森に入ったので2つ上の赤石になったそうだ。

「それで、本当に大丈夫ですか……?」

「まあ、それなりに頑丈に出来ているんで。そんなに気にしないでいいですよ」

俺の姿を見て心配してくる。

それもそうだろう、何せ今の俺は上半身と頭に包帯が何重にも巻いてある。

森の魔物にやられた訳ではない。

端的に言えば轢ひかれたのだ。

悪びれもせず、そこで突っ立っているアストールに。

作戦は完璧だった筈なのに……。

その1 蒼香がアストールを発見、追いつける。

その2 俺が待ち伏せている所まで誘導。

その3 捕まえる。

……俺と蒼香の役割が逆だったか。

包帯が巻かれてはいるが、実はそれ程大きな怪我はしていない。

いや、怪我はしたんだが蒼香の応急処置 『癒し』の魔術 で
大体治してもらったのだ。

俺がこの世界に来たときに狼にやられた怪我も魔術で応急処置をしたそう。

「貰ってきたよー、ってまだやってたの？」

ギルドから出てくる蒼香。

手には今回の報酬が入った小さな袋を持っている。

「でも、うちの子が怪我をさせてしまった訳ですし……」

「ユーキは大丈夫って言ったんですよ？ なら気にする必要はありませんよ」

おい。

一応危ない状態だったんだぞ？

いや、責めるつもりもないし、これ以上謝られても困るけど。

ただお前が言って終わりってのは俺の立場がない気がするぞ。
などと考えている間に話は終わり、依頼主も帰っていく。

「好意が6割で打算が4割、かな？」

「何の話だ？」

女性が行った方向を見つめながら蒼香が呟いた。

「いや、分からないならいいんだけど」

「？」

ますます頭を捻る。

考えても分かりそうにないが、やはり気持ち悪いのだ。

「ほら、そんな所で突っ立ってないで。時間あるからもう1個くらい依頼を受けよう？」

そう言つて再びギルドに入ろうとする。

が、ギルドの扉が開いて中から人が出てくる。

あのバカ、気付いてねえ！

「痛っ！」

「ああん？」

鈍い音が2回。

ぶつかつた音と、蒼香が尻餅をついた音。

あー、やっちまつた……。

蒼香がぶつかつた相手は強面こわもての、いかにもチンピラのような奴だつた。

黒い髪は後ろで束ねてあるがパイナップルみたいな感じでボサボサ、
無精髭ぶしやうひげで目付きも悪いが薄手の服に隠れている上半身は鍛え上げられた筋肉が自己主張している。

「どこ見て歩いてんだ、ガキ」

「う、ごめんなさい」

蒼香を立たせてやって向き直る。

相手は喧嘩腰である。

蒼香も素直に謝っているがそれでも相手は納まらない。

それどころか付け上がってますますこちらを責めてくる。

ガヤガヤと周りが騒がしいので見回すと俺達を囲むように人垣が出来ている。

どうやらチンピラが大きな声を出しているので人が集まってきてしまったようだ。

「おい、そっちのガキも」

周りに気を取られていた意識が戻ってくる。

気がつけば男は蒼香ではなく俺の前に立っている。

「お前だよ、ガキ。連れがしたこと分かってんのか？」

「……」

めんどくせえ。

厄介な奴に関わっちまったな。

男はまだ何か言っているがどうせくだらないことなので聞き流す。ギルドの受付さんも扉の辺りから迷惑そうにこちらを見ている。

俺たちは関係ないですよー、悪いのはこのチンピラですよー。

視線を送ってアイコンタクトを試みるが逸らされた。

あー、無駄な時間が過ぎていくー。

「っ、聞いてんのか!？」

男の声が聞こえたので見ると、顔面に向かって拳がきている。咄嗟に両腕で守るが、衝撃と共に妙な浮遊感を感じる。世界が回転して、体に鈍い痛みが走る。何が起きた？

「ユーキ!？」

「くっ、ははっ! 何だ、抗魔術^{レジスト}も出来ないのか!？」

何か言ってるよ。

1人で盛り上がって楽しいのかね？

しかしまあ、痛いこと。

今の俺はうつ伏せの状態で、相手の脚が少し見えるような感じである。

体中がズキズキと痛みを訴えている。

まるでハンマーで殴られたようだ。

「大丈夫!？」

「おーおー、女に心配されちまって。羨ましいねえ」^{うらやましい}

蒼香！。

心配してくれるのは嬉しいが、スカートだっことを忘れるな。前で屈^{かが}むんじゃない、スパッツが見えてるぞー。

流石にそうしている訳にもいかないので立ち上がって状況確認。結構飛ばされてるな。

元の立ち位置から5メートルといったところだろうか。人垣に突っ込むような形で倒れていたようだ。

「お、やんのか？　また吹き飛ばしてやるぜ？」

……レジストがどうか言っていたから十中八九、魔術絡みだろう。
抵抗する、か。

随分分かりやすい単語だな。

少しだけ腰を落として軽く地面を踏みしめる。

剣は取らずに拳を構える。

「おいおい、その腰のもんは飾りか？」

「いや、使いたくないだけさ」

喧嘩で人を殺したくはない。

それにこんなことの為にこの剣を買った訳じゃないしな。

……いや、自分の身を守るためだから使ってもよさそうだが。

まあ、要するに。

恐いんだろうな。人を殺してしまうかもしれないことが。

だから適当に理由を付けている。

「ユーキ、やめて」

「……形だけだ、隙を見て逃げる」

蒼香の静止の言葉に呟きを返す。

言われなくても初めから逃げるつもりだった。

ようやく魔術の初歩が使えるようになっただけの俺が、ザコだけどころと強いぜ！　みたいなチンピラに勝てる訳がないだろうに。

少しずつ脚に力を入れていき、すぐにでも飛び出せる体勢になって
タイミングを計る。

しかし

「逃がさねえよ！」

「なっ！？」

突如として突風が吹き荒れ、煽^{あお}られてバランスを崩す。

風の音に遮られてはいるが、周りの人たちの声も聞こえることから結構な範囲で風が起きているんだろう。

地面に這う様に体を屈^{かが}めて風の影響を受けないようにする。

風の魔術か？

吹き荒れる風の中、平然と立っている男を凝視する。

緑色の靄^{もや}のようなモノが纏わり付いているのが微^{かす}かに見えた。

「“風”の属性、ランクとしては下の中から上あたりかな」

俺と同じような体勢の蒼香の言葉が聞こえる。

緑は風ね。

しかしどうするかね。

このままだと周りに迷惑をかけるだけだ。

先程からギルドのお姉さんの視線が強くなっているのがわかる。

「おら、さつさと立てよ。その顔を1発ぶん殴るんだからよお！」

やなこった。

殴るから立て、と言われて態々^{わんわん}立つ奴がいる訳ないだろうに。

「それともその女に泣き付くか？ 見つともねえ姿だろうがな！」

男が笑い声を上げる。

それが一番確実な方法なんだけど、やっぱり格好悪いかね。仕方ない、と立ち上がるうとして。

蒼香が俺よりも先に立って男を見据えていた。

ヴェントウス・ファルクス

『風の大鎌！』

見えない何かが吹き荒れる風を裂いて、地面へと突き刺さる。

アニメス

『発生！』

刹那、地面に刺さったものからも風が吹き荒れ、俺たちの動きを阻害している風と互いにぶつかり合って消えていく。

つか、風強っ！

台風とまではいかないけれど、かなりの風だ。

「これ以上勝手なことを言うのであれば、私が相手になるよ」

程なくして風が止み、蒼香が男に向かって敵意を剥き出しにしながら言い捨てる。

待て、お前が切れてどうすんだ。

さっきまで止めるって言ってたじゃねえか。

「勇ましいねえ。そっちのガキに見習わせたらどうだ？」

「あなたには関係の無いことだよ。で、やるの？」

俺の心など無視で、勝手に話が進んでいく。

周りも止める気は無いようで野次を飛ばしている奴らもいるくらいだ。

内容は蒼香を支持するものが大半だが、中には俺を罵倒するのもち

ラホラと聞こえる。

ああ、しょうがねえな！

「間違えるなよ、あんたの相手は俺だろうが」

蒼香を背に庇^{かば}う様に男の前に立ちはだかる。

声は震えてないな？

脚は？

腕は？

……大丈夫だ、恐くない。

あの白い死神に比べたらこいつなんぞ子供に思える。

「はっ、ド素人がなめた口聞くじゃねえか」

「そのド素人に今から地べた這わされるんだぜ？」

挑発になるか分からないが鼻で嗤^{わら}ってやる。

こっちは魔術のド素人どころか喧嘩もほとんどしたことがない一般人なんだよ。

正面から行ったって勝てる訳がないんだから小細工だろうが何だろうがしてやるさ。

「ユーキ、大丈夫なの……？」

後ろから蒼香の心配する声が聞こえる。

焚^たきつけておいてその言葉は無いだろうに。

「安心しろ、華々しく散ってやる」

冗談交じりに笑いながら言っただけ。

冗談に聞こえないかも知れないが、まあいいだろう。

さて、俺の戦力確認だ。

腰の剣は使わん。というか怖くて使えん。次。

そうなると殴るやら蹴るやらしなきゃならんが……まあなんとかするだろ。次。

魔術は今のところ光を放つことしか出来ない。

……絶望的じゃねえか。

何で俺はこんなことをしているんだか。

「ユーキ、前！」

男が突っ込んできている。

溜息を吐きなくなるがそうも言ってられないようだ。

左足を前に出し、腰を落として迎撃体勢。

左手は軽く前に、右手は顎あごを守るように。

顔に向かって殴ってくるのを左の肘ひじあたりで受け止める。

左腕に鈍い痛み、続けて全身に衝撃。

脚で地面を削る感覚と、背中に何かが触れる感触。

「大丈夫!？」

今受け止めてくれるのは蒼香しかいないか。

感謝しつつ、どうしたものかと頭を捻る。

ありがたいことに男はこちらを見てニヤニヤと笑っているだけで追撃はない。

チャンスは一回。

自分の中の歯車を回してスイッチを入れる。

『ひかり白の精霊 集い来たりて放たれよ』

よし、仕込みは出来た。

後はあの男次第だけだな……。

どこにも力を入れず、自然体で立つ。

男との距離は約4メートル。普通ならば一息では詰められない距離だ。

少しずつ体重を前に掛けて行って

「んなっ!？」

有り得ないような距離を跳んで、男の眼前へと迫る。

驚いて固まっている男の顔の前に左手を出して、唱える。

『開放　灯れ!』

光が溢れる。

一瞬の事だったが、目晦まし程度にはなったようで、男は片手で目を押さえて片方は適当に振り回している。

その男の腹に出来る限り強く蹴りを入れる。

独特の弾力が脚に返ってきて、思わず顔をしかめるがそんなことは気にしてられない。

1歩踏み込みよろめく男の顎に掌底を向けて
思い切り打ち上げる!

男は変な呻き声を出しながら後ろに倒れる。

加減せずにこれだけ綺麗に顎に入れば起き上がれないだろ。

仰向けに大の字になって倒れている男の横に膝立ちになり呼吸を確認する。

よし、生きてるな。

「で、どうすんだ？」

野次馬たちの歓声が気恥ずかしいが、悪い気はしない。
生きていることさえ確認できればよかったので、立ち上がって蒼香
に声をかける。

顎に打ち付けた右手が痛いのでプラプラと左右に振りながら男に背
を向けた。

向けてしまった。

「！？ 後ろ！」

蒼香の張り詰めた声。

振り返ると気絶している筈の、狂気に満ちた男の姿。

奇声を上げてこちらへ突っ込んでくる。

とにかく距離を離そうと後ろへ跳び退ろうとするが、動けない。

ミシリ、と鈍い音と、硬い何かに叩きつけられたような衝撃。

何が起きているのか分からない。

男がこちらを見ているのは分かる。

それだけだ。

男はナイフを取り出して

俺の首目掛けて振り下ろした。

P s g e 1 4 : 喧嘩と拳と(後書き)

どうも、更新が遅くなって申し訳ありません。
テスト期間真っ只中の作者です。

そろそろ夏休みですね。

今年は涼しいかと思いきや、うだるような暑さで……
皆様も健康にはお気をつけ下さい。

P a g e 1 5 : 講義と痛みと（前書き）

今回の話は3／4程が説明で成り立っています。
くどいですが目を通して頂きたいと思います。

死んだと思ったださ。

あの状態から蒼香や他の人が間に合うとは思えなかったし、何よりも恐怖で頭の中がいつぱいだった。

だけど、生きている。

結論から言つとだな。

「目標の沈黙を確認」

ギルドのお姉さん強いわ。

チンピラのナイフが俺に刺さるかと思ったら、いきなり男の体が横に吹き飛んだ。

視線の先には、さつき迷惑そうな顔をしていたギルドの受付のお姉さん。

訂正、今も迷惑そうな顔をしているわ。

何というか、不機嫌なオーラが滲み出ている感じがする。

ちなみに茶髪のショートカット。メイド服に似た、ギルドの制服を着ている美人さんである。

「ユーキ、大丈夫!？」

「まあ、何とか……」

問いかけに生返事を返してしまったが仕方ないだろう。

不機嫌そうな彼女がさつきからこっちを凝視していて恐いんだから。

蒼香の体に暖かな白い光が灯る。癒しの魔術だろう。
殴られたであろう頬がズキズキと自己主張してくれている。

「……」

「え？」

ぼそり、と何か呟かれた気がして思わず聞き返してしまう。
すると不機嫌な顔のまま、俺の目の前まで来て胸倉を掴んで引き寄せられた。

「仕事を、増やさないで、頂きたいのですが？」

「は、はい！ 申し訳ありません！」

頬の痛みも忘れ、背筋を伸ばして答える。

思わず変な口調になってしまった。

いや恐いんだよ、本当に。

目の前でやられてみる、誰だってこんな風になるわ！

手を放されて、俺の体が支えを失い蒼香に受け止められる。

「なんなんですか、あれは。自分よりも格上に挑んでおいて、相手が倒れたからって放置ですか。馬鹿ですか？ 馬鹿なんですよ。それとも自殺願望があるんですか？ ギルドの前で死なれて困るのは私たちなんですが」

「ちょっと！」

いいんだ、蒼香。

俺には反論のしようも御座いません。煮るなり焼くなり好きにして

下さい。

嫌な覚悟を決めて、項垂^{うなだ}れている俺に、ですが、と続けられ。

「た^{あなた}とえ貴方の方が弱かろうと、そっちの女の子を庇^{かば}ったのは認め
てあげましょう。貴方が逃げなかったおかげで周りに大した被害が
出なかったのも事実ですし」

……褒められた？

彼女の顔を見ると、さっきまでの不機嫌な顔ではなく微笑みを浮か
べている。

きつと言ったことは全部本心なんだろう。

何だかすつきりした顔だし。

踵^{かかと}を翻^{ひるがえ}して、チンピラを引き摺^ずってギルドへ入ろうとする。

「助けてくれて、ありがとうございます！」

大声で言うのは少し恥ずかしいが、こちらに背を向けている彼女に
対して素直に礼を言う。

彼女は足を止めて横目でこちらを一瞥^{いちべつ}すると、空いている方の手を
プラプラと振ってそのままギルドへ入っていった。

ヤバイ、格好いいな。

「むー……」

彼女が入ったギルドの扉を見つめたまま蒼香^{うな}が唸^{うな}っている。
どうしたんだ？

「いや、私の出番が取られた気がして」

「ん？」

あのお姉さんにか？

……あー、説教くさいことはほとんど言われちゃったから、そのことかね。

だけどまあ、今回は仕方ない。

「あの人が助けられなかったら死んでたしな」

「分かってるよ。……私がユーキを助けることが出来なかったっていうのも、悔しいんだけどね」

む……。

確かに、それは何となく分かる気がする。

助かったならいい、とも思えるけれど、パートナーを助けられなかったというのは結構後に尾を引くものだ。
だが、そんなお前に言ってやろうじゃないか。

「安心しろ、これから何度も助けられることになるからな」

「むしろ安心できないよ！？」

お、蒼香のツツコミ。珍しいものが見れたな。

やっぱりいつもの蒼香の方がやりやすくて助かる。

クスクスと蒼香が笑っているのが分かる。

さて、と。

「流石にギルドに入り難いからな。練習でもするかね」

「そつだねー、じゃあ行こっか」

ほら、早く立つて、と急^せかされて立ち上がる。

周りの野次馬なんぞ気にしていないようで、俺の手を引っ張って行く。

「……」

野次馬たちの声で聞き取りにくかったけれど、ありがとう、と聞こえた気がした。

「はい、じゃあ今回の講義を始めたいと思いますー」

場所は前回と同じく、町の外の少し開けた場所。（と、いつてもすぐそこに町は見えているのだが）

蒼香と俺で正面に向かい合って地面に座る。

今回はあまりにも俺が知っていることが少ないのでレジストについて軽く説明を聞いてから何でもいいので質疑応答、時間があれば練習という形にもらった。

「んー、抗^{レジスト}魔術っていうのはまあ、そのまんまの意味で魔術に抵抗するための……魔術？ 技術？」

首を傾^{かし}げながら説明してくる。

何で疑問系なんだよ。

「とにかく、魔術を使う魔物や魔術師と戦う為に必要なものだよ。こんなに早くその機会があるとは思ってなかったからユーキには痛

い思いをさせちゃったけど……」

「ん、大丈夫だ。蒼香が治してくれたし」

殴られた部分に手を当てて確認する。

腫れも引いてるからもう大丈夫だろう。

顔の形が変わってたらしいから……、素直に感謝。

元がそんなに良くないのにこれ以上悪くされたらたまったもんじゃない。

「よかった……。じゃあ、続けるね？ 簡単に言つと魔術の効果を

緩和する障壁を作り出すの。イメージとしては……ディソルブスベル術式霧散を壁に

したような感じ。勿論、自分の魔力、魔術じゃないから相手の魔術

より抗魔術レジストの壁に込めた魔力量が上回っていたり、よっぽどセンスが良かったりしないと完全に掻き消すことは難しいけどね」

「抗魔術を極めれば相手の魔術は全く喰らわないのか？」

こんなもん極論だけだな。

極めなくても魔力を込めればいいだけの話だけど、魔力を込めすぎて自分が攻撃出来ないだなんてことになったら笑い話にもならん。

「まあ、本当に極めればつてところかな。だけど防ぐ技術があるならそれを破るための技術もあるよ。ペネトレイト障壁貫通つていてね、相手の障壁に干渉して盾としての効果を無くすの。これは難易度高いけどね」

それもそうか。

しかし、面倒だな。そんなことも言つてられないけど。出来なければ簡単に死ねるからな。

「取りあえずは抗魔術の練習か？」

「そうだけど、まだ無理だと思う。形を変えたり維持したりするための練習とかもしてないからね」

壁って言うくらいだから魔力を体に纏うだけじゃ駄目なのね。

俺が使える魔術は今のところ一瞬で効果が無くなるというのに、維持もしなくちゃいけないとか、道は長いな……。思わず溜息を吐いてしまう。

「何か聞きたいことは？」

「魔力量が少ない人やセンスが無い人はどうやって抗魔術を？」

溜息ばかり吐いてられない。

俺の生存確率を少しでも上げるために出来ることは何でもしてやるさ！

「まあ、その2つが無くたってある程度は緩和することが出来るから。完全に消せなくたって障壁張りながら逃げ回ればいいし、他の才能のある人と組んで一緒に行動すればいい。何も自分1人で全部の役割をこなさなくたっていいんだよ」

役割分担か。

そっちの方が効率はいいかもな。

なにせやることが1つ減るんだから集中して自分の役割だけを果たせばいい。

「ちなみに蒼香は？」

「抗魔術に関してはそれ程得意じゃないよ。あんまり嬉しくはないけど攻撃する方が楽」

確かに、蒼香からしてみれば他を傷つける為の力など嬉しくないだろう。

まあこいつ自身の特性の問題でもあるんだろうな。

でも武器じゃなくて武具っていうんだから盾や鎧も作れそうなものだけ。

「私からも、いい?」

「ん? 何だ?」

恐る恐るといった様子で蒼香が聞いてくる。

何か聞かれるようなことあったかね?

「あの時の一瞬で間合いを詰めたのは、どうやって?」

あー、あれか。

結構馬鹿な理由で頑張っただけ出来たようになった俺の特技みたいなもんなんだが。

「縮地って歩法があつてな?

平たく言えば相手に気付かれないように動くとか、長い距離を少ない歩数で、とかそんなもんなんだが」

「何でそんなこと出来るのさ?」

……言いたくねえなあ。

漫画で見たもんを片っ端から練習してただなんて言えねえよ。子供ってのは恐いね、実現できそうなものと本気でやるから。これが”手から気弾を出す”とかだけだったら成長するにつれて諦めるんだが。

よりにもよって縮地が、形だけとはいっても出来ちまったからなあ。……完璧に出来るようになるまで10年かかったがな！

「どうしたの？」

何も言わない俺に対して、蒼香が顔を覗き込んで聞いてくる。顔が近いっつうの。

「実は俺は幼い頃、悪の組織に捕まり改造手術を受けてだな……」

「言いたくないなら素直にそう言いなよ……」

やれやれ、といった感じで肩を竦めて首を振る蒼香。

途中で遮るなよ、俺が馬鹿みたいじゃないか。

だけど、考えてみればあんな距離を一瞬で詰めることは出来なかったんだけどなあ？

こっちに来てからの身体能力の向上が著しいちじゅうすぎないか？

まあ、無いよりも有った方が良いものであることは確かだけど。

あのチンピラの攻撃にも随分早く反応出来たし。

「そつえば、あのチンピラはどんな魔術を使ってたんだ？」

全身を叩きつける衝撃を思い出して聞いてみる。

風の魔術なんだよな？

「えーっと、圧縮した風に指向性を持たせて拳に纏わせて殴りつけ

たら発動、吹き飛ば！　みたいな感じ。

それ程上手じゃなかったから衝撃だけで済んだけどね」

随分と適当な説明だな、おい。

胡散臭そうに見てると溜息を吐かれた。

「これ以上詳しく言うത്専門用語だらけになるけど？」

「すまん、俺が悪かった」

何で俺の考えてることが分かるんだよ。

サトリか？　それとも俺がサトラレなのか？

……どっちにしても嫌だな。

あ、また話逸れてるし。

「条件付けはどうやってやるんだ？」

「ユーキも使ってたじゃんディレイスベル遅延魔術。あれと似たような感じ……って聞いてくるって事は分からないで使ってたんだよね。簡単なものならただ思っただけで条件付けは出来るよ。少しだけ発動を遅らせる、とかね。複雑なものは魔術の構成に組み込まないと出来ないよ」

名前が付く程の技術だったのか、あれ。

やってみたら出来た、って感じだったからそんなに気にしてなかったな。

「構成ってのは？」

「名前の通り。どんな効果で、どんな威力で、どんな形で、どのタイミングで、どのくらいの速度で打ち出すとかを決める部分。あの

男はきつとこの構成段階で発動条件を設定してたんだと思うけど」

そんなこと考えてもいないのに発動するのは何でだか。

ん？ 逆に何も考えてないから明かりを灯そうとしても一瞬で消えるのか？

つまり発動はするけど効果も持続も最小限のものになる？

…… 普通戦闘中にそんなことに思考は割けないと思うんだが。

…… マルチタスク
ここの魔術師連中は分割思考を常備しているとでも言うのか！？

「他に何かある？」

無ければ持続の構成の練習するけど、と続けてくる。

特に無かったから立ち上がるうとして、ポケットに箱状の物があるのに気が付いた。

…… そういえば今更な気がするけど。

「このミスリルはどんな効果があるんだ？」

ポケットに入れっぱなしだったからすっかり忘れてたな。

箱の中から指輪を取り出す。

陽の光に当てると青白く輝いて見える。

「基本的には出力の向上。良い物だと構成の補助にもなったりするよ」

出力の向上ねえ。

俺が持つてるよりこいつが持つてる方がいいかもな。

蒼香に指輪を差し出す。

キョトン、とした顔で俺の顔を見てから手を押し返してくる。

「えっと、それはユーキが貰ったものなんだから貰えないよ」

「貸すだけだ、ちゃんと返せよ？」

誰がやるなんて言った。

許可も貰ってないのにやるなんて言うほど薄情じゃないわ。

受け取りそうにもないので無理やり手に持たせて、返されないようにそっぽを向く。

……おっさんとやってることが一緒だな。

「……仕方ないなあ」

うるせ。

横目で少しだけ蒼香の顔を見ると、少なくとも嫌がってはいない。

というよりもプレゼントを貰った子供のようにはいしゃいでいる、様に見える。

まあ、喜んでくれているならいいか。

箱は今まで通りポケットに突っ込んで、立ち上がって空を見る。

「眩しいな……」

上を向いたまま目を瞑って太陽の光をイメージする。

強く、恒久的な光を

体の中の歯車を回す。

魔力を巡らせ練り上げて、集められた魔力は開放されるのを今か今かと待ちわびて。

ガチリ、と更に深い所にある歯車を回す。

ここの世界の魔術はイメージに依存している。
それならば

『強く、雄々しく、高らかに
命を育む陽の威光^{はぐく}
なれば我等の白も其処^{ひかりそこ}に』

目を開けると体から湧き出るように透明な魔力が空へと上がっているのが分かる。

……留めなきや意味がない気がするな。

湧き上がる魔力を体に閉じ込めるように。

限界ギリギリまで練り上げて

『開放』

強く発光した後に光の球体が残る。

維持とか無理だろ、これ。

光の球体は掌に収まる程度の大きさ。

しかし体中から根こそぎ体力や気力を吸われているような感覚がある。

無理です、もう持ちません。ほとんど意地で持続させているようなものだ。

ギチリ、と体の中から音がした。

痛あ！？ 何だこれ！？

体の中から引き裂かれるような痛み。いや、そんな経験は無いけどさ！

突然の痛みにイメージは崩れ、光も消えていく。

俺にとって魔術は鬼門なんだろうか。こんなんばかりだ。

世の中の不条理に嘆く大人の様に頂垂れる。

全身がバラバラになるような痛みで動けただけだな。

「ちょっと、いきなりどうしたの!？」

蒼香の声が遠くに聞こえる。
そんなに離れてなかった筈なんだが……。

「何しようとしてたのさ!？」

「維持の……練しゅ……太陽の……」

蒼香の声に何とか返事を返してやりたいが、今は口を開ける事すら
痛みに変わる。

頭の奥が焼かれる。腕の芯から捻じ切られる。脚の先から切り刻ま
れる。

五体がそれぞれ別の方法で痛みに犯されていく。
いつそ殺してくれ。

「この……馬鹿ユーキ!」

「おぶっ!」

頬に何かを叩きつけられ吹き飛ばされる。

地面を滑ってようやく止まる。
痛い……。

「何してんだ、こらぁ!」

「むしろユーキが何してるのさ!」

いきなり殴られるという理不尽に対して体を起こして叫び声を上げ
るが、蒼香も叫び返してくる。

人の顔を思いつきり叩くな、形が変わる。

大体、俺が何やってるかだなんて練習しろって言ったお前が一番分かるだろうに。

「違う！ 維持の練習そのものはどうでもいいけど、何をイメージしたかが問題なの！」

うわ、どうでもいいって言い切りやがった。
ん？ 何をイメージして……

「太陽？」

「それ！ よりにもよって何で太陽なの！？ イメージに対する処理が追いつくわけがないでしょ！」

……すまん、もう少し詳しく分かり易く。

それだけのキーワードで分かる奴はそれに詳しい人か、超能力者だ。
げんなりとした顔で蒼香を見つめる。

蒼香は少し考えるようなしぐさをしてから、居心地が悪そうな顔で顔を逸らした。

こら、ちゃんと話せ。

「……ごめん、説明し忘れてた」

「よし、1発殴らせろ」

小さく呟かれた言葉に即答してやる。

俺の所為せいでもあるような気がするが、理不尽すぎる。
何か俺に恨みでもあるのかお前は。

「いや、でも結構危ないところだったし、他に思いつかなかったから……」

む？

確かにあの全身の痛みは無くなっているけど、それにしたってもっとこう、平和的な解決法を探して欲しかった。

頬が痛い……。

いつまでもこの状態でいる訳にもいかなから立ち上がって蒼香の近くへ。

一瞬、体を震わせて驚かれたことに傷つくが、仕方ないと思い直して胡座あぐらをかいて座る。

座らない蒼香を見ると、不思議そうな顔をしている。

何だその顔は、助けてくれたことに変わりは無いんだから殴ったりしねえよ。

適当に視線を送ってみる。

ようやく蒼香は横に座って俺の頬に手を当てて、本日3回目の治療である。

「で、何が起きたんだ？」

今回は運が良かったと言えるけど、あんな痛みが毎回あったらそのうちショック死するぞ。

さっきまでの自分の状態を思い出しぞつとする。

魔術は常に死と隣り合わせてか？

…… どうかのゲームに似た様なことが言われてた気がするけど。

ようやく治療が終わったのか、蒼香が当てていた手を放しこちらに向き直る。

「今回のことは簡単に言うとユーキの実力不足」

む？　どういうことだ？

維持をするための才能が無かったりとか、そういうことじゃないのか？

……不味いな、そのうち才能の所為にして墮落するかも知れん。

少し気を引き締めないとな。

心の中で自分に喝を入れて蒼香の話を聞く。

「太陽をイメージしたって言ってたでしょ？　ユーキはそのイメージに吞まれちゃったの。……上手く言えないな。自分より位の^{くわい}高いものを使おうとして逆にやられちゃう感じ？」

要領を得ないが何となく理解は出来る。

レベルが足りないが無理やり使おうとした、みたいなもんかね？
要するに暴走1歩手前じゃねえか。

「その、位の高いものっていうのは分からないのか？　分からないままってのは恐すぎる」

「えっと、太陽はもう分かっているとと思うけど月もそうだし、分からないと思うけど神話とかに出てくるような道具とか人とか。そういう伝説っぽいものに出てくるのは基本的に駄目」

俺らの世界の有名所で言えば北欧神話の大樹とか、^{ユグドラシル}グングニルを持った主神オーディンとか、そういうものかね。

太陽と月も、あの2つは昔から人間たちが何かの象徴として崇めていたりするし、そういった意味では神様と似たようなものなんだろう。

しかし、そんなことは早めに話しておいて欲しかった。そうすれば無駄な痛みも無く済んだのに。

恨みがましく蒼香を見つめるが当の本人は開き直っている。

「まあまあ、練習してる時でよかったじゃん。それにこんなことがあったんだから同じことはやらないでしょ？ 失敗するのも勉強の内だよ」

少しムカツクので小動物を思い出させるような微笑みを浮かべている蒼香の頭を軽く小突く。

だけど、練習してる時につてのはよく分かる。依頼をこなしてる時にあんな痛みが襲ったら何も出来ん。

深く溜息を吐いてしまう。

溜息を吐く回数がこつちに来てから物凄く多くなった気がする。

白髪なんていらないぞ？

……馬鹿なことを考えるくらいには余裕があるみたいだ。

「さて、じゃあ何の練習をすればいいんだ？」

「とりあえず光の球体の維持からかな」

これね、と蒼香は自分の指先に光を灯す。

やっぱりそこからになるのか、と苦笑しながら集中しよう意識を傾ける。

ふと、もう一度仰いだ空には黒く雲がかかっていた。

申し訳ありません。

やたらと長いですね。

悪乗りして途中で自分でもなに言ってるのか分からなくなって書き直したりしました。

もう少し上手くならないものだろうか、と日々悩んでいる所です。

それでは、また。

雨が降っている。

それはこの世界に帳を下ろす様に、暗く冷たく重いものである。

そんな暗い世界を歩こうとする物好きはおらず、雨は徒々ただただ舗装された地面に染み行くだけである。

そんな光景を宿の2階の一室からじっと見つめている人物。
いや、俺だが。

あの後、練習の続きをしていたら突然の豪雨。

流石にそんな状況で練習を続けようとするほど俺も蒼香も馬鹿ではない。

一目散に宿に向かって駆け込んだ。

しかし、それでも濡れ鼠になってしまったので互いに部屋に戻りシャワーを浴びた。覗いてはいない。

シャワーから上がりコートと一緒に買ってもらった部屋着を着て、蒼香がいない間に練習をしていたのだが魔力が尽きたようで、歯車を回そうとしても空回りするだけ。

仕方がないのでベッドに腰掛けて外を見ていた。

「雨は初めてだな……」

こちらの世界に来てからの天気はずっと綺麗な青空が見えていた。雨は結構好きなんだが、こうも勢いよく降っていると陰鬱とまではいかないが少し気が滅入ってしまう。

「暇だー」

何も変化がない世界を見ていて楽しい訳がなく、ゴロゴロとベッド

の上を転がってみる。

転がるといっても、ベッドが狭いのでどうしても寝返りを連続でうつている様なものになるけれど。

少しして、気持ち悪くなつたので転がるのを止め、ベッドに突っ伏す。

やる事が無いってこんなに苦痛だったか？

考えてみればテレビもパソコンも無いんだよな。暇だー。

現代っ子である俺にこの何も出来る事が無い時間は苦痛でしかない。

仕方がないのでまた外を見る。

雨は相変わらず強く地面を叩き、世界に絶えず音を響かせている。何てな。

ふと、目の端に何かが映った。

人……？

雨でよく見えないが、人が傘も差さずに宿の前に立っている様に見える。

こんな土砂降りの中を、傘も差さずに？

奇特定の人もいたものだと思理やり自分を納得させようとするが、思いつめてしまう。いと裏腹にそれをじっと見つめてしまう。

目が合ったような気がした。

ぞわり、と全身に寒気が走る。しかし目を離すことが出来ない。体も動かない。筋肉が萎縮して呼吸もままならない。

視界が白く染まっていった

「ユーキー、って何してんの？」

蒼香の声に意識が戻される。

危ねえ、もう少しで夢の世界へご招待、みたいな感じだった。

もう一度人らしきものが立っていた場所を見ても、ただ雨が降っているのが見えるだけである。

……幽霊？

魔術があるんだからそんなものが存在していてもおかしくはない。

そう思う一方でそれを否定している自分がいる。幽霊という存在を、じゃない。

あれは幽霊なんかじゃなく、もっと恐ろしいものだ。

そこまで考えて頭に何かが落ちてきた。

「無視はしないで欲しいんだけどな？」

蒼香の手だった。

どうやら俺が考えてこんでいるのを無視だと思っただけらしい。事実、そうなっているが。

向き直ると青いジャージの様なものを着ている蒼香がすぐ傍にいた。こいつ青好きだな。

頬が少し膨れている。どうやらご立腹らしい。

「すまん、考え事しててな」

とりあえず正直に謝っておく。このままここで拗ねられても俺が困るだけだからな。

離れるような気配がないので俺が蒼香と反対側のベッドの端へと移動する。

さて、こいつは何をしに来たんだろうか。

「……夜這いか？」

「窓から放り出すよ？」

蒼香、目が笑ってないぞ。

ジリジリとにじり寄って来るのはやめろ。普通に恐い。
逃げ出そうか謝ろうか、迷っていると窓の外が白く染まる。
刹那、耳をつんざくような轟音が鳴り響く。

「にゃあ！」

変な叫び声を上げて硬直する蒼香。

……抱きついてはこないか、残念だ。

いやいやいや、俺は何を考えてる。確かに蒼香は可愛いし性格もいい。見ず知らずの俺に世話を焼くだなんてこともしてくれる。しかし、しかしだ。蒼香が俺に対して世話をしてくれるのは困っている人に、というものであって別に男女間のアレやらソレではない筈だ。それで何さ。俺は蒼香が抱きついてきてくれれば、などと思ったわけか。馬鹿じゃねえの。妄想を抱いて溺死しろ！
……うん、自分で考えてて虚^{むな}しくなるな。

枕を抱えて小動物の様に震えている少女を見る。

雷苦手なのか。まあ、珍しくはないな。

苦手なものがあるってのには少し驚いたけど、蒼香だって人間だもんな。

「おーい、大丈夫か？」

「ごめん……。雨と雷は、駄目なの……」

いまだに震えている蒼香に声を掛けるが返ってくるのは弱弱い言葉だけ。

少し恐がりすぎじゃないか？

近寄って顔を覗き込んでも俺の顔を見るだけで、それ以外に反応は無い。

「あの日も、こんな雨の日だったの……」

……あの日、というのは正確にはわからないけど、少なくとも良い思い出ではない筈だ。

何も言わずに抱きしめる。

一瞬、大きく体が震えたが特に何もしてこない。

俺が膝立ちな所為で蒼香の顔が胸の辺りにきているので、抱きしめているという感じはあまりしないけど。

ぐずる子供をあやすように、頭と背中を撫でてやる。

……俺から抱きついちゃってるじゃん！

流石に不味いと思い離れようとするが、いつの間にか蒼香の腕が俺の腰に回されていてしっかりと固定されている。

体を離そうと力を込めるがその分蒼香の腕の力も強くなった。痛い。仕方がないので止まっていた手を動かして撫でてやる。

随分長い間、蒼香の背中を撫でているような気がするが、どれほどの時間が経っただろうか。

雨の音も無く、部屋に備えてある時計の音が微かに聞こえる。

もう大丈夫だろうと、ゆっくりと蒼香から離れる。反応が無い。

覗き込んでみると目を瞑り、小さく寝息を立てていた。

……寝てるし。

起こさないようにベッドに横にして、自分は椅子に座る。

疲れた……。

時計を見て、蒼香が部屋に入ってきた時間からそれ程経っていないことが分かった。

やっぱり体感時間と実際の時間の差は大きいな。

さて、俺はどこで寝ればいいんだ？

俺の部屋のベッドで寝ている蒼香を見ながら考える。

椅子とテーブルはあるがソファはないのだ。

蒼香の部屋で寝るのも論外。

仕方ない、とテーブルに突っ伏す。

規則正しく時計の針が時間を刻むのが分かる。

……眠れない。

これ以上ないくらいに目が冴えてしまっている。

体を起こして外を見る。雨は降っていないようだ。

気分転換に散歩でも行くか。夜空が見えるかどうかは分からないが、夜中に散歩なんて中々出来ないしな。

そうと決まれば後は行動するだけ。

部屋着から若草色のコートに着替えて護身のための剣を腰に差す。

蒼香を起こさないように慎重に部屋から出た。

人が歩いていない大通りの真ん中を進んで行く。

向かっているのは噴水がある、この町の中央広場である。

灯りが点いている家も多いが外まで喧騒が聞こえてくるということもなく、静かなものだ。

「到着、つと」

昼は子供たちやその親たちの憩いの場所であるここも、夜になるとひっそりとしている。

噴水は流石に止まっている。この世界に複雑な機械の類はないのでこれも魔術で作動させているのだろう。

コツコツと前の方から音が聞こえる。

誰か歩いている？

こんな時間に出歩いている人がいるのかと驚いたが、この町には酒場やギルドがあるから別におかしなことではないと考えを改める。

「今晚は。初めまして、だな。浅木勇輝」

不意に掛けられた言葉。

落ち着いた声だ。

声のした方を見るといつの間にか近くに男が立っている。

銀髪で黒いロングコート。身長も一目で分かるほどには俺より高い。

そして、何よりも目を引いたのが、もっくん猛禽類のように鋭い目。

体が硬直する。

さっきと、同じ……！

「出会い頭で悪いんだがな？」

死んでくれ

ただの散歩のはずだったんだけどなあ？

SIDE : A o k a

目を開けて、最初に見えたのは暗い天井。

「ユーキ……?」

パートナーの名前を呼んでも返事は無く、ただ闇へと染み込むだけ。寝ているのかと思って部屋を見回すが、どこにも姿が見えない。

雨は降っていないけれど、何だか胸騒ぎがする。

着替えて探しに行こうとクローゼットを開けるとユーキの服。

……間違えた。ここはユーキの部屋だったっけ。

急いで自分の部屋に戻って着替え、宿のおばちゃんにユーキが外に出たのを確認してから外に出た。

ふと、空を見ると赤い月が嗤^{わら}っているように見えた。

硬い金属音が夜の街に鳴り響く。

「む……?」

男の、どこから取り出したか分からない黒い長剣を腰の剣で弾き返

した音だ。

しかし、男は止まらずに剣を振るう。

2合、3合、4合と打ち合うが、10を超えた辺りで追いつけなくなってきた。

袈裟に振るわれた剣を受け止めようとして、思い切り弾き飛ばされ地面を転がる。剣はどうか手放していない。

すぐさま体を起こして男を見ると、こちらへ走って来ている。

男は走りながら剣を持ってない方の手に小さな光を灯して空に掲げ、それを振り下ろす。

悪寒が体を突き抜け、体を無理やり捻る。

すぐ横で地面を削る音。

気になるが、男は目の前なので見ていられない。

飛び起きて剣を両手で持ち、思い切り男の胴目掛け剣を薙ぐが片手で止められる。

引き戻して袈裟に振るうが弾かれた。負けずに踏み込んで逆袈裟に振るうが軽く逸らされ、そのまま上段から剣を叩きつけられる。

罅迫り合い。退く技術などある訳が無く、力の限り押すだけである。

「魔力と魔術の後押しがあるとはいえ、ここまで喰らいついて来るとはな」

男から感嘆の声が上がるが、こっちはそれどころではない。

俺が肩で息をしているのに対して、男は息を乱した様子も無いのだ。
怪物かよ、この野郎。

ギチリ、と柄を握り潰すぐらいのつもりで剣を持つ手に力を込める。
いきなり襲われて『はい、そーですか』と諦められるほど、腐ってないっつーの！

「だあぁっ！」

力を込めた剣を全力で振って、弾き飛ばす。

しかし、男はそれに逆らわず後ろへ跳び、先程と同じように光を灯して何かを投げる動作をする。

刹那、何も無い空間から男が持っている剣と同じ形のものが一直線に飛んでくる。

さっきのもこれかっ！

分かったのはいいが、俺の体は男を弾き飛ばして硬直している。

弾く？ 無理。

避ける？ 動けん。

諦める？ アホかっ！

振りぬいた腕の力の流れに逆らわず、前へ進む。

剣は目前。覚悟を決めて

左腕を、盾にした。

「っ！ がああっ！」

熱が左腕を蹂躪^{ふみふみ}していく。

それでも止まらない。止まらない。

今の攻撃で死ななかったことが幸運なのだ。止まることなど出来ない。

全身の血が沸騰しているように体が熱を持っているが、頭だけは冷静になっている。

剣が届く距離まであと3歩 縮地を使いたいが、疲労と、体勢がメチャクチャなため使えない。

あと2歩 男が立ち止まって剣を構える。迎え撃つつもりらしい。
あと1歩 右半身を引いて、剣を構えて出せる限りの力で男に向かう。

0 時間が遅く感じ、今までとは比べ物にならない速度で、男の

胸に向かつて剣を突き出した。

「ギリギリ及第点、といったところか」

突き出した剣は、男が構えていた剣を裂いて右肩を貫いた。
それだけだ。この男を退けるには程遠い。

男はいつの間にか左手を掲げていて

「じゃあな。恨むなら、気に食わないが運命とやらを恨んでくれ」

変わらない、落ち着いた声と共に断頭台のように振り下ろした。

悪い、蒼香。

そんなことを思ったというのに。

「あああああつ！」

裂帛^{れっぱく}の叫び声と、それに続く甲高^{かん}い金属音。

男は肩を貫いている剣を多量の血と共に引き抜くと、すぐさま跳び退る。

俺も誰かに引つ張られるように後ろへと跳ぶ。

助けてくれた人に礼を言おうと振り向こうとしたら、挟み込むように顔を掴まれ無理やり視線を合わせれた。

「ユーキ、大丈夫！？ 死んでない！？ 生きてる！？」

うーい。助けくれたのはいいが、そんなに揺されると死ぬぞ。あと、何でここにいるんだよ。

言ってやりたいがガクガクと揺さぶられているので言えない。仕方ないので目線だけで抗議してみる。

「いや、うん。別に暗い部屋の中1人でいるのが恐かったとかじゃないよ？」

「はいはい」

ようやく止まった。

蒼香は顔を真っ赤にしながら膨れているが、そんな中でも左腕の治療をしてくれている。

こんな馬鹿な会話をしている中でも男の行動を見逃さないように注意を払っているが、何もせずになだそこにいるだけである。持っていた長剣すら無い。

不審な目で見ても、依然として男に動きはない。

どういうことだ？

そんなことを考えている間に、俺の左腕の応急処置は終わり、蒼香は男と対峙するように立っている。

「何で、ユーキを？」

蒼香の問いかけ。少しだけ、声が震えているのに気付いた。

男は答えない。

聞こえていないのか、返答に困っているのか。俺に確認する術は無いが。^{すべ}

沈黙は長くは続かず、焦れた蒼香が尚も続ける。

「何か言ってよ！ お父さんっ！」

「はあっ！？」

素で声が出た。

あの男が、蒼香が小さい頃にいなくなったっていう父親！？

……名前忘れた。

そんなことはどうでもいい。問題は何で俺を襲ったのか、だ。座ったまま睨んでいると、男は諦めたように口を開ける。

「……白い死神の御使い、とでも言っておこうか」

「っ！？」

「？」

息を呑む。

蒼香は何のことか分かっていないようだが、俺にとってはその言葉だけで十分だ。

思い出せるのは、同じように突然襲い掛かってきたあの白い女。湧わいてきたのは恐怖ではなく、強い怒り。自然と声を荒げていた。

「何のために、あんたたちは俺を殺そうとするっ！ あいつは一体何なんだよ！？」

「答えるとも思っているのか？」

聞きたいことは多い。

しかし、バツサリと切り捨てられた。

男の飄々とした態度が癪に障る。
立ち上がって掴み掛かってやろうと思うが頭がフラフラする。

「祭壇で待っている。どれだけかかってもいい、必ず来い」

それだけ言って背を向ける。

これ以上話すことは無い、と言外に語っている。
しかし、蒼香は尚も追い縋る。

「待つてよ、お父さんっ！」

走って男の下へ向かうが、いきなり立ち止まる。
よく見れば、蒼香の足元に剣が刺さっている。数センチずれば蒼香の足を切断していただろう。

「……それ以上、来るな」

「どうしてっ!？」

こちらには振り向かず、押し殺した声で制止の言葉を告げてくる。
男とは対照的に、蒼香は悲痛な声を上げる。
それでも、男は振り向こうともせず闇の中へと消えていった。

「どうして……?」

「蒼香……」

地面に座り、項垂れている蒼香に掛ける言葉が見当たらない。

いなくなつた父親が人を殺そうとしているのを見て、気にするなという方が無理だ。

俺がどうやって言い繕^{つくろ}つても事実を変えることは出来ない。

あの白い女は誰なのか、目的は何だとか、あの男に聞きたいことは色々ある。

祭壇で待っている、ねえ。

あの男が言っていたことを思い出す。

祭壇というのがどこにあるのかは知らないが、少なくともそこにいけば会えるのは確かだろう。

正直な話、全く行きたくないのだけれども……。

チラリ、と蒼香を見る。先程から変わった様子はない。

行くことになるんだろうな。

多分、蒼香は追いかけると思うから。

自分の事ながら、この性分をどうにか出来ないものかと悩んでみるが、どうせ無理なので即座に諦める。

とにかく、今は蒼香のことを何とかしなければならぬので、近付こうとして

目の前が真っ白になった。

誰か覚えているんでしょうか……。

鈴谷アキラ、登場。

姿が想像できない人は、某聖杯戦争の赤い方の弓兵を思い出してくれればいいかも。……こんなこと言わないほうがいいんだろうか？

戦闘がどうにも薄い感じがして仕方がないのですが、これから見てください、と思います。
では。

目が覚めたら見たこともない所で寝かされていた。

またあの白い世界に連れ込まれたのかと思っていたのだが、どうやら血を流しすぎていたようで、ホワイトアウト。

蒼香が倒れた俺に気付き、背負って治癒院　この世界の病院まで連れて行ってくれた、とのこと。

治癒院に世話になるのは2回目である。前回も左腕だったな……。っと、話が逸れた。

ちゃんとした治療をもらって、念のため治癒院内の個室のベッドを使わせてもらって、朝を迎えた、と。

今は病院の青白い服を着て（何て言うんだこれ？）、ベッドに腰掛けて主治医の先生とお話中。

「左腕はまだ痛むかな？」

「いえ、全く」

グリグリと動かしてみたが、特に痛みは無い。

それは良かった、と柔らかに微笑んでいる眼鏡を掛けた治癒師の……男？

この人、えらく中性的なのだ。

眼は大きく、鼻もすっきりとして、唇はふつくらと瑞々しい。

よく手入れされていると思われる鮮やかな緑髪は肩に掛かるくらいに伸び、手足も長い。

しかし華奢きんせという訳でもなく、白衣の上からでも分かるくらいにはしっかりとした体つきである。ちなみに胸は無い。

「でも、運が良かったね。あと少しずれていたら左腕は無くなっていたよ?」

「げっ、本当ですか?」

良かった。流石に自分の左腕とサヨナラしたくないからな。死んでもいないし、五体満足なのだから不幸中の幸いといったところだろう。深く溜息を吐いて安堵する。

しかし、本当にこの人の性別はどっちだ?

馬鹿で失礼なことだと分かっているが、それでも気になる。

「……あの、失礼ですが、男性……?」

「さて、どちらでしょうねえ?」

上手く避けられた。

怒られるかと思っていたら、依然として柔らかな笑みでこちらを見ている。

大人だ……。

さて、それはそれとして。

「すぐに退院出来るんですね?」

「そうですね。2、3日は左腕に強い負荷を掛けてはいけません、特に問題ありませんよ」

左腕で重いものを持ったりしなければ大丈夫か。

そうなると荷物持ちが出来ないな、と思うが怪我人にそんなことを

やらせるような奴ではないと、考えを改める。
ん？ そういえば……。

「あの、蒼香は？」

「君を連れて来た子だね？ 今は宿に戻ってもらってるよ。そろそろ君を迎えに……。ああ、来たようだ」

「はい？」

何も掛けられていない、ベッドの頭のほうの壁を見ながら言っている。

……電波さん？

失礼なことを考えているとパタパタと、小走りする音が廊下から聞こえる。

え、マジで？

足音の主は俺たちがいる部屋の前で止まり、扉を勢いよく開けた。

「ちゃんと生きてるよね！？」

「生きてるから、大声を出すな。ウルサイ」

治癒師の先生が言った通り、壊すような勢いで扉を開けたのは蒼香だった。

予知、じゃなくて壁を向いていたから透視だろうか？

ちよっとした動作から色々な情報を得ようとしている自分に気がついて、苦笑する。

前まではそんなことをしたことは無かったというのに。勿論、する必要が無かった、というのもあるが。

自分も変化しているのだらう。良い方向か悪い方向かは分からない

けれど。

「急に笑って、どうしたの？」

「いや、なんでもないさ」

首を傾げながら聞いてくる蒼香に、適当に返しておく。別に言うほどのことでもないし。

「さて、お迎えも来たようですし退院ですね」

「お世話になりました」

この部屋に荷物は無い。

蒼香が一度宿に帰るときに全部持って行ったらしい。全部といっても剣だけけど。

……あれ？ コートは？

「はい、これ」

蒼香から渡されたのは俺が宿内で着ている部屋着。

何でも、コートがズタズタになっているから服屋で使えるかどうか見てもらっているとのこと。

……直せるのか？

少し疑問も浮かぶけれど、些細なことで振り払う。使えるものは使う主義だ。

……そのせいで物を捨てられないけど。

いつまでもこうしてはいられないので着替えようと服に手を掛けて

「いや、出てけよ」

それぞれベッドと椅子に腰掛けて談笑している2人に向かって言う。声をかけたら示し合わせたかのようにピタリと止まる。仲良いな、オイ。

「別にお構いなく」

「俺が構うんだよ!」

疲れる……。

何でこんなに怒鳴らなきゃいけないんだか。渋々、といった感じで蒼香が出て行く。いや、なんで残ってるのさこの人は。

「先生も一応廊下をお願いします」

「じゃあ私がいっきとした男だと言ったらどうですか?」

フンワリと、花のように笑いながら問い掛けてくる。

男だと言ったら?

そんなこと決まっている。

「そうやって俺に言ってくる時点で信用できないので、素直に出て行って下さい」

ニコリと笑って一蹴してやる。

正直、自分の笑顔を鏡で見ると気持ち悪かったので作り笑いはしたくないんだが、笑い顔は本来攻撃的なものだったって聞いたこともあるし、言うことを聞かせる為には仕方ない。気持ち悪がろうが、なん

だろうがやってやるさ！
主に俺の平穩の為に！

「……仕方ありませんね」

やがて諦めたのか、廊下に出て行く。

ちよつと虚^{むな}しいが、勝った！

待たせるわけにもいかないののでいそいそと着替え始める。

ズボンを穿き換え上も換えようとして上半身裸になって、蒼香がそんなに素直な奴だっただろうかと突然頭に浮かんだ。

チラリ、と横目で扉を見ると少しだけ開いている。

隙間から見える眼がふたつ。耳を澄ますとひそひそと話し声が聞こえる。

……野郎の裸なんて、見たって楽しくないと思うんだけどなあ？

視線を気にせずに半袖の白いＴシャツを着てしまう。

俺は気付かなかった、ってことでいいか。面倒だし。

ベッドの周りを見て私物が何も無いことを確認、扉を開ける。

窓際で素知らぬ顔で談笑している２人。

「終わりましたか」

「ええ、おかげさまで」

今気がついたという風に言ってきたので、少しだけ皮肉を込めて言い返す。

……そういえば。

「先生って透視か何か使えますよね？ 何で態々^{わざわざ}？」

「勿論、直接見たほうがスリルがあるからです！」

よくぞ聞いてくれました、と言わんばかりに胸を張って宣言。自爆してくれた。

まともな人って、いないのか？

「頭痛え」

「おや、それは大変ですね。お薬でも出しておきましょうか？」

あんたの所為だ、あんたの。

というか薬ってちゃんとあるんだよな、この世界。

魔術が普及してるからそんなもの必要無さそうなんだけどな。

重い病気は治せないのか、それとも数が少ないかのどちらかだろうな。何せ自分の属性以外の魔術はほとんど使えない訳だし。

足音が廊下に響く。

特別忙しい、という訳ではなさそうだ。

詰め所？ を通りかかったので中を見るが、看護師さんたちが書類仕事をしながら談笑する程度には余裕がある。

大きな怪我は冒険者や傭兵が気をつけているだろうからほとんど無いのだろう。

だけど、病気は？

「ここって重い病気とかも治せるんですか？」

「そう、ですね。比較的軽度の患者さんなら治すことが出来ます」

「あ……、すみません」

先生は苦い顔をしている。

当たり前だ。重度の患者は治せないと、自分で言ってしまったのだ

から。

軽率な質問だったか。

「人は、必ず死にます。遅かれ早かれ、ね。私たちが出来ることは苦しまないようにしてあげることぐらいです」

誰も苦しみながら死にたくはないでしょう？ と、柔らかい笑みのまま問いかけてくる。

だけど、気付いてしまった。

先生の笑顔が、ほんの少しだけ歪んでいることに。当たり前だよなあ。

この町の医者としている訳だから、当然親しい人もいる訳で。その人たちが自分たちでは治せない病気に罹^{かか}ってしまったら？

……いや、これ以上詮索するのはよそう。

そんなことを考えているうちに治癒院の玄関に着く。

「次は友人として来て下さい。暇な時ならお茶くらい出しますよ。ユーキ君も、怪我なんてしないで」

「うん、また来るよ」

「善処します」

苦笑いをしながら返す。俺も怪我なんてしたくないけど、実力が全く伴っていないからな。

蒼香と先生は二言三言、声を抑えながら話してガツチリと手を握っている。

何の話だろうか？

少し気になるけれど、態々声を抑えているのだからあまり聞かれたくないことなんだろう。

話が終わったようで、蒼香が近寄ってくる。

先生を見ると小さく手を振っている。

蒼香と一緒に手を振り替えて歩き出す。

「まずは宿に戻るよー」

「了解」

良かった、いつもの蒼香だ。

もっと気落ちしているかと思っていたんだけど、良い意味で裏切られた。

空を見上げる。今日も快晴、雲はほとんど見当たらない。

太陽の昇り具合から見て昼頃だろう。

大通りを歩いているとパンを焼く匂いや、少し焦げた様な臭いが漂ってくる。ついでに怒鳴り声も聞こえる。

また焦がしたの！？とか、またお皿割ったの！？とか。

どうでもいいけどドジっ娘って実際にいたら迷惑なだけだよな。

つと、宿に到着。

中に入ると結構な人数が昼食をとっている。

正直、朝も食べていないから早めに昼食を頂きたいのだけど、蒼香は脇目も振らず階段を上っていく。

小さく溜息を吐いて2階上がった蒼香に付いて行く。

蒼香が入ったのは俺に割り当てられた部屋。

話し合いが先なのね。

自分の思った通りにならないことに、少しだけ辟易しながら部屋に入って後ろ手でドアを閉める。

刹那、小気味いい音をたてて顔の横のドアに何かが突き立てられる。

「……は？」

呆^{ほう}けた声。蒼香のものではない。
ゆつくりと目の前の人物を見る。

逆光で蒼香がどんな顔をしているのかは見ることが出来ない。

「さて、どういうことだ？」

努めて普段と同じように振舞う。

肩を竦^{すく}めて、苦笑いで。

1歩近寄ろうとしたら、蒼香の右腕が跳ね上がった。

3度、位置は顔の右、左肩の辺り、右脇の辺りで音が鳴る。

「動かないで」

青と緑のナイフ、か？

部屋の中でナイフなんか投げるんじゃないよ。誰が弁償すんだ？

酷く場違いなことを考えているのは分かっている。現実逃避が癖になってるな。

「私はお父さんを追うから、ユーキは、来ないで」

ひとつひとつ、自分で確かめる様に放たれる言葉。

だけど、その言葉は大体予想通りのもの。

「馬鹿か、お前は。狙われてんのが俺なんだから、どこにいようが危険なことには変わらないんだよ」

残念なことに、俺が進む道には死亡フラグが乱立しているんだな。

白い死神とかお前の父親とか白い死神とか。
この世界は優しくないね。主に俺に対して。
全部投げ出してしまえばいいのかもしれないけれど、そんなことは出来ない。

俺にだって意地とプライドくらいはある。……ちっぽけなもんだけどな。

「っ、私はユーキを死なせたくは、ないんだよ」

むしろ現在進行形でお前に殺されそうだよ。
やぶへび 藪蛇つつきそうだから言わないけど。

視線だけ動かして、蒼香の両手を交互に見る。

確認できるのは右手に1本、左手に2本のナイフ。全部青色である。

「変らないって言うてんだろ。むしろ俺1人でいるよりか、誰かといった方がよっぽど安全だと思うがな」

1歩踏み込む。

蒼香の左腕が跳ね上がる。

踏み込んだ足に突き刺さるナイフ。

足が無くなった様な感覚。

声を上げて泣き叫びたいが、無理やり噛み殺して蒼香を睨む。
逆光で見えにくいのは変わっていない。

しかし、蒼香の表情は。

「はっ、今にも泣きそうな顔しやがって」

言葉にして、放つ。

笑っちゃうね。

能面の様な無表情だったらそれはそれで嫌だけど。

そんなことを言うくらいなら覚悟しておけっつーの。

また、1歩踏み込む。

今度は腕は振るわれない。

この部屋はそんなに広いわけじゃない。

蒼香が立っている場所まであと1歩といったところだ。

「誰かといるってことなら、あの商人の人でもいいんじゃない？」

商人？ ああ、バルドスのおっさんか。

あの人なら事情を話せば何とかして貰えると思う。
だけど

「あんなおっさんよりお前の方が良いに決まってるだろうが。

大体やることが中途半端なんだよ、お前は。態々ここで俺を突き放す様に振舞うんじゃない、何も言わずにさっさと追いかければ良かったんだよ」

ほとんど感覚が無い足を引きずりながら1歩。

蒼香の目の前、手を伸ばせば届く距離。

俺よりも小さなその体に、どれ程の思いを詰め込んでいるのだろうか。

「ユーキに、何が分かるって言うのさ……」

ポツリと呟かれた言葉。

それは拒絶。自分のことなど分からない、と決め付けて壁を作っているのだろつ。

その通りだ馬鹿野郎。

「俺はお前じゃないんだから、分かる訳がないだろ」

「じゃあもう私に関わらないで！　お願いだから、逃げて……」

小さな叫びと、大きな喧騒が目の前の少女から発せられる。
雫が零れる。

どうやらふざけている場合ではないようだ。

1回だけ、深く溜息を吐いて蒼香の髪をゆっくり撫でる。
抵抗も無く、柔らかい手触り。

「悪いな。俺もお前が心配なんだよ」

子をあやす様に小さく、それでも聞こえるくらいの大きさで言う。
やる。

言ったのは本当のことだ。

目を離すとそのまま消えてしまうのではないかと思うくらいに儚く
見える。

本来なら、別に蒼香じゃなくてもいい筈なのだ。

俺の目的はあくまでも帰ることであって、別に英雄になったり一国
の主になったりすることじゃない。

適当に蒼香に付いて行って、帰る方法と手段を見つけて。区切りの
いいところで帰るつもり、だった。
でも

「同情なんかじゃない。お前が心配だし、何よりやられっぱなしっ
ても気に食わん」

命を助けられた。

取り成してもらった。

世話になった。

慟哭^{どうく}を、聞いた。

だから。

「最後まで責任取ってくれよ、相棒^{パートナー}」

俺をこの世界にいたいと思わせたのはお前なんだから。

どうも、2週間ぶりのズックです。

書き出せばスラスラと字数が増えていくのですが、中々難しいものです。

評価、感想を下さっている方々、ありがとうございます。励みになります。

また、読んで下さっている方々にも感謝を。

これからも頑張ります。
では。

あの後、蒼香は泣き出すわ、それを聞きつけて宿の人が来て誤解されるわで散々だった。

ナイフが刺さった足は凍ってるし。

いや、確かに凍ってたおかげで出血もそんなになかったんだけど。溜息しか出ないね。

さて、結局俺も一緒に蒼香の父親 あきら 暁 を探しに行くことにさせたのだが、正確な場所は全く分からない。

ただ一言、“祭壇”で待っている、と言われても想像もつかない訳である。どうしたもんかね。

「ユーキ、ユーキっ。これはー？」

「……目のやり場に困る服だな」

試着室から出てきたのは、赤いチャイナドレスっぽい服を着た蒼香^{たけ}。丈の長さが特別に短いということはないが、大きくスリットが入っているのでスラリと伸びた健康的な脚が見えている。

胸元が少し開いているが、蒼香の慎ましい胸では可愛らしさはあっても色気は無い。

「何か変なこと考えてなかった？」

「いや、何も？」

ヒタリ、とどこからともなく取り出したナイフを首に当てられた。目が笑ってないぞ。

今何をしていたのかというと、俺のコートを返してもらったまでの暇つぶしという名目の試着会である。

主に蒼香の、だけど。

動きやすそうな短めのパンツ（下着じゃないぜ？）から、どこの貴族かと聞きたくなる様な煌びやかなドレスまで何でも着ている。

「……これ、いつまでやるんだ？」

随分長い間ここで待っている気がするんだけど。

最初は自分も何か着てみようかと物色していたのだけれども、こういうことに興味が無かったのですねに飽きた。

蒼香は……とりあえず何でも1回は着てみる、みたいな感じで片っ端から服を取っていつて試着室に籠こもっている。

「はいよ、お待ちませ」

そう言つて店の奥から出てきたのはコートを買ったときにいたおばさん。

前回と同じエプロン姿でコートを持っている。

「あ、終わったー？」

いつの間にやら試着室に入っていた蒼香が顔だけ出して聞いてくる。さつさと服を着ろ。風邪引くぞ？

おばさんからコートを手渡される。

左袖そでは元通りと言える位に綺麗に直されている。

「ああ、蒼香ちゃん。ちゃんと直したよ。あんなにズタズタになるくらいのことをしてるんだから、鉄板でも仕込もうかとも思ったん

「だけどねえ」

慌てて触って確かめるが、布の感触がしなない。良かった、改造はされてないようだ。

鉄板なんか入れられたら重くてどうしようもないからな。

羽織はおりってみて、不具合がないか確かめる。

全く分らないくらいに修繕されているので問題ない。見た目も、恐らく言われなければ新品と間違えそうな程である。

ここまで綺麗に戻せるのなら、ここの町の人たちは随分物持ちがいんだろうな。

向こうじゃ破れたりすれば直ぐに捨てるもんなあ……。

試着室から蒼香が出てくる。

どうやら着替え終わったようだ。

「いくらですか？」

「左袖だけだったからね、銅貨20枚でいいよ」

高いんだか安いんだか、と悩んでいるうちに支払いが終わる。多分安いんだろうが、相変わらずここの物価は分かん。

「ほら、まだ買うものはあるんだから。さっさと行くよ」

「はいよ」

また来てね、とおばさんの声を背に受けながら外へ出る。

しかし、買うものか。

ゲームのように鎧よろいみたいなものを買った方がいいんだろうか。

さて、考えてみよう。

訓練はおろか、体も鍛えていない一般人が、鎧を着込んで満足な動

きが出来るだろうか？

答え……無理。

どれだけ重いのか知らないけど、少なくとも鉄製のものは無理だろう。

皮の鎧とかなら平気だろうか？

悩んだまま歩いていると、後ろから騒ぐような声が聞こえた。

好奇心に釣られて振り向くと、町の入り口の方に体を赤黒く染めた大男が見えた。

「って、バルドスのおっさん!？」

蒼香に一言入れて、慌てて駆け寄る。

上半身は何も着ていないおっさんの右半身は、ペンキでもぶちまけたかのように色付いている。

多分、血だろう。おっさんの血か、返り血かは分からないが。

「ん？ おお、ユーキか」

「いや、何でそんな普通なんだよ」

片手を上げて陽気に挨拶をしてくるおっさんにツツコミを入れる。

よく見れば血が乾いているし、新しく出ている様子も無い。

おっさん自身が怪我したわけではない、と安堵するがあまり良い気分ではなかった。

「あー、とりあえず洗ってきていいか？」

「そうだなー、目立つし」

おっさんに気を取られてて分からなかったけど、随分人が集まってきた。

どこの世界も野次馬は変わらない、と。

そそくさと逃げるように路地の奥へと向かうが、身長が2メートル程あるおっさんが隠れるわけもなく、むしろ目立っていた。

「で、何で血塗^{まみ}れで？」

裏口から宿に入って水場（シャワー室のようなもの）を使わせてもらい、1階の食堂の円卓に着いて経緯の説明をしてもらおうとしている。

おっさんの鍛えられた上半身が自己主張しているが、無視。別に野郎の裸を見ても楽しくない。

「……まあ、ちょっとしくじつてな」

武器の素材が獲れる貴重な魔物の噂が流れたそうだ。

それを聞きつけたおっさんは、一目散に現場へ行って徹夜で待っていたが魔物は現れない。

明け方に盗賊の集団に襲われ、徹夜でフラフラだったおっさんは力加減を間違えて何人か武器の頑固な汚れにってしまう。

近くに水場も無かったので返り血も流せず、そのまま戻ってきた、と。

まとめるとこんな感じか。

「なんとまあ、典型的な罨で」

「やっぱりそう思うか？」

おかしいとは思ったんだよなあ、とぼやいている。

偶然ってことも有り得るが、タイミングが良すぎる気がする。

……その所為で何人か犠牲になっただが。

「……殺したことはないんだな」

「ん？ ……まあ、俺がやったわけじゃないってのもあるけど、そういう世界だってことも頭には入ってるから」

実際、殺さなければ殺されるってことも経験したし。未遂だけど。正直すぎるだろ、と笑われたけど本音だから仕方ない。蒼香は口を開かずに眉を^{ひそ}顰めている。

頭で理解してても納得出来ないんだろう。

「嬢ちゃんは、ダメか」

「……はい」

耐えかねたおっさんが蒼香に話を振るが、一言で終わってしまふ。いや、場を持たせるといふより確認か。

「嬢ちゃんはあるか、魔物とかでもダメか？」

「………少し」

先程よりも長い沈黙の後の返事。

いや、でもお前、肉とか普通に食べてたし、あの狼だって

「肉とかは食うのは平気なのか？」

「……はい。それと同じことだとは、分かつては、いるんですけど」

大きく息を吐くおっさんに対して、縮こまっていく蒼香。

何か、厳しい父親に叱られているちよつと真面目な娘みたいな感じだな。

おっさんはその大きな手で蒼香の頭を乱暴に撫で付ける。

「別に価値観を押し付けてる訳じゃねえんだ。そんなに縮み上がらなくてもいい。

嬢ちゃんにだって譲れないもんがあるだろうしな。

ただ、あれだ。大切なものは紐ひもを繋いでも護まもっておけよ？

失った後に嘆なげいたって戻ってはこねえからな」

「……っ、はい！」

蒼香は呆けた顔をした後に元気良く返事をした。

笑って俺を見ている蒼香。

こっちみんな。正確に言うと俺の首辺りを見るな。

席を立て、少しずつ近寄ってくる。

手に何を持っている。紐っていうか縄だろ、それ。

蒼香の手にはいつの間にか頑丈そうな縄が握られていて。

恐くないよじゃねえよ。普通に恐いわ。

目は笑わずに、ゆっくりとにじり寄って来る。

ちよつ、おっさん笑ってないで助けてくれよ！？

近くにいる味方には見放され。

「さ、これつけて」

青色のアクマがフラッテいた。

俺はノーマルだ！

「痛ぁ……」

蒼香はこちらを恨みがましく見ている。

自業自得だと鼻で笑う俺の頭も痛みを主張している。

少し騒ぎすぎだ、と宿のお姉さんに殴られました。グーでそれを見ていたおっさんは更に声を上げて笑っていた。

「で、ユーキたちは何してたんだ？」

「ああ、買い物だよ。他の町に行こうと思って」

他の町っていうか、多分旅みたいになるけど。

何せ目的地が分からないもんなぁ。

あー、目的地と言えば。

「おっさん、祭壇って聞き覚えある？」

「祭壇？ 儀式とかに使うあれか？」

やっぱりそういう認識だよなぁ。

特定出来るようなものではない、と。

結局どこに行けばいいんだよ。

「あー、まあ細けえことは分からねえが、町を移動するんだろ？俺も一緒にいいか？」

「俺はいいけど？」

蒼香に視線を送る。

「うん、私もいいよ」

確かに頷いて、はつきりと返事をする。
じゃあ決まりだな。

「おれはバルドス。嬢ちゃんは？」

「蒼香です」

呼び名だけの自己紹介。

しかし、しっかりと手を握り合っている。

本名を言い合うことだけが信頼の証ではないってことだね。
頷いていると2人に変な目で見られた。何でだ。

それはそれとして。

「ここから一番近い町は？」

「って、目的地も分からないで町を出ようとしてたのか!？」

おっさんに驚かれるが、申し訳ない。全部蒼香に任せっきりだったな。

仕方ないといった感じで丸められた紙を出してテーブルに広げる。
紙には線や、大小様々な点が疎^{まば}らに描かれている。

「いいか？ 今、俺たちがいるのは大陸の南の地方、更にその中でも南にある町だ」

指し示された場所を見ると、この町の名前らしきものが書いてある。
ふむ、ここは南の方だったのか。

……南半球だろうか、北半球だろうか。
かなりどうでもいいことを考えながら話を聞く。

「一番近いのは……、北へ徒歩で3日つてとこだな。途中に農村や
小さな集落みてえなのはあるだろうが、町って言えるのはここぐら
いだ」

……ん？

蒼香たちがいた町はどうなんだ？

確かめようと蒼香を見れば、人差し指を立てて口に当てている。

おっさんからは見えない位置でこっそりと。

黙ってる、ね。

おっさんに知られて困ることはないんだろうが、他に人がいるから
な。

用心しておくに越したことはないんだろう。

「商売道具は馬車で送るとして、ついでに乗っていくか？ 乗り心
地は最悪だがな」

「あー、歩いてもいいかな？」

蒼香とおっさんに聞いてみる。

面倒なのは分かっているが、少し町の外も見て歩きたい。

うん、乗り物に弱いつてもあるけどな。

遠足とかのバスでいつも前に乗せてもらって、それでも酔ってたく
らいだからな。

あれ、けっこう苦しいんだよね……。

嫌なことしか思い出せないので強制的に思考を打ち切る。

「私はいいよー。ここから出るのなんて初めてだし」

「まあ、俺も元々そのつもりだったからな」

特に否定的な意見は出なかったので決まり。

しかし、3日か……。旅の途中って風呂とかどうしてるんだろうな。今回は小さな村があるらしいから水だけでも使わせてもらえると信じて、山越えたりするときは……、って。

蒼香を手招き。

「水の魔術で湯浴み的なことは出来るのか？」

こっそりと小声で。

「あー、うん。……冷たいよ？」

経験者かよ！？

しかも水のままかよ！

風邪とか引かんようにしなきゃな……。

そうすると必要なものは飲料用の水と食料と……。

ここの気候は穏やかだからあまり気にしていなかったけど、防寒具は必要だろうか？

「楽しそうだね」

「不安もあるけどな」

蒼香の微笑みに笑って返す。

何せ旅なんて初めてだ。不安もあるが、それ以上に好奇心と期待が大きい。

こんな気持ちは遠足や修学旅行以来だろうか。

いやはや、危険なこともあるってのに何考えてるんだろっね。

「よし、じゃあ出発は明日の朝でいいな！俺も荷物を送らなきゃならねえし！」

おっさんはいつも通りの大きな声で締めくくって席を立つ。

俺たちも買い物の続きをした方がいいだろう。服屋はもう行きたくないが。

何で女の人の服選びというか、買い物は長いんだろうか。そりゃ、みんながみんなそうって訳ではないんだろっが。

まあ、いいとして。

「蒼香ー。あと買う物は？」

「んー、日持ちする食べ物と、薬も少し買っておかないといけないかな？」

散々ユーキにぶち撒けたからねー、などと言われる。

記憶にないから、きつと気を失っている時に使ってくれたんだと思う。

こここの世界の薬は俺にとって馴染みがある風邪薬というか解熱剤やらその他諸々もあるが、やはりというか魔術が込められた薬もあり、例えば傷の治りが早くなったり、一時的に力を強めたりするものがある。

値段はピンからキリまで、簡単に作れるものもあれば大掛かりな用意をしなければならぬものまであるということだ。

席を立って、それ程人がいない宿から出る。

昼過ぎだから冒険者たちはギルドに依頼を見に行ったりしているんだろう。

そついや、まだ1回しか依頼を受けてないんだよな。

今の蒼香と同じランクになるのにどれだけ時間かかるんだか。

溜息を吐いて、先に行く蒼香をフラフラと追う。

「なに辛気臭い顔してるのさ」

「いや、ちよつとな」

ランクを上げるってことはそれだけ危険が増えるってことだ。

剣を振るのも魔術を使うのも下手くそだし、蒼香程ではないにしても殺すことには躊躇^{ためら}いがある。

蒼香の父親にされたように誰かに剣を向けられた時、俺は剣を振れるだろうか？

あの時は夢中だった、としか言い様がない。

冷静になって振り返ってみると馬鹿のようなことしかしていない。

なんだよ、左腕犠牲にして突っ込むとか。自殺志願者か？

またネガティブな方向に向かっていることに気付いて一旦思考を切り替える。

怪我をしたとは思えない左腕を意識する。

あの先生、変な人だったけど腕は良いんだな。

今更ながらそんな事を考える。

「左腕が使えないからあんまり買うなよ？」

「分かってるよ」

フラフラと寄り道して、それでいてしっかりと進んで。そんな風に歩いていこうじゃないか。

ふと見上げた空は、透き通るほどに青かった。

…… 申し訳ないです。

時間がかかるわ、短いわで酷い有様です。

しかも話はそれほど進んでないし。

難しいなあ……。

噛み合わせた歯車を回す。

奔る様に鋭く、燃える様に苛烈に。

体内を駆け巡るようにして魔力で満たされる。

イメージは蛍光灯の光。

持続ということに関してならピッタリであろうそれを、頭の隅で思い描きながら魔力を練る。

形は球体。持続時間は、目標10秒。

イメージで練り上げられたそれを指先から解き放つ！

「そおい！」

「……20点」

「いや、5点くらいじゃねえか？」

掛け声と共に人差し指から放たれた小さな光は、一際強く発光して数秒も持たずに消えてしまった。

半袖の白いポロシャツにスカート姿の蒼香と、上半身裸で大きな荷物を背負ったおっさんが採点をしてくれているが、酷いと言わざるをえない。

2人揃って溜息を吐くな。こっちが悲しくなる。

「俺以上に下手な奴って初めて見たな……」

悲しくなるくらいに澄み渡った青空の下で、おっさんの小さな呟きが漏れたのである。

現在町を出てから徒歩で5時間といったところ。

周りは平地、右手には森があり、更に奥には連なる山が見える。

左手は平地が続いているが、小さく森の様なものも見える。
のどかなねえ。

そんなのどかな風景の中、若草色のコートを着た男が変な叫び声を
上げている。俺だけど。

いや、魔術の練習してるんだけどな。これがさっぱり進展が無い。
おっさんも魔術師だそうなので見てもらいながら練習しているが、
結果は惨敗。

持続が下手だというおっさん以上にマズイらしい。

「こればかりはセンスの問題だからねー。続けていればそれなりに
出来るようになるとは思うけど……」

「人のこと言えねえが、ユーキは壊滅的にセンスがねえな！」

豪快に笑うおっさんだが、当の俺からしてみれば笑い事じゃないっ
つの。

レジストの為に練習してた時は頑張れたんだけどなあ。

ここにきて才能の壁が立ちはだかるのか。

……高望みしすぎか。そもそも魔術が使えた時点で俺としては十分
すぎるほどなんだし。

でもなー、最大火力で殲滅！　みたいなことをやってみたかったの
になー。

使う機会はないだろうけど。

何となく物騒なことを考えながら、もう一度魔力を練り直し始める。
……ちよつと無茶してみるか。

「蒼香ー、フォローよろしくー」

適当に声を掛けておいて集中する。

イメージは数日前にボロボロにされた太陽。

ハードルが高すぎるような気もするけど、いつかきつと出来る日が来ると信じて！

『開放っ！』

白い輝きが手の中に生まれる。

ギチリと全身が軋む。

輝きは強くなり球となつて。

左腕が切り刻まれる。

球体は手からほんの少し離れて留まり。

右腕が捻じ切られる。

その身に満ちた魔力を溢れさせる！

もう無理！

「ッ、アアああああっ！」

目の前がチカチカして、今自分が立っているのかさえも分からない。

体を削ぎ落とされ、潰され、掻き回されていく。

視界は闇に包まれて、声も出なくなった。

ふと、闇の中に一条の光が見え、反射的に手を伸ばして

「あがつ！？」

強い衝撃と共に体が吹き飛ばされた。

前回より飛距離が長く感じたのは気のせいだろうか。

地面にうつ伏せに倒れながらそんなことを考える。

前回分かったことだけど、この痛みは集中を解いた後の方が強く感じる。

じゃあ集中解かなければいいんじゃない？　と思つて頑張つていたが痛みで強制的に引つ張られてこの有り様。

「おい、生きてるか？」

生きてるよ、一応。

おっさんの声に心の中で返事をする。

ようやく体の感覚が戻ってきた。蒼香にやられたであろう横っ腹が痛い。

世界を狙える拳だな、後から効いてきた。死ねる。

倒れたまま悶絶していると体が浮いた。どうやらおっさんに米俵の様に担がれているようだ。

ちよつと荷物の上に乗っかるような形である。

「ユーキつて物凄く馬鹿だよな」

「うるさい……、少し悔しかったんだよ」

おっさんの後をついて歩いて俺の顔を覗き込んでくる蒼香に尤もなことを言われる。

今更だけど、あれで放っておかれたら多分死ぬな。

蒼香に感謝だな。引き換えに受けるダメージも中々のものだが。青空の下をリズム良く歩いていく。

……やべ、おっさんの微妙な上下の揺れで気持ち悪くなってきた。

「おっさん、降ろしてー」

「お？ もう大丈夫なのか？」

大丈夫じゃないがそれ以上に気持ち悪い。

おっさんの肩からゆっくりと地面に降ろされるが、どうにもまだ脇腹が痛い。

「嬢ちゃん、治してやれよ。このままじゃ日が暮れちまう」

脇腹を擦さすっているとおっさんが見かねて助け舟を出してくれた。ナイス。

仕方ないと言わんばかりに大きく溜息を吐いて、蒼香は治癒の魔術を唱える。

ここ数日で何回これの世話になったことやら。

「無茶すぎ。心配するこっちの身にもなってよね」

「すまん」

でもなー、少しくらい無茶をやらんとどうしようもなさそうだし。何せ本職2人に壊滅的だなんて言われたんだから、人の何倍もやらなきゃ同じ場所に立てないだろうよ。

「そうだな……。参考になるか分からねえが、俺は特定の魔術なら持続は長いほうだぞ」

「……………どういうことだ？」

治療を見ていたおっさんが話しに入ってくる。

俺の問いには答えずに、おっさんは背の荷物を降ろして少しだけ離れて立ち止まる。

「ふんっ！」

気合と共に地面を強く踏み締めると同時に地面が隆起して、巨大な何かが回転しながら飛び出す。

回転するそれを掴んで切っ先をこちらに向けてきた。

「土の基本性質“造形”。相性が良かったんだろうな。自分の武器を造ることだけは持続も簡単に出来たぜ！」

おっさんが持っているものは戦斧ハルバードをおっさんのサイズに合わせて大きくしたものだった。

大戦斧、とでも呼べばいいのだろうか。

2、30キロはあるであろうそれを、軽々と片手で扱っている。

さて、相性ね。

俺に相性が良いものがあるかどうかなんて分からんぞ？

そもそも主属性が“無”なんだから、相性が良いとしたらそっちの方だろう。

よりもよって未だにその効果が分からないものが自分の主戦力だなんて。

「難儀なもんだな」

「全くだね」

チートみたいな性能のお前が同意するんじゃない！ 余計に惨めだわ！
治療を終えた蒼香から返ってきた言葉に対して少しだけ悲しくなった。

「お前ら……、俺は放置か？」

「あ、悪い」

おっさんが呆れた顔をしてこちらに戻ってきた。

先程造った大戦斧を持っていないことから考えると、どうやら自由に造り壊しが出来るようだ。

「そっぴゃ、おっさんが使えるのは土だけなのか？」

魔術師だつてことは聞いたが、詳しいことはさっぱり聞いてない。おっさんは荷物を背負つて俺たちに先へ進むように促している。

「昔はな。鍛冶やつてる内に火も使えるようになった」

へえ、後天的な属性持ちなのか。

俺も増えないだろうか……。

火とか風とか、格好良さげなやつ。

今のところ使える魔術が発光だけって何だよ。俺に蛍光灯にでもなれとでも言うのか？

……持続出来ないから蛍光灯以下だな。

「まあまあ。ユーキはユーキのペースで、だよ」

「おう、嬢ちゃんの言うとおりだぞ？ 無茶したからってすぐ強くなれる訳じゃねえからな！」

後ろ向きな考えをしていたからだろうか？

蒼香とおっさんが慰めてくれた。

まあ、俺だつて出来ることなら無茶なんてしたくない。

したくはないんだけど、蒼香の父親にまた会わなければならないと思うと

「やらなきゃ死ぬだけだもんな……」

生憎と理不尽な理由で殺されるのはよしとしてないんでね。
足掻けるだけ足掻いてやろうじゃないか。
それにはまず……。

「じゃあ、5秒を目標に頑張ろうか」

「だよなあ……」

地道に行くしかないようだ。

バルドスはデフォで上半身裸。
たまにランニング。

「……でかつ！」

「まあ、こつちの地方では2番目に大きな町だからなあ」

目の前にあるのは城壁のように聳え立つ大きな壁と、兵士が並んでい
る人を1人ひとり身元の確認をしている。

歩き始めてから3日目の昼頃。

旅は順調に進み、予定よりも少しだけ早く俺たちは町に着いたよう
だ。

前の人たちに倣^{なら}って列の最後尾に並ぶ。

これほど大きな町だ。人や物、情報も多く集まるだろう。
だが……。

「何かピリピリしてない？」

「確かに。少し雰囲気がおかしいな」

「ちよつと聞いてみるか！」

そう言っておっさんは列から外れて前の方へと歩いて行く。

止める暇も無く行っちゃったよ、あの人。

それ程並んでないから大丈夫だとは思うけど……。

「兄ちゃん兄ちゃん！ 兄ちゃんたちは、その格好からして冒険者
だよな？」

「ん？」

声のした方を見ると、ぶかぶかのローブを着て、羽根帽子を被った俺の腰くらいまでしかない少年がいる。

しかし、少年と言うには何となく仕草が子供のそれには見えない。

「駆け出しですけど、一応。あなたは……商人の方ですよね？」

俺が考えているうちに蒼香が答えていた。

目の前で考え込むのは失礼だったな。

「そうだぞ！ この帽子を見ればすぐ分かるだろう！」

ふむ、あの羽根帽子は商人であることの証明書みたいなものなのか。でもなんで蒼香は敬語を使ってるんだ？

「もう知っているかも知れないけど、最近このあたりで牛鬼ミノタウロスが出たらしいんだ。こっちとしては商売上がったんだよ！ 駆け出しでも冒険者なんだろ？ なんとかしてくれないかね」

「牛鬼……？ でもこれだけ大きな町だから、直ぐに討伐されるんじゃない……？」

ミノタウロス、っていうと上半身だか頭だかが牛の化物だっけ？ 結構強そうなイメージがあるけど、どうなんだ？

蒼香と商人の少年の話を聞きながら考えを纏めていく。

「2、3体ならよかったんだ。でも何故か群れで行動しているらしいんだよ！ 気性が荒いから滅多に群れをなさない筈なのに！」

滅多にすることは前例があるのか。

じゃあ今回はその少ない確立の内の1回かもしれないな。
そうこうしているうちにおっさんが戻って来た。が、その顔色はあまり良くない。

「おっさん、どうした？」

「ああ、自警隊の奴に聞いたんだが、最近このあたりに牛鬼の群れが出るって話しでな」

「私たちもその話を聞いていたんだよ」

やっぱり原因はそれなのか。

おっさんが同じ話を聞いてきたことでどれ程影響が出ているのかが分かった。

「ん？ 上半身裸のゴツイ男……。兄ちゃん、名前は？」

「げっ、小人族ホビットの商人……。あー、バルドスだ」

小声で悪態吐いてたな、今。

そんなことには気付かず、商人は捲まくし立てる。

「おお、やっぱり鉄槌か！ こんな所で会えるなんてな！

何してるんだ？ 素材集めか？ ギルドの依頼か？ それとも牛鬼の討伐に来たのか？」

「ああ、いや。たまたま通りかかっただけで……」

「何？ たまたまなのか！ まあ、そんなことはどうでもいい！
最近どうだ？ 飯は食えてるか？」

……おっさんが嫌がるのが少し分かった気がする。
詰まるところ、小人族っていうのは

「すっごいお喋りしゃべりなんだよね。あと、噂話うわさが大好き」

「おっさん困ってるもんなー」

見れば蒼香も少しげんなりしている。

直接話してないけど、聞いているだけで疲れてきた。

小さな商人のお喋りは途切れることなく、終わる気配も無い。まるで機関銃だ。

あ、そういえば。

「おっさん、鉄槌とか呼ばれてたけど、あれ何？」

「んー、ある程度ランクが上がったら貰える称号みたいなもの、かな？」

二つ名か。鋼の、とか焰の、とかあるのかね？
って

「おっさんって実は有名人？」

「そつみたいだねー。全然知らなかったけど」

まだ開放される気配の無いおっさんを見ながら何気に酷いことを言う俺たち。

だって、ねえ。

身近にいる人が有名人とか言われても実感無いし。

何よりも、言われてるのが上半身裸のゴツイおっさんだしなあ。
もっところ、美形の騎士とか、美人なお姉さんとか。そういうのだ
ろ！？

「おい、今すげえ失礼なこと考えなかったか？」

「いや？ 気のせいだろ」

商人の話しを無理やりぶった切って聞いてくるおっさん。

何でこんな鋭いんだか。おちおち考え事も出来やしないっつの。

「次の方ー」

「ん？ ああ、もうウチの番だね！ じゃあ皆さん、今度会うとき
にはウチの商品買って行ってね！」

前に並んでいた人たちはいなくなっており、小さな商人の番のよう
だ。

駆けていく小さな背中を見送って、3人で溜息を吐く。
最後まで騒がしい人だった。

「で、なんで敬語？」

「小人族は長生きで、成人したって背はあれ位までだからね。あの
人も多分50は超えてるんじゃない？」

やっぱりそういうこともあるのか。

エルフとか巨人族みたいなのもいるのかね……、って巨人っぽい人
は前の町で見てるな、そういえば。

数日前のことを微妙に忘れてるだなんて。

俺の記憶力が悪くなったのか、密度の濃い日々を過ごしていたからなのか。

後者だと思いたい。

「そついや、牛鬼のことなんだけだよ」

「ん？」

まだ終わってなかったのか？

少し声を潜めるおっさんの顔は真剣なものだった。

「被害報告も来てるみたいなんだわ」

「……具体的には」

考えて然るべきこと^{しか}。

群れで移動していただけならここまで噂が広まる筈がない。

「確認されてるだけでも村が3つ。そのうち1つに調査隊を送ったらしいが、悲惨な光景だったそうだ。男や老人は殺されて、女は子供でも……、まあ、その、な」

了解、口では言えないような状態な。

「そのまま放置されてたの？」

「そうらしい。いや、女は連れ去られてる数の方が多いだろうがな」

吐き捨てるように悪態を吐くおっさん。

俺も胸糞悪くてすごい顔してるだろうが、蒼香がもつとひどい。

何というか、押し込められた黒くて攻撃的な感情がちょっと溢れ出てるんじゃないかってくらい怖い。

「嬢ちゃん、少し落ち着け」

「分かってます。分かってはいますが、無理です」

素直なのは良いことだね。物凄く怖いけど。

ふむ、やっぱり人と魔物を天秤に掛ければ人に傾くのか。

人が殺されれば怒って、自分が魔物を殺せば悲しんで。俺には無理だな。

「で、だ。多分討伐隊に俺も組み込まれるだろうからな。この町じゃ一緒には行動出来ないかも知れん」

「ああ、そっか。じゃあ俺たちの平和の為に頑張ってきてく、痛っ！」

おっさんに拳骨貰った。

何だよー、そのための討伐隊だろー。

蒼香にクスクスと笑われているのが分かる。

先程までの黒い雰囲気はなくなって、何とも和やかである。

「次の方ー」

「おお、呼ばれたか。ほれ、面倒だからまとめて行くぞ」

「了解」

門の脇にこじんまりとした兵士の詰め所のような場所がある。

そこでいくつか質問されるらしい。

らしい、というのはおっさんが前にも来たことがあって同じようなことをしたんだとか。

「そんなに前の話しじゃねえからな。変わってねえだろ」

おっさんの話を聞きながら詰め所へと進む。

詰め所のドアが開いていたので中を見ると、いかにも兵士ですよみ
たいなガチムチなおっさん達がいた。

ふむ、魔術師はいないのか？

こんな大きな町で大きな騒ぎを起こすような奴はいないと思うけど、
用心しておいて損はないだろうに。

と、そこまで考えてからあることに気付いた。

ああ、兵士のおっさん達も綺麗な魔力を纏ってるわ。

考えてみればこの世界の魔術師って完璧に砲台って訳でもないんだ
よね。

蒼香やおっさんもどっちゃかって言えば戦士とかそっち寄りだし。

思考に沈んでいると襟首を掴まれ引きずられる。

「勝手な行動しないの！」

……お母さんか、お前は。いや、俺が悪いんだけど。

考え事していると他の事が出来ないな。なんとか出来るようにして
おいたほうが良いんだろうか。

出来るようになるかは別として。

「ユーキ？」

「え？」

おっさんにいきなり話しかけられた。
マズイ、また聞いてなかったみたいだ。

「ランクだよ、お前のランク。どのくらいなんだ？」

「ああ、確か……黒石？」
ブラックストーン

1回しか依頼を受けてないし、魔物を倒した訳でもない。なので変わってない！

胸を張って言う事ではないな。一番下のランクな訳だし。

「トパーズ黄玉、ブルークリスタル青水晶、黒石の3人ですね？ではギルドカードを見せて下さい」

言われた通りに懷から自分の黒いギルドカードを出す。

おっさんのは透き通るような黄色である。

えーっと、蒼香が中位でクリスタルなんだから、おっさんのトパーズってのは上位になるのか？

くそう、こんな上半身裸のおっさんがそんなに強いのか。

まあ、おっさんは武器の素材のために魔物を狩るらしいから、それでなんだろうけど。

「はい、確認しました。ギルドに行くとき牛鬼の討伐隊の募集をしているはずですよ。自信があればやってください。町の人も怯えてしまっているんだよ」

「おう、何とかしてみるわな。俺だけじゃ無理だがな！」

大きな笑い声が響き渡る。

うん、おっさんに任せておこう。俺は出来ること無さそうだし。

SIDE : Baldus

この町は3ヶ月振りだったか？

随分と魔物を追っ駆け回してたから、ちと曖昧だ。

腕を組んで、壁に背を預けながら考える。

門の自警隊の奴が言ってた通りにギルドに来てみたが、中は随分と雑然としていた。

ざっと数えただけでも40人程。

椅子もあるが多くはなく、俺も含めて座れない奴らは思い思いに立っている。

ギルドの中が騒がしいのはいつものことだが、やっぱり雰囲気が違うな。

どっちかって言うところの空気は戦場のそれだ。

全員が、という訳ではないが、それでも大多数が牛鬼ミノタウロスの群れという異常な事態を恐れているんだろう。

近くの奴の声さえ他の声に掻き消されて、その声も俺の耳に届くことなく消えていく。

「静粛に」

突如、響き渡る鈴のような声音がギルドの中を掻き消されること無く通り抜ける。

それまで騒いでいた奴等も波が引くように口を噤つぶむ。
言霊か？
ことだま

やけに耳に残る声だ。

「……ありがとうございます。今ここにいる皆さんは牛鬼の討伐隊

への志願者、ということでもよろしいですね？」

声の主はギルドの女。

透き通るような銀の髪が肩甲骨辺りまで伸ばされている。

背はそれほど高くなく、体もほっそりとしている。

女は丁寧なスカートの端を摘まんで頭を下げる。

「申し遅れました。わたくし私、こたひ此度の牛鬼討伐の責任者となりました、レイナと申します。お見知りおきを」

ギルドの窓口や受付の女性は抱えの冒険者だったりする。

レイナと名乗った女もその内の1人なんだろう、自然に溢れ出ている翡翠色の魔力が高い技術力を表していた。

「皆様も知つての通り、本来個体で生息する筈の牛鬼が群れを成して近隣の村を襲っているそうです。我々は牛鬼の巢の発見、並びに殲滅を行います。そこで前衛部隊と後衛部隊に分けようと思うのですが……。この中で近接戦闘での称号持ちの方はいらっしゃいますか？ 前衛部隊はその方に指揮を執って頂きたいと思っています」

……俺が出ないといかんかね？

パツと見回したが、周りの奴らは良くてホワイトクリスタル白水晶くらいな感じだもんなあ。

大人数の指揮なんざ執ったことは無いんだが……、誰かがやる必要があるか。

気は進まないが志願しようと思前に出ようとする。

「ガーネットランク柘榴石、フレアよ。炎拳なんて大層な称号貰ったわ」

若い女の声だ。

声のした方を見ると、ピッタリとした黒いパンツに黒いコート、腰の下辺りまである黒髪を纏めもせずに垂らしている女がいた。どこの悪の組織の一員だよ。

「そこのあなたは？」

あん？

黒髪の女がこっちを見ている。

誰のことかと辺りを見回すが、ほとんどの奴は俺を見ている。

……まあ、乗りかかった船だ。やってやろうじゃねえか。

「ランク^{トバース}黄玉、バルドスだ。鉄槌だとさ」

女　フレアと同じように名乗ってやると答えが気に入ったのか1人で頷いている。

その行動が頭の片隅に引っかけたが、なるほど。蒼香の嬢ちゃんにそっくりなのか。

嬢ちゃんもユーキの話を聞いて満足すれば1人で頷いていた。

「で、どうするの？　アタシが、あなたか」

「お前さんが経験あるって言うなら俺あパスだ。1人で突っ込んでった方が楽だしな」

「了解、アタシがやるよ。まあ、どうせ連中も勝手にやるだろうし」
確かにこんな数の血の気の多い奴らが素直に言うことを聞くとは思えねえ。

こっちの指示に従うのは精々多くて3分の1ってところだろう。
今も女が　形だけとはいえ　指揮官になったことを喜ばない連

中がいるのだから。

胸糞悪い眼しやがって。

自分たちが一番偉いとも思っていやがんのか？

「よお、姉ちゃん。あんたは本当に強いのかよ？」

ほら来た。

俺でも、女2人のものではない声が投げかけられた。

声のした方を見るとまだ若い3人が固まってたむろしている。

共通しているのは3人が3人とも下卑た笑みを浮かべていること。

「そうね……。少なくともあんた達を地面に沈めるくらいなら1分からないわ」

「へえ、そりやお強いことで。だけどよ、俺たちは一時的にはいえあんたに命を預けるんだ。もしあんたがミスして俺たちが死んだりしたら大変だよな？」

「その時はその時よ。死人に口無し、なんて言葉もあるくらいだもの。怖いのであれば帰ってもいいわよ？」

「むしろ今すぐ帰れ。お前らみたいなのが一番邪魔だ」

「ああ！？ 何だと、デカブツ！」

こんな分かりやすい挑発に乗るなよ、ガキ。生きていけねえぞ？
しかしめんどくせえな。さつさと終わらせるか。

石よりも金属の方が相性が良いんだが、まあ仕方ねえ。

背後にある石壁に拳を叩きつけて自分の身長の3分の2はある槌つちを
創り出し、柄の先の辺りを持って頭部を床に落とす。

「で？　どいつから潰されたい？」

「意外と短気なんだね」

呆れた様な表情でフレアが言うが、知ったこっちゃない。

どちらかと言えば短気なほうだと自覚しているが、ああいう身の程を弁^{わきま}えない奴らが嫌いつてことの方が大きい。

どうやってぶん殴ってやろうかね。

3人の位置と自分の立ち位置の把握。近くにいる関係ない奴らに被害が出ないようにと考えていると

「やるなら牛鬼討伐後にして下さい。口が悪かろうが何だろつが、貴重な戦力には変わりありませんから」

冷ややかな声で意識を戻された。

自分の首筋に何か突き付けられているのを感じて手を上げる。

そもそもギルド内での喧嘩は御法度だしな。

やった奴らは問答無用で肅清。人格が変わるまでボコボコにされとか、されないとか。

3人組もいつの間にかギルドの他の職員にナイフやらを突き付けられて固まっている。

「分かってくれたようで何よりです。では、フレア様を前衛の、私を後衛の指揮官として、作戦でも「報告！　牛鬼の群れがこちらへ向かって来ていますっ！　その数、およそ30！」……無理ですね」

慌ただしく入ってきた青年があまり嬉しくない報告をする。

レイナは大きく溜息を吐いてすぐさま表情を戻す。

「仕方ありませんね、出ます。万が一にもこの町に入らせるわけにはいきません。前衛は適当に2、3人で組んで下さい。死ぬ確立は随分と減らせるでしょうから」

単身で牛鬼1体を討伐することはそう難しいことじゃない。

大きな個体で精々中の上辺りだ。

だが、2体、3体となると話は変わってくる。

下手をすれば傷を付けることも出来ずに殺される。

「ほら、行くよ」

コートを翻^{ひるがえ}してフレアは先を行った。

数字を聞いても平常心か。流石としか言いようが無い。

この中じやもう戦意を喪失している奴らだっているってのに。

ま、その分頑張ってくるとするか。

フレアさん再登場！。

果たして覚えている人はいるのだろうか。

男の人にとってちょっと痛い表現があるかもしれません。

宿の2階でゴロゴロと時間を潰していると、外から慌ただしい声が聞こえるようになってきた。

ベッドに腰掛けて窓から見てみると、町一番の大通りで町の人たちが右往左往している。

まるで蜂の巣を突いたような騒ぎだ。

「何かあったのかな」

隣に座っている蒼香は真剣な表情で町の人たちを見ている。
ふむ、今この町の人を脅かす何かと言えば

ミノタウロス
「牛鬼……か？」

「多分」

それぐらいしか思い付かん。

子供を連れて走る母親や、老人を負ぶって行く青年まで様々な人
待ちの中心部の方へと向かっている。

蒼香の話によると、教会が避難所になっているそうだ。

「俺たちも避難するか？」

「うん。討伐はバルドスさんや他の人たちに任せよう」

蒼香は一応牛鬼くらいなら倒せるそうだ。

だから討伐隊の方に入ってもおかしくはないのだが、ユーキを
1人にすると何をしでかさか分からない、と留守番側になった。

正直、そんなにしたいことも出来ることも無かったから俺1人で宿で待ってればいいと言ったのだが、何故かおっさんにもニヤニヤ笑いながら却下された。

「ほら、行くよ」

蒼香はもう行く準備が出来ているらしい。結局いつもの格好とあまり変わりはないのだが。

俺も壁に立て掛けてあった剣を手にとって部屋から出る。

「きゃあああああっ!」

いや。出ようとしたが、甲高い叫び声を聞いて反転、窓へと走る。

見れば大通りが真っ赤に染められて、その中につぶれたトマトの様なモノが転がっている。

瞬間的にそれが何かということが分かってしまい、吐き出しそうになるのを必死に耐える。

何が起こった!?

断続的に悲鳴は続いている。

方向からして町の人たちが避難している教会がある辺りからだ。

窓枠から身を乗り出して見ると、周りの人よりも倍近く大きな男が棍棒を振り回して町の人を薙いでいく。

あれが牛鬼か。でかくね?

現実逃避している場合じゃない。こうしている間にも殺されている。

「蒼香!」

「分かってる、飛ぶよ!」

異常を伝えようと振り向くと、蒼香は既に俺の首根っこを掴んでい

る。

そのまま窓の縁に足を掛けて

「え、ちよっ！」

躊躇^{ためら}いもせずに窓から飛び降りた。

あ、空が見える。

一瞬の浮遊感の後、大きな衝撃が

『メレウス・ウェンデ
風の槌！』

無かったけど風で飛ばされそうです。

どうやら風の魔術を地面にぶつけて減速したようだ。

軽やかに着地する蒼香と、落とされるように手を放される俺。

文句の1つでも言つてやりたいが、今はそんな場合じゃないと慌てて立ち上がり、極力周りを見ないように走り抜ける。

「私は囧！ ユーキは怪我人を！」

「了解！」

情けないことだが、そっちの方が効率がいいのは事実だ。

もちろん、俺には治癒の魔術なんて出来ないから直ぐに誰かに見させなければいけない。

喧騒が大きくなってくる。どうやら広場で暴れているようだ。

そこへ入ってまず目に付いたのが、地面を染める赤。

惨劇、としか言いようが無い。

真っ赤に染まったものが嫌でも目に付く。

人の体に牛の頭を付けた化け物はこちらに背を向けて、動くものを見つけてはその手に持った棍棒を振り回している。

『響け、青き氷！ 我が敵を凍てつかせよ！』

スカートのポケットから何かを取り出して握りこみ、詠唱する。
同時に蒼香の体から青い光が溢れ出す。

ヤクルム・グラキエース
『霧氷の槍！！』

蒼香の周りに突如として現れた計6本の成人男性の腕ほどの氷の槍は、一直線に牛鬼へと向かって行く。

が、牛鬼は振り向きざまに手に持った棍棒で3本叩き落す。
残った3本は牛鬼の右足と地面を繋ぎとめ、右肩を凍らせ、左脇腹に突き刺さり凍結させる。

蒼香が牛鬼を引き付けている間に倒れている人に近づく。

男の人は……。駄目だ、息をしてない。次！

小さな子供を抱えているおばさん。脇腹が抉れてる。

くそっ！

子供ごと抱きかかえて教会へと走る。

息も絶え絶えだがまだ生きている。

「あんた、この人を頼む！」

「あ、ああ。分かった」

教会の前でまごついていた兵士におばさんたちを押し付けて広場の全体を確認する。

あちらこちらに拉^{ひき}げた鎧や剣、それらを身に着けていたであろうモノが散らばっている。

生きていそうな人は……。3人、か？

他は原型を留めていなかったりが大半だ。くそっ、吐きたい。

牛鬼は氷から抜け出して棍棒を振り回し、蒼香は牛鬼の懷で離れないように攻撃を避け続け、小さな傷をつけている。

「ただ目良くなってるんだか。」

「と、そんなことを考えている場合じゃない。早く他の人を助けな
いと。」

3人を手早く抱え、教会の人に全員押し付けてから派手な音が鳴り響く中心地を見る。

『マヌス・トニトルス
雷掌！』

牛鬼の真正面、懷に入った蒼香の手の平から青白い光が弾けて牛鬼の巨体に絡み付く。

電撃によって硬直した牛鬼に更に叩き込むために詠唱する。

「いつの間にか良くなった目は牛鬼の腕が微かに動いたのを見逃さなかった。」

「蒼香、逃げろっ！」

「え？ うあっ！」

人と同じ形の、しかし比べようもない大きな手が蒼香の体を宙に浮かせ締め上げる。

それを認識した刹那のうちに剣を抜いて走り出す。

重心は前に、滑る様に最短距離を。

牛鬼の約3歩手前。棍棒を持つ手を振り上げるが、遅い。

更に体を倒して地を^{はし}奔る。

狙うのは蒼香を掴んでいる腕ではなく

「その、汚いモンをぶら下げて蒼香に触ってんじゃねえっ！」

出来るだけ見ないようにしていた男の急所を、股下を駆け抜け様に斬って地面を削りながら止まる。

噴き出す赤い血と、響くような咆哮。それは痛みだろうか、憤怒だろうか。

いや、どうでもいい。止まっているのであれば好都合。

踏み込んで、跳躍。一撃で断ち切るつもりで首に向けて体を回して剣を振るうが、刃が肉に阻まれてそれほど進まずに止まる。

ありえねえ、どんだけ硬いんだよ。

牛鬼の肩に立つような感じで食い込んだ刃を抜こうとするが、牛鬼が剣を掴む。認識したと同時に剣から手を放し牛鬼の肩を蹴りつけて飛び降りる。

勢いをつけて投げられた剣は減速することなく一直線に飛び、派手な音を立てて民家の壁に突き刺さった。

やべっ、武器が無い。

三十六計逃げるにしかず。距離を離すために後ろへ跳ぶ。途端に首の後ろが焼けるかのように熱くなる。

「オオオオオオッ！」

地を揺るがすような咆哮、動き出す巨体。

鈍重に見えたそれは、一瞬で加速して迫って来る。

避けられねえ！

加速した牛鬼の巨体が突き刺さる。

体が軋み、肺の空気が全て押し出され、世界が回転する。

せめて頭を打たないように、と体を丸めるが本当に出来ているのかも怪しい。

ゴム球の様に吹き飛んでいたであろう体が、堅い何かに叩きつけられて止まる。

「がっ！ げほっ、ごほっ！」

息を吸った先から咳き込んで吐き出してしまふ。
こりゃ血も吐いたな。口の中がべた付いてる。
なるほど、蒼香が近距離で纏わりついてたのはこれを喰らわないよ
うにか。

確信は無いが恐らくあばらが何本か折れている。

挽肉にならなかつただけましょ思っている俺はおかしいんだろうか。
何とかして立ち上がるうとしてしていると、不意に影が差す。

牛鬼が俺を見下ろしていた。

手に持った棍棒を振り下ろせば俺を殺せるというのに、それをせず
に嗤っているような気がする。胸糞悪い。

でもまあ、あれだ。

「獲物を前に舌なめずりは3流がやること、だったか」

牛鬼の後ろ、その奥で蒼香が右手に赤い光を、左手に緑色の光を迸^{ほとばし}
らせてこちらへ走って来ている。

両手を合わせて、合成。熱風が吹き荒れる。

気付いた牛鬼が振り向くが、遅い。

蒼香の歩幅で3歩。そこは既に蒼香の間合いだ。

『フランマ・エンス
焼き払う剣』

蒼香はまるで鞘から抜くように右手を振って炎で出来た細身の長剣
を作り出し、その勢いで擦れ違い様に牛鬼の腹を一閃。更に振り向
いて背中を縦に一閃。

燃え盛る剣で斬りつけた箇所には炎が残り、牛鬼の体を侵していく。

「オオオオオオオオオッ！」

天を見上げての咆哮。牛鬼の傷が急速に塞がっていく。治癒というより、もはや再生と言った方がいいだろう。しかし蒼香は退かない。

連刃連撃。

足に、腕に、腹に、背に、顔に、炎の剣を高速で縦横無尽に滑らせる。

再生が追いつかずに、牛鬼の体は赤く包まれていく。

蒼香は燃え盛る炎をもとめせずに突進。牛鬼の腹を剣で貫き、決して、即座に引き抜く。

蒼香の立ち位置は俺を背にして、牛鬼から庇うような形である。

「ッ、オオオオオオオオオオッ！」

突進。

炎に包まれその体を焼かれながらも蒼香を狙っている。

しかし目の前にいる少女は動かない。

そっと、剣を両手で握って頭の上に掲げるだけ。

「オムネ・フランマ
全て焼却」

何の感情も聞き取れない声音で死を告げながら、手に持つ剣を大上段から振り抜いた。

剣は牛鬼の体を肩から一直線に縦に裂き、溢れる炎が天へと駆け上がりその体を炭化させ、灰と化す。

あれだけの質量のものを灰にするってどんな火力してんだよ。つか蒼香が怖い。

後姿しか見えないが鬼気迫るものを感じる、気がする。

牛鬼の体が半分ほど灰になって、ようやく鎮火し始めた。蒼香がゆっくりと振り向く。

「大丈夫！？ 生きてる！？」

うん、いつもの蒼香だった。

先程までの気配はどこかへ放り投げたようで、俺の体を恐る恐る触って怪我の具合を確かめている。

しかし、何だったんだ？

生き物を殺すのはNGな癖に、ああも無感動に、それこそ作業の様に剣を振り下ろせるだなんて。

……二重人格、とか？

いや、そんな素振りは無かったと思うんだけど……。

他に考えられることといたら……、感情を押し殺す、とかかね？

自己暗示みたいな感じで。

それなら有り得ない話では無いと思うけど……。

俺の胸に手を当てて治癒魔術を掛けている蒼香を眺める。

「……あのね」

「うん？」

蒼香が口を開く。

「私ね、ユーキに助けてもらって嬉しかったの。でも、それ以上にユーキが傷付けられたことが許せなくて。その、気付いたらもう体が動いてた」

自分で何かを殺すって嫌悪感よりも俺を傷付けられたって怒りの方が勝った、ってことか？

……不味くね？

自惚れじゃあないが、^{うぬほ}どんだけ蒼香の頭の中を俺が占めてるんだよ。1週間ほどこか一緒にいない男への、依存に近いもの。

蒼香の、何かを殺すことへの嫌悪感はそれ程酷くないという可能性もあるかも知れないが、バルドスのおっさんと話していた態度からしてあまりそうも思えない。

俺が見ただけでも2回、今回を含めれば3回、蒼香は自分以外の何かを殺している。

「殺さなきゃ殺されるってことも分かってる。少なくとも前の2回はそうやって判断した。だけど、今回は！ 行き着くところはそこだけど、その前に私はっ、痛っ！」

蒼香が額を押さえて呻いている。

うーむ、筋力も上がってる所為か軽くデコピンしただけでも痛いのか……。

涙目で俺を睨んでいる少女。

これだけ見れば普通の女の子なだけだな……。

「少し考えすぎだ、馬鹿」

「でも……」

蒼香に聞こえるように大きく溜息を吐く。

「ま、色々思うところはあるけどな。蒼香が助けてくれて、俺が生きてる。今はそれだけじゃ駄目か？」

「……ずるい」

仕方ないだろ、お前が分からないのに他人の俺がそう簡単に分かる訳ないんだから。

問題を先延ばしにするだけだが、いい加減休みたい。

殆ど痛みが無くなった体を確認して、蒼香を避けて立ち上がろうとした時、場違いな拍手が響いた。

Page 24：事件と想いと（後書き）

申し訳ないです。更新遅くなりました。

もう不定期更新って言った方がいいですよね！

いや、ほんとごめんなさい。

あ、少しづつお気に入り登録が増えて喜んでいます。ありがとうございます。
ざいます。

これからもユーキと蒼香、その他大勢（笑）を応援して頂けると嬉しいです。
では。

SIDE : Baldus

慌ただしく町の中心に向かって走る奴らと、それとは逆に外に出る奴らを交互に目で追いながら速度を落とさないようにしっかりと自分も町の外へ向かう。

ああ、めんどくせ。

それが俺の今のところの感想だ。

いやいや、町の奴らを護る為でもあるしこんなことを考えるのはいけないえ、んだが。

やはり気が滅入る。

「何をそんなしかめっ面をしているの、鉄槌さん？」

不意に、横から話しかけられた。

「ん？ いや、あの馬鹿共がなにかしらやかしかねないかと思っ
てな。あとその呼び方は止めてくれ。出来れば口調も」

苦笑しながら答えると横にいる女 フレアはクスクスと笑い出した。
た。

少しだけ俺の眉間に皺が寄った気がした。

「悪いね。あまりにも予想通りだったから、ね」

これから牛鬼の討伐だったのに緊張感の欠片もねえな、俺たち。
俺が言った馬鹿共ってのはもちろんフレアに噛み付いてきたあの3
人のことだ。

大方自分に力があると勘違いしているんだろうが、あまりにも馬鹿らしい。

おっと、着いたか。

普通、ギルドはこういった魔物の強襲から町を護るために門の近くに建てる。ここも例外じゃないってことだな。

「門を閉めて下さいっ！」

俺たちの後ろで馬鹿でかい門が、これまた馬鹿でかい音を立ててゆつくりと閉まっていく。

ギルドの女　確かレイナ、だったか　が指示を出している。

「ここから少し離れた場所で戦闘を行います。情報では街道沿いの森を通ってこちらへ向かってきているということなので、後衛部隊が全力で攻撃、先制をした後に前衛部隊に任せます」

まあ、今のメンバーを考えれば妥当なところか。

細かく指示出してたって、いったい何人がパニックにならずに戦えるかからねえし。

戦場にいるのに戦わない、戦えない奴ほど邪魔なもんは無い。

開けた場所で戦うのは……、まあこっちの戦力によるな。

……なんだ、この匂い？

「煙草^{タバコ}？」

吸っている奴は直ぐに見つかった。というより隣にいた。

「ああ。駄目な人？」

「いや、そういう訳じゃねえが。あんたみたいな人でも吸うんだな、

「思つてよ」

吸い慣れてないのか少し咳き込んでいるが、中々絵になっている。美人つてのは得だねえ。

「願掛け。今日も生き残れますように、ってね」

……それにしちゃあ吸い慣れてねえな。

フレアは少し早めに吸うのを切り上げて、指で弾^{はじ}いて前に飛ばした。

「おい、流石にどうかと思うぞ」

「大丈夫さ。跡形も残さないから」

そう言つて、小さな火球を指先から落とす。

本当に小さな灯火だ。

火球が地面の吸殻に触れた瞬間、小さく燃え上がる。後に残るのは焼かれた地面だけ。

「……無駄にすごいな」

「無駄とか言つな。これでも苦労したんだからな」

膨大な熱量を圧縮した小指の先程度の火球。それをほぼ一瞬で作りに出して制御する技術。

流石は称号持ち、ってところか。

言葉とは裏腹に感心していると悲鳴が後ろから響き渡った。

「どうしたっ!？」

「とつ、突然牛鬼がつ！」

聞くまでもなかったか。

目の前に今回の討伐対象がいるのだから。
全部で6体。

足元には何人が血で染まって倒れている。

「オオオオオオオッ！」

「散開つ！ 前衛部隊で抑えて下さつ！？」

言葉を無くすのも無理はねえな。

なにせ細い腕で牛鬼を殴り殺す女がいるんだから。

『焰！』

言わずもがな、フレアだ。

後ろから見てもその強さがよく分かる。

つか、せめて指示くらい出してから行けよ。

いつも通りに足を地面に叩きつけ鉄槌を造り出す。

「全員、周りを確認しておけ！」

叫びながら牛鬼へ向かう。

フレアと12、3人が交戦中。他はパニックになったり、それを抑える為に駆り出されている。

1体はフレアが不意打ち気味に倒したから残り5体。
斧を持っていたり、剣を持っていたりと様々だ。

「中途半端に距離をとるな！ 突進されるぞ！」

慌てふためいて右往左往している馬鹿共に向かって怒鳴る。

「っ、潰れてろっ！」

周りを確認して避けれない状態の俺に突進してきた1体を、体を回し遠心力をつけて頭に槌を落とす。

グチャリ、と慣れてしまった嫌な感触と共に絶命するのが分かる。少し気を抜きすぎてたか。

「ぎゃあああああっ！」

また1人やられた。

最初の襲撃も合わせると10人近くはやられてる筈だ。

対して、牛鬼は残り2体。

これ以上は殺させねえ！

「さっさと死んでおけ！」

他の冒険者を狙っていた牛鬼の背に、走った勢いをそのままに思い切り鉄槌を叩きつける。

なまじ筋肉の鎧で包まれている分、余計に肉を潰す感触が手に返ってくる。

しかし、牛鬼は止まらない。

痛みの所為か、手に持った斧をやたらめったら振り回している。

突進してこないのはいいが、これじゃ近づけねえ。

横目でフレアの方を窺^{うかが}うと、向こうも似たような状況みだいである。遠距離の操作は苦手なんだがな……。

鉄槌を両手で持って、頭上で回転させ勢いをつけたところで地面に振り下ろす。

地面が叩き付けた鉄槌の下から一直線に盛り上がって行き、暴れている牛鬼の手前で止まり、

『地槍！』

そこから魔力で固められた円錐形の土が突き上がる。

槍は狙った通りに牛鬼の胸を貫いた。

人型の魔物は人間とほぼ同じ構造をしてるから弱点は分かりやすい。もう1体はどうしたかと見てみると、フレアが他の冒険者たちにお礼を言っているのが見えた。

……。

「うあつ、他の奴に頼めばよかったのか！」

普段1人で行動しているからか、他の奴らのことをすっぱりと忘れてた。

わざわざ苦手な魔術を使って魔力を無駄に消費する必要なんて無かつたじゃねえか。

後頭部を乱暴に搔く。

生きてるのは……やっぱり30人くらいか。

戦闘に参加できる奴となるとそこから更に10人くらい減るな。とてもじゃねえが討伐が出来るとは思えねえ。

「おい、レイナの嬢ちゃん！これからどうすつ！？」

俺たち全員を囲むように宙に浮かび上がるいくつもの魔術陣。

魔術陣からそれぞれ1体ずつ牛鬼が現れる。

嵌められたっ！

構成をチマチマと考えている暇は無い。

出来る限りの魔力を込めて地面を踏み締める。

『地槍壁!』

牛鬼の群れから遮るように槍を作り出して円状の壁にする。これで少しは時間が稼げる筈だ。槌を放り出して地に還す。くそつ、こんな大規模な魔術なんざ使ったことねえよ。

悪態を心の中で吐くが、気付いた。

俺じゃなくて他の奴にやらせればいいんだった。

本日2回目である。

まあ、今回は仕方ねえか。周りが出来るか分からねえし。

「フレア様、バルドス様」

凜とした声でレイナの嬢ちゃんに呼ばれる。流石に冷静ではあるか。

「申し訳ありません。こちらの落ち度でこのような「謝罪は後だ。

この壁も10分も保たずに崩れるだろうからどうかしようぜ」…

…了解です」

罪悪感からか少し声に覇気が無い。

冷静ではあっても冷血ではないか。ほとんど関係ないから当たり前だが。

いかん、ユーキに毒されてきてる気がするな。

町に残してきた、連れの少女の尻に敷かれている少年を思い浮かべる。

さて、あいつならどうやってこの場を切り抜けるか。

……嬢ちゃん次第だろうな。

嬢ちゃんの性格からして進んで囷とかやりそうだもんなあ。で、なんだかんだ言いながらそれに付き合うユーキ、と。

万が一、嬢ちゃんが怪我してたら抱えて真っ先に逃げるな。

会ってそれほど時間の経ってない関係だが、何となく想像通りの気がする。

「へえ、笑ってられるだなんて大した胆力じゃないか。何か思いついたかい？」

フレアに声を掛けられた。

自分でも気付かないうちに笑っていたらしい。

この状況を笑ってたわけじゃねえんだが、まあいい。

「一点突破、全力で町に逃げる」

「妥当だろうね。レイナさんは？」

「いえ、特に異論はありません。周りに伝えておきます」

手早く話し合いを終わらせて準備に入る。

フレアはまた煙草を咳き込みながら吸っている。

いや、願掛けって日に何度もするもんじゃねえだろ。

心の中でツツコミながら気になっていることを聞いてみる。

「魔術師、それも高位の召喚師が何の為にこんなことをしてると思う？」

「さて、ね。他人が考えることなんてアタシには分からないよ」

だよなあ。

分かることと言えば相手の実力くらいなものだ。

あれほど多くの召喚を一息でこなせる魔術師。

少なくとも称号持ち以上の実力がないと出来ない芸当だ。

1人でやった場合、と頭に付くが。

「でも、まあ。はつきりしてるのは」

吸い終わった煙草を先程と同じように弾く。

違うのは地面に落ちる前に灰も残らず一瞬で燃えたということだ。ほんとに無駄にすげえ。

「少しイタズラが過ぎたつてところだね」

魔力が漏れ出し、辺りに熱気を撒き散らすほどの怒り。

真っ赤な魔力が空へと立ち昇り、空間ごと染め上げている。

正直、傍に居たくないほど熱いんだが。周りも何事かと騒ぎ出してるし。

「他の方は準備が終わりました。それと、協力していただけの方がいました。……あと熱いです、フレア様」

フレアに気を取られてて気付かなかったが、レイナが男女を引き連れて後ろに佇んでいた。

1人は栗色のショートカットでメガネを掛けたお嬢ちゃん。紺のローブを着込んで背丈に見合わない大仰しい木製の杖を持っている。言っちゃあ悪いが、鈍臭そうな娘っこだ。

もう1人は金髪のとつぽい兄ちゃん。オーソドックスな革鎧の上に枯草色のマントを着けて腰に剣を差している。ニコニコと笑っているのは何故だろうか。

「時間も無いし、とりあえず出来ることを言って」

「あ、えっと、石人形を5体ほど……」

ストーンゴーレム

「攪乱かくらんくらいですかねえ」

フレアの言葉に慌てて答えるお嬢ちゃんと笑みをそのままに答える兄ちゃん。

ああ、どうしようもなく不安だ。

「それなりに選別しましたので大丈夫です。……多分」

表情に出ていたのか、レイナの嬢ちゃんがフォローしてくるが最後に不安を煽るようなことを呟いたので台無しである。

「あと数分でこの壁が崩れるんだろ？ 気にしてられないよ。

とりあえず攻撃できる人全員で一点突破。そちのメガネの子は石人形出して後ろを押さえて。青年はアタシたちと一緒に囋」

「わ、分かりました」

「了解です」

緊張感があり過ぎても無さ過ぎても問題だな。

上手く切り替えてくれれば何も言うことはねえんだが。

めがねの嬢ちゃんが無関係な冒険者の側頭部に突き刺さるのが見えた。無関係な冒険者の側頭部に突き刺さるのが見えた。

兄ちゃんはそれ見て笑ってるだけだし……。

ああ、不安だ。

「崩れるぞっ！」

程なくして魔力で構成された土の槍の壁がボロボロと崩れ始めてきた。

全員に緊張が走る。

各々が剣を、杖を、槍を、斧を、弓を構えてその時を待つ。

やがて大きな音を立てて全てが崩れ落ちた直後、

「吹き荒れなさい『エアリアル風精の螺旋矢』」

レイナの嬢ちゃんが凜とした声で魔術を放つ。

轟音と共に風の塊が高速で俺のすぐ傍を通り抜け、前方の牛鬼を3体ほど巻き込んで吹き飛ばす。

「走れ！」

先導しながら叫ぶフレアの声で一斉に走り出す。

火が燃え盛り、風が荒れ狂い、地が隆起し、水が押し流し、氷が阻み、雷が駆け巡り、光が、闇が放たれ前に立ちふさがる牛鬼を打ち倒していく。

もはや小規模の戦争だな。

牛鬼の囲いを走り抜けて、少し距離をとってから振り返る。

50強、つてどこか。

報告よりもはるかに大きい規模の群れ。

それに対してこっちは俺、フレア、レイナ、メガネの嬢ちゃんとおぼい兄ちゃんだけ。

これで時間を稼げと。

「競争する？」

「あん？」

いつの間にか隣でフレアが不敵に笑っている。

「どっちが多く倒せるか」

「冗談。俺は数を倒すのは苦手なんだ。魔力の残量も少ないしな」

「そうかい。残念だ」

少しも残念そうには見えないが。

しかし競争ね。余裕あるじゃねえか。

それに比べて俺は何考えてんだか。

時間なんて稼がなくていい。

もともとあれこれ考えるのは性に合わないんだ。

後先考えずに突っ走ったって構いはしないだろう。

「で、競争する？」

「いや。しねえ」

フレアが何か言っているが、まあ、いいだろう。

足元の地面から槌を造り出す。

「…っし、行くぞ！」

気合を入れ直して牛鬼に向かう。

「一応アタシが指揮官なんだけどねえ…」

隣で並走しているフレアがぼやいているが、聞く耳なんぞ持ってい

ない。

そうやって言うくらいだったらそれらしいことをしやがっての。

「アタシは右に行くよ」

「了解。俺あ左だ」

左右に分かれた直後、ちょうど俺たちを掠めるような形で風の塊が通り過ぎ、牛鬼たちを襲う。

着弾した風は、その力を爆発させて周囲を切り刻む。

……せめて貫通型の魔術を使って欲しいんだが。

下手したら巻き込まれてたな。

目の前、4体の牛鬼が迫る。

先頭の牛鬼が剣を斜めに振り下ろす前に懐へ踏み込んで、その手を槌で打ち払う。

体を魔力で強化しながら肩を突き出して倒れるように前へ。

壁に当たったような衝撃が体に返ってくるが、それを無視してさらに踏み込む。

肩から感触が離れ、瞬間的に槌を振り降ろす。

倒れている牛鬼の胸に叩き込む。わずかな抵抗、しかしそれもすぐに消え失せる。

体を反転、槌を牛鬼の体から引き抜いて左右の2体を弾く。

バランスを崩した1体の肩に振り下ろして潰す。血が吹き出て体にかかるが気にしていられない。

すぐさま反転、そのまま横に槌を振り抜いて腹を打つ。

これではまだ殺せていない。

追撃を掛けようと踏み込むと、4体目の牛鬼が巨大な斧を振り回し向かってくるので後ろに飛び退る。

「うざってえっ！ どけっ！」

斧を振り回す牛鬼に、槌を投げる。

手からすっぱ抜けるような形で飛んだ槌は、牛鬼の頭に吸い込まれるように当たり、嫌な音を立てながら顔を潰す。

俺が素手だということを分かってか、殺し損ねた牛鬼が突進してくる。が、甘い。

地面を踏み抜き、新たな武器を作り出す。

片手で扱うにはあまりに長大なもの、突撃^{ランス}槍。

それを突進してくる牛鬼に合わせ　突き出す。

大きな衝撃とともに突き刺さり牛鬼は動きを止める。

これで4体。次は　っ!?

左腕に衝撃。無様に吹き飛び地を転がる。

こりゃ、折れたな。

力が入らない左腕に意識を向けながら、体を起こす。

フレアとレイナの嬢ちゃんと同じ数殺してたとしても残りは40近く。

それよりも先に自分の体の限界の方が早いかも知れない。

一向に数が減ったように見えない牛鬼の群れ。

そこから少し離れてしまった。

俺を吹き飛ばしたであろう牛鬼が突進してくる。

「があああああっ!」

突撃槍は先程突き刺したままなので手元には無い。

また新しく武器　今度は柄が長めの戦斧^{バトルアックス}　を造り出し、体を使

って右腕だけで振り下ろす。

ちょうど良く、唐竹を割るように頭に食い込み絶命させた。

これで5体か……。

相変わらず減ってるようには思えない。

折れた腕でどこまで頑張れるかね。

……ああ、めんどくせ。

マズイ、少しグダグダになってきた気がする。
もっと気を引き締めて頑張ろうと思います。

鳴り止まない手を打つ音。

満面の笑みを浮かべながら近づいてくる男を見る。

「素晴らしい！ 風・氷・雷・炎・癒。5つの属性を使え、更にそれを合成とは！ 私がそれをここに放った甲斐があるというものだよ！」

男を一言で表すなら初老の貴族。何か付け加えるなら、見た目としては真つ当な部類の、と頭に。
黒いスーツにズボン。磨きあがれた革靴を履いてシルクハットなんぞ被っている。

手に持った杖は歩行を補助するための物ではなく、ファッションとか、そういうもののだろう。

そんな人物が倒れた牛鬼を挟んでいるとはいえ、直ぐ近くに、しかも突然現れたようにいるのだ。

……待て、さつきこいつは、何て言った？

それを、ここに、放った？

尚も男の興奮したような声は続く。

「いやはや、私の自信作だったそれを壊されて憤慨したもののだが、よくよく考えてみれば君の前ではこんなものの玩具に等しいな！ 君を基もとにすればさぞかし良い作品が出来そうだ！」

つまり、こいつが牛鬼それをこの町ここに放った犯人で。

「ああ、私が誰なのか言っていなかったね。人の体をどれ程強く出来るか、その高みを目指して　　っと、危ないじゃないか」

「うるせえ、それ以上その口を開くんじゃねえよ」

この口振りからすると人間を材料にしてやがるっ！

男の演説を止めるために本気で殴りかったが、男は小さな音を立ててその場から跳んでいた。

「やれやれ。君には用が無いんだがね」

心底めんどくさそうに溜息を吐いて、芝居がかった動作で首を振る。彼我の距離、約8メートルといったところか。

それにも関わらず男の声が聞こえるのは、周りに誰もいないからであろつ。

張り詰められた空気が重く感じる。

重圧、とも言えはいいのだろうか。

男が纏う鈍色にびの魔力がさらにそれを助長する。

「……あんたの目的は？」

「さっきの玩具のテストだったよ。実戦に耐え得るかどうかの、ね」

生憎壊されてしまったが、と続けて小さく聞こえた。

感情が真っ赤に染め上がっていくのが分かる。

それだけのために、こいつは！

「……さない」

後ろから呟かれた声に全身に悪寒が走った。

俺の感情など上から塗り潰していくような昏い声。

「許さない許さない許さない許さない許さないっ！」

どこの病んでる人だ、てめえは！？

そんな気持ちも露知らず、蒼香は声音と同じような昏い魔力をその身から噴き出させている。

吹き荒れる魔力の余波が地面、壁、さらには家をも破壊していく。その光景はまさしく

「暴走……？」

暴走と言っていい。

昏冥こんめいの輝きがさらに膨れ上がりあたりを蹂躪する。

「消えろおおおっ！」

喉が潰れんばかりに上げられた声に合わせて昏い光が収束、長大な棒状へと変形させて男へと解き放つ。

暗闇色の光が目の前に溢れて。

音が、消えた。

「うあ……？」

何が起こった？

いまだに戻らない真っ白な視界、グラグラと揺れる頭を押さえて立ち上がるうと力を込める。

……待て、何で俺は倒れている？

もやが掛かったように思考がはつきりしない。

少しずつ視界が戻ってくる。目の前にあるのは

「なっ!?!」

一瞬でもやが晴れる。

先程までであった街並みは何か一直線に抉り取られ、空虚な空間を作り出していた。

原因など考えるまでも無い。暴走した蒼香の暗闇色の魔術だろう。

そうだ、蒼香は!?!

そして気付く。

「ああああああっ!」

圧縮された嵐の中心で叫ぶ少女。

こうしてみると随分と吹き飛ばされたことが分かる。

さっきまで1歩近づけば触れられる距離だったのに、ちょっとした徒競走が出来るんじゃないか?

……35メートルつてどこか。

距離を測るのが癖になってるな、こりゃ。

苦笑しながら蒼香に向き直る。

蒼香の暴走は止まる気配が無い。それどころか強くなっている気がする。

男の行方も少し気になるけれどまずはこっち。

どうする……?

「はっ。ぶん殴っても止めてやるさ」

声に出して確固たる意思に。

はてさて、そうは言ったもののあんな状態の蒼香がそう簡単に近づかせてくれるかな?

体勢を低く、暗闇色の嵐に向かって駆け出す。

あと20。

まだこつちを認識していない。

あと15。

魔力の余波で飛んでくる石畳の破片を、体を捻り最小限で避ける。

あと10。

足全体で地面を掴む様に、体は地を滑り一瞬で肉薄する。

0！

他を拒絶するように暴風が吹き荒れているが、関係ない。右の拳を握り締めて振りかぶる。

米神を狙った拳が当たる直前に、鈍い音を立てて軋む何かに阻まれた。

壁のようなものがある。

それを認識したと同時に正面を向いていた蒼香の顔が少しだけこちらに向く。

マズイと思うよりも早く、全身を砕くような衝撃。

呼吸が止まり、天と地が回り、無様に叩きつけられる。

だが、問題ない。

手足が千切れたわけでもなく、ただ吹き飛ばされたただけだ。

「……この頑丈さは1度調べたほうがいい気がするな」

本気でそう思う。

いつの間にか人間止めてましたじゃ困るんだけどなあ。

のんきなことを考えながら立ち上がる。ピリピリと肌を刺すような空気が痛い。

どうやら蒼香は俺を敵と判断したようだ。

動いてはいないが、こつちをじっと見ている。

……動かれても困るけど、動いてくれないのも困るな。攻めづらいっいたらありゃしない。

体の中の歯車を噛み合わせる。

さて、行こうか。

腕をだらんと下げて、自然体に。

先程と同じ、約35メートル。しかし難易度はノーマルからハードへ、と。

馬鹿な思考を止め、縮地。一瞬で最高速度へ。

同時に蒼香からの攻撃。蒼香が纏う暗闇色の魔力が切り離されて、形を変えて飛来する。

数なんぞ数えたくもない。とりあえず雨霰あめあられのよう、とはこんなことを言っただろう。

スピードを緩めて左へ半歩、加速して右へ2歩、避けられそうにな
いものは魔力を込めた手で弾く。

後ろでちよつとした爆発のような音がしているが気にしていられない。

足は止められない。

左へ転がるように跳ぶ。右手で顔面に迫るものを弾く。半身になつて避ける。背中に掠った。走る。左手で弾く。逆に弾かれてふらついた。腰の肉が削れた。関係ない。足元に着弾。無理矢理跳んで避ける。

きりが無い。

一瞬の合間を縫って縮地で範囲の外へと逃げる。

行き着く暇もなく蒼香の纏う魔力が薄く引き伸ばされ、槍へと形を変えたものが踊りかかってきている。

足りない。

この嵐のような蹂躪劇の前に、この程度では届かない。

さらに速く、さらに強く。歯車を最高速で奔らせ、なお上へ。

突き出される槍が体を掠める。関係ない。

再び蒼香に向かって走り出そうとするが、無理矢理方向を変えて飛び退る。

今までいた場所の石畳に真上から大人の腕ほどの槍が突き刺さり、

辺りに石の破片を撒き散らす。

腕で顔を防ぐ。一瞬、しかしそれは今この時において十分過ぎる隙。

「がっ!？」

痛みは左足から。

確認してる暇など無い。いまだに俺の左足を貫いているものを引き抜いて走る。

俺を追うように石畳に突き刺さり決っていく槍。

こんなのマンガやアニメでしか見たことねえっつもの。

ふと、蒼香が何かを振りかぶっているのが目の端に映る。

蒼香から見て俺の後ろは・・・、広場だ。大丈夫だと信じたい。

左足の痛みを無視して全力で蒼香の前から逃げる！

「ぬおおおおお!」

跳ぶと同時に後ろで轟音が通り過ぎる。

余波だけでも吹き飛ばされそうになるが、何とか踏みとどまって蒼香へと走る。

チラリと、横目で見て確信する。暴走したときに撃ったアレだと。

あんなもん当たったら塵すら残らんわ！

心の中で叫びながらそれでも足は止めない。

追撃は、ない。

激痛が左足を侵すが、多分、最後のチャンス。

全力で縮地。目標は

「……?」

途惑ったような気配。

それもそうだろう。恐らく蒼香からは俺が消えたように見えるだろ

うから。

そもそも縮地ってそういうものだし。

ありったけの魔力を集めて、拳を握り締める。

「!？」

気付かれた。だけど、遅い。

こっちはもう手前の真ん前だ、馬鹿野郎！

「おおおらあああああああつ！」

絶叫と共に拳を叩きつける。

壁に阻まれるが、問題ない。魔力で出来ているなら、それ以上の魔力で壊せる！

壁が軋み、ガラスが砕けるような音を立てて割れた。

蒼香が何かをするよりも早く、襟を掴んで引き寄せる。

「いい加減、目え覚ませっ！」

鈍い音が響いた。

Page 26 : 暴走と暗闇と（後書き）

読んで下さっている方、お気に入り登録してくれている方。ありがとうございます。

ようやくユニークが45,000を超えました。

ひとえに皆様のおかげです。

評価が無いのは・・・まあ言うてはなんですが普通ですからね。
頑張ろうと思います。

今更なのですが、ここ変じゃね？ってところがあれば報告お願いします。

夕刻の一室で女が声ならぬ声を上げている。

その声は周りにいる者を自分と同じ様にしようと呪っているようにしか聞こえない。

全身が痛むはずだ、無理もない。その苦しみを誰かに与えてしまいたいのだろう。

ふと、声が止む。

諦めたのか、それとも別の要因があったのだろうか。それは当人にしか分からないことだ。

静寂が空間を支配し、やがてそれを壊すように女がポツリと呟いた。

「……痛い」

「うつさい、黙って寝てろ」

割れたガラス窓から心地よい風が吹き込んでくる。

どうやら蒼香を止めた後、力尽きて倒れてしまったみたいだ。

今は魔力の枯渇と重度の筋肉痛のおかげで、治療院の一室、そのベッドの上で俺と蒼香2人仲良くダウンといったところだ。

大きな怪我はすでに治してもらっているので問題は無いのだが、筋肉痛の方が酷いのだ。

牛鬼のときの反動、さらに蒼香を止めるために全力で動いたこと。

それが重なりに重なって俺はベッドの上で腕すら上げられない状態なのだ。

いくら身体機能が底上げされてたって、あんだけ人間離れた動きをしてれば筋肉痛にもなるよな……。――

チラリと横を見る。同じように腕すら上げられない蒼香がいる。

……まあ、いいか。

蒼香も無事、俺も無事。後はおっさんが帰ってくるのを待つばかりだ。

……あのふざけた野郎が残ってたらこうやってベッドの上になんていないだろうし。

思い浮かべるのはあの貴族のような男。

うん、思い出すだけでもムカツクな。止めよう。

ふと気付いたが外からバタバタと走る音が聞こえる。なんだろうとか確認したいが全身筋肉痛の俺にそんなこと出来る筈もなく、喧騒が通り過ぎていく。

いやー、平和だねえ……。

「ごめんね」

小さく、しかし確かに聞こえた。

どうせ暴走のことだろうが、何を今更。

「俺も1回やったし、おあいこだ」

「あー、そういえばそうだったねー」

声に出すと体が痛いから顔だけ笑う。

蒼香もきつとそんな感じだろう。

暖かい風が部屋に入ってきて、カーテンを揺らす。

気にしてなかったけど季節ってどうなってるんだろうな。寒いの手なんだが。

こっちに來てからは温暖な天気が続いていたので気にも留めていな

かった。

「バルドスさん、大丈夫かな？」

「おっさん？ …… 殺したって死なないだろ、ありゃ」

本音である。

無駄に頑丈そうだもんな、見た目的にもキャラ的にも。

ランクも上な訳だし、特に心配する必要はないとは思っけど……。

あー、でも牛鬼ミノタウロスの群れの討伐だったよな。街にも牛鬼が現れて、しかもそれは人が関与して……。

ちよつと心配だな。

陽動？ そも、何のメリットが？

しかも実戦に耐えうるかどうかでなら普通おっさん達の方に行くだろ。意味分からん。

ってことは、別か？ 本当にただの偶然で群れになったか、もしくは他の奴が群れを作ったか。

…… いや。

今の俺じゃあどうしようもないし。何より面倒ごとに突っ込むのは蒼香だけで十分だし。

おっさんも良い人っぽいからな！。無理なものは無理って言う人だろうけど。

とりあえず動けるようになったら手当たりしだい祭壇のこと聞いて、魔術の練習して……。

今後の予定としては、多分ここに当分はいるだろう。街の人が許してくれれば、だが。

牛鬼を倒したのはいいが、街ぶつ壊したからな！……。

そこで思考を止める。廊下からも外からも慌てた様な声しか聞こえない。

「何だ？」

「聞こえる範囲では……、怪我人……危険……救援……無理……。
なんだか不安になるようなことばっかだね」

多分、牛鬼の討伐に行った人たちだ。

つかよく聞こえるな。俺には雑音のようにしか聞こえんぞ。

「えっと、召喚……囲まれた……囿になって……逃げて……」

「召喚？」

感心していたらさらに情報が増えた。

召喚つてのは、あれだろ？　俺がここに来たように、そこに無いものを呼び出す魔術だろ。

それが使われたってことは誰かが呼び出したってことになるよな。

うわ、なんか嫌な予感がバリバリですよ。

事態が嫌な方向へと向かっているのを考えていると、乱暴に部屋のドアが開けられる。

首だけ回して（これでも辛い）見ると、何やら怪我人が数人運び込まれてくる。

「患者いますけど！？」

「疲労と筋肉痛、魔力の枯渇だった筈だ。構わん」

看護師さん（女性）が叫ぶのを尻目に、濃い緑髪 of 白衣を着た態度が偉そうな女性がこちらへ近寄ってくる。

見たことのある顔だ、などと思っていたら、ベッドの上に寝ている俺を無理矢理蹴り飛ばした。

「~~~~っつ!」

蹴り飛ばされた痛みと床に落ちた痛み、さらには悶えたことによる筋肉痛が一気に襲い掛かってきて、声も上げられない。訳も分らず床の上で悶えるしかない。

「男だろ、それぐらい我慢しろ。ああ、そっちの女の子は丁重にな。それが終わったらこっちの男たちをざっとでいいから治療しておけ。私は他を見ってくる」

「はい!」

そう言つて女性は看護師を残して去つて行く。

何この扱いの悪さ。

泣くぞ? ドン引きするほどに。

「あの……、大丈夫ですか?」

さめざめと床で泣いていると、見かねたのか看護師さんが心配してくれた。

いい人や……。その優しさをさっきの偉そうな人に少しでいいから分けてやってくれ……。

あ、この人よく見ると犬みたいな耳ついてる。亜人……?

犬可愛いよな。狼はトラウマだけど。

「で、この人たちは?」

「あ、はい。牛鬼討伐隊の人たちだそうです。大勢の怪我人が出たつてことで……。すみませんがベッドを使わせて頂きます」

さっきの牛鬼の騒ぎでここが半壊してるので、ごめんなさい。と謝られるが、壊したのは俺達だし。罪悪感の方が勝るね。多分他の公共施設的なところ。ここだと教会か？ も使われてるんだろうし、俺が言うことは特に無い。それよりも

「あの、背の高い男の人を見ませんでしたか？」

「大体2メートルくらいで、上半身裸です」

蒼香が先に聞いてくれたが、少し情報が足りない気がするので付け足す。

あんな格好の人はそういないだろ。

「すみません。私は見てないですね……」

「そう、ですか」

蒼香の声のトーンが少し落ちる。

流石に見てないか。

何人入ってきてるのか分からないし、看護師がこの人だけって訳でもないだろうからな。

まあ、死んでなければちゃんと帰ってくるだろ。

大体、俺らは動くだけでも労力が必要な状態だったのに何をしろって話だよな。

一息吐いて、部屋を見回す。

ベッドが6つ。その全てに怪我人が寝かされている、と思う。見えないので何とも言い難いが。

自分が寝ていたベッドを占領している人を見るが、見た目的には重

傷と言う程でもない。

ふむ、足や腕、肋骨辺りが折れてるのかもしれないな。もしくは内臓が傷ついたか。

治癒の魔術で治せるんだろうが、魔力も無限ではないしなあ……。

「くそっ……」

「痛えよお……」

小さな呻き声が聞こえて来る。

うん、俺も痛いよ。筋肉痛だからあんたたち程ではないと思うけど。ちよつと張り合つて、不謹慎なことをしたと自己嫌悪。窓下の壁に寄りかかつて体と頭を冷ます。

「えいつ」

「……っ!？」

掛け声と共に、腕をポンと叩かれた。それだけで何とも言えない痛みが走る。

痛みに悶えると他の箇所にも痛みが走る。以下ループ。なんという悪循環。

その引き金を故意に引いた馬鹿を睨みつける。

「つか何でお前は平気になってんだ。」

「少しは楽になったでしょ?」

「ん……?」

言われてみて気付いたが、少し痛みが引いている。

例えるなら筋肉痛2日目みたいな感じ。

「さて、と。いつまでもここにいたら悪いし、宿に戻る?」

「んー、まあ、そうだな」

一応俺たちも怪我人なんだが、ここにいたら迷惑だよな。
立ち上がって埃を払い、ミシミシと音を立てる体に不安を覚えながらゆっくりと伸ばしていく。

うん、大きな傷は大体塞がってるし、大丈夫だろ。
荷物などを一通り確認し終わり、思い出した。

「剣が無い……」

「え?」

牛鬼に投げられてどこかの民家に刺さったままだろう。
手元にあった方がいいよな。

「悪い、先に剣取ってくるよ」

「あー、いいいいいよ。私も一緒に行くから」

面倒そうだから先に戻っててくれていいんだがな。

とはいえ断るのもなんなので一緒に行くことにした。

……べ、別に一人で行くのが寂しいわけじゃないんだからな! と、
一人ツンデレしてみる。即座に後悔する。

うつむ、ツンデレ自体そんなに好きでもないからな……。
なによりも俺がやったところで、なあ……。

病室を出て、受け付けへ。

今回の治療費は、俺たちが牛鬼討伐の人たちと重なってしまっ
て放置気味だったので少しだけ安くしてくれたそうだ。ナイス。

「ん？ お前たちまだいたのか」

「あ、さっきの」

治癒院から1歩外に出たその場所に、煙草を吸う不良医師がいた。
白衣のまま吸うんじゃないやねえ、臭いが染み付くだろうが。煙草の臭い
が嫌いな人だっているだろうに。
多分、相当酷いしかめっ面をしていたのだろう。医師は手元の煙草
と俺の顔を交互に見て笑った。

「これか。市販の煙草じゃなくて私が作った薬みたいなもんだ。魔
力の循環を少しだが早めてくれる」

臭いも酷くないだろ、と笑われた。

カラカラと笑う顔が快活な感じを際立たせる。

…… ああ、誰かに似てるかと思えば、前の街の治癒院の先生だ。
性格はフレアさんの方が似てるだろうが、笑った顔は先生にそっく
りだ。

「なんだ、人の顔をジロジロと」

「いや、前の街 「オールドセイムね」 そんな名前だったのか。
そこの治癒院にいた先生に似てると思って」

治癒師は顎に指を当てて少しだけ考えて、やがて納得したようにコ
クリと頷いた。

「確かにそれは私の……姉だったか、兄だったか」

「分からないのかよ!？」

肉親にも分からないとか、あの人はどんだけ隠してるんだよ!

ますます得体の知れなくなった人物は、俺の頭の中でとてもいい笑顔を浮かべていた。駄目だこりゃ。

「ふむ、後遺症などは無さそうだな。……魔力の枯渇はいい、お前の魔力タンクが小さいだけだ。だが筋肉痛の方。あれは不自然だ。まるで外部から無理矢理力を加えて動かされたような跡がある」

いきなり話始めたことに驚き、そして話す内容も意味がよく分からなかった。

そんな感じはしなかったと思うんだけど。

無理矢理力を加えられただなんて、そんな操り人形みたいなこと。

何を考えている? だってそれは当り前じゃないか。彼女がオレノ背ヲオシテイルノダカラ

「っあ!？」

まずい。なんか電波を受信してたような気がする。

俺は普通の人。俺は普通の人。俺は普通の……。

ぶつぶつと言っていたら蒼香に気持ち悪いと言われた。ひどい。

「ああ、そういえばお前たちが言っていた男な。宿に戻ってる筈だぞ」

「え……。本当ですか!？」

……なんであんたがその話を知っている。その話をした時にはいなかったよな？

目を白黒させて考えていると、治癒師はこちらを横目でチラリと見て笑った。

「治癒以外にも出来ることはあるんだぞ？」

そう言つて頭をポンと叩いた。いや、頭じゃなくて耳、か……？

……盗聴？

先生の透視といい、どうしてそうもプライバシーを無視するようなもんを……。

「淑女の嗜みだよ」

「盗聴が嗜みの淑女なんぞ豆腐の角に頭をぶつけてろ」

「ふむ、遠慮させてもらおう」

最後にカラカラと笑つて院内に入つていったしまった。

あー……、お礼を言うのを忘れてたな。また今度会つた時でいいか。不意に誰かに袖口が引つ張られる。

とはいえこの場には俺と蒼香しかないのだから、誰かと言つまでもないのだけれど。

「どうしたー、つてうおっ!？」

「よっ」

袖を引つ張っていたのは確かに蒼香だったが、その後ろの大きな男が声を掛けてきた。

まあ、おっさんなのだが。

「服を着ているだと……？　つーか怪我酷いな」

「俺だつて年中裸な訳じゃねえよ！　怪我は掠り傷だ。心配するほどのもんでもねえさ！」

そう言つて笑っているが、俺の目には結構な怪我に見える。

左腕はギブスで固定して首から吊り下げであるし、右手には松葉杖を持って体を支えている。

土色のインナーをよく見てみれば包帯によつて出来た凹凸おつぽつが見て取れる。

「まあ、俺のことはいいんだ。お前ら街の中で大立ち回りしたそうじゃねえか！」

おおう、いきなり大きな声を出すなつての。

しかし大立ち回りね。そう言えなくもないけど、その結果が一部半壊した街つてのはどうなのよ？

そう言つてみると、それはそれ、これはこれ。と言われてしまった。

「死んじまつた人には悪いが、運が悪かったとしか言いようがねえ。だが、お前らのおかげで助かったつて言つてる人も多いつて話なんだ。それは胸張つていいことだろうさ！」

おっさんのその言葉がやけにあつさりと胸に落ちて。自分が助けられなかった人たちのことを悔いているのだと、初めて気付いた。

いかん、ちよつと泣きそうだ。こんなに感傷的な人間だったかな？　少しだけ目を拭つて、誤魔化す。

……胸を張ることは出来ない。そんなことをしたら隣の馬鹿が全部

背負ってしまっただろうから。
いやはや、難儀なもんだね。素直に喜べもしない。
でも、まあ

「おっさん、ありがとう」

この人にお礼を言うのはまた別の話ってね。
気にすんな、と大きな声で笑うおっさんに感謝しつつ広場へ到着。
無残に挟られた家屋と石畳が痛々しい。

「おーおー、派手にやったな！」

「あんまり言わないで……」

大笑いしているおっさんと対照的に、蒼香はげんなりとしていた。
うん、まあいい気分ではないよな。
だが蒼香の暴走による被害は街だけで、怪我人はいないとのこと。
怪我人なんぞ出したら確実に自虐やら何やらをしていたことだろう。

「おお、随分高いところに刺さってんな！」

おっさんの言葉に2人して頷いて、民家を3人で見上げる。
2階の屋根付近に根元辺りまで刺さっているのが見えた。

「どうやって取るのさ」

うむ、どうしようか。
随分高いところにあるわ、根元まで刺さってるわで、俺じゃ抜けな
いんじゃないか……？

ふと、おっさんが壁を触りながら剣を見上げている。

「おっさーん？ 何してんだ？」

「まあ、見てろ」

そう言っておっさんは壁に手を走らせた。途端に黄色の稲光が壁面にほとばしに入り、円を描き、複雑な紋様を浮かび上がらせ、1つの陣を形成していく。

それが完成したと同時に強く発光し、民家の壁の一部が崩れだした。ガシャン、と重く鈍い音を立てて剣が落ちた。

「魔力が少ない状態なら、こんなもんか」

「へえー」

感嘆の声をあげる。魔術って色々な使い方が出来るんだな。

拾い上げて刃を見てみると細かな傷があるものの、大きな罅ひびのようなものは無いので安心した。

おっさんは剣を見て、鍛うち直した方がいいかもしれないと言うが、生憎とおっさん自身も怪我をしているのでそれもままならない。

とりあえずやることは終わったので蒼香とおっさんに呼びかけて宿へ戻ることにする。

でも剣を取るために壁を崩すつてのもどうかと思うんだが……。気にしないことにした。

「そつえば、バルドスさん。牛鬼の討伐は」

「……運が良かった、ってところなんだろうよ」

宿へ戻る途中、蒼香が思い出したように言った言葉は最後まで発せられることはなく、おっさんの言葉に掻き消されてしまった。

事の概要は、召喚によって呼び出された牛鬼の群れに囲まれ、それを脱するためにおっさんたちが囲になった。しかし数の暴力には勝てず、死に掛けたところで突然牛鬼たちが倒れたというのだ。

「そうだな……。まるで、操り人形の糸が切れたような、そんな感じだった」

誰かが操っていたってことか？

いや、まあ、心当たりがあるけれども。

「召喚師の姿は見えないの？」

蒼香が尋ねるがおっさんは首を横に振るばかりであった。

んんー？ 魔術のことはよく分からないから何とも素人考えになるんだが、姿が見えないくらい遠くから召喚って出来るもんなのかね？ イメージ的には術師の周りにしか出来ない感じなんだが……。さっぱり分からん。

兎にも角にも、誰も犯人を見ていないとの事なのでギルドの方もどうしようもないらしい。

「まあしばらくはここで休養だろうから、難しい事なんぞ後でいいじゃねえか！」

そう言って笑うおっさんの姿も、どこことなく寂しさを感じるものであった。

今日も快晴。

晴れ渡る空の下で少しずつ歯車が回りだす。

Page 27 : 怪我と無事と（後書き）

申し訳ありませんっ！

色々ゴタゴタしてたってのもあるんですが、筆が乗らないというか、指が動かないというか、そんな感じでした。

関係無いけれど、最初の1行だけ読むと妙にエロ（ry

さんさん
燦々と降り注ぐ光。木を叩く小気味いい音が辺りに響き渡る。
他の場所からも音は響き、まるで合奏のようにも聞こえる。
街の人々が大忙しと駆け回る中、民家の日陰に青い髪の少女が佇ん
でいるのが見えた。
たたず

「いやー、今日もいい天気だねえ」

「明後日の方向を見ながら突っ立ってないで仕事しやがれ」

滞在2日目。街の修理を手伝っている俺たちである。

「そんなに時間も掛からずに直りそうだねえ」

「流石魔術と言いたくなる光景だな」

何せ木材で形を整えた矢先に土や石が次々と形を変えて積み上げられていくのだから、こっちとしては荷物運びくらいしかすることも
ない。

その荷物運びもつい先程終わってしまって、手持ち無沙汰な状態なのである。

街の人の半分位は魔術が使えるから人手にも困らない上に、牛鬼討伐隊の中でも比較的傷が浅かった人も駆り出されている。

「あ、魔術で思い出したけど、私“闇”の属性も使えるようになって」

たから」

「少しその才能をよこせ」

いやもう、割と真面目に。

どんだけ才能の塊なんだよ、お前は。と呟くが本人はどこ吹く風。これっぽっちも気にしていないようである。

いや、まあ。使えるようになった経緯を考えるとろくでもないが。うーむ、俺にも何かないだろうか。

そう思いはすれど、ようやく安定して光の玉を作れるようになった俺が、新しく魔術を使えるようになる訳もなく。

って、そういえば。

「“無”の魔術……」

全く気にしていなかったけど、どんなもんなんだろうか？

つーか何をイメージすれば使えるようになるんだか。

むむむ、と唸っていると轟音と地面が揺れる。

なにかが落ちたような感じだな。それもかなり大きくて重いものが。音の位置としては多分ギルドとかある街の入り口の方だろう。

うん、魔術は後回しでいいや。

とりあえず野次馬になってみようかな。

予想通り。丁度ギルドの前に人壁が出来ている。

小人族や巨人族などもいるから一概にそうとは言えないが、こつちの世界の人の身長の平均は180くらいだと思う。

170ほどしかない俺には前が見えん。

「報酬があれだけつてのはどういうことだっ!？」

怒鳴り声が聞こえる。

「いやもんつけてんのか。こんな時にやることないだろうに。」

そんなことよりさっきの音はなんだったんだろうかと思っていると
コートの袖を引っ張られた。

「あれ」

蒼香が指差した方を見ると、納得。

溶けかけの大きな氷が道に鎮座していた。

うつすらと青く光っているので魔術で創り出したものと分かった。
魔術すげえ。

「うん、錬度が足りない」

氷を見て頷きながら呟く蒼香。

どこぞの職人か、貴様は。俺には魔術で創ったただの氷の塊にしか
見えん。

「なんていうか、こう、粗削りというか急場で創ったハリボテとい
うか。見せ掛けだけの脅し用？」

「さいですか。」

俺には分からない見分け方の様なものがあるんだろう。

それは置いといて、要するに。

「依頼をこなしたはいいが、報酬が少ないから騒いでる感じが」

「だろうね。でも基本的に報酬は事前に決まってる筈だけど」

ふむ、確かに成功報酬だところといった問題が多々あるから事前に報酬金額が掲示されているとかなんとか。

「先程から説明しているように、この街の復旧のために経費を割いているのです。それでも十分な報酬を用意した筈です」

凜とした声が聞こえてくる。

牛鬼討伐依頼のことか。

……街の被害って俺たちが原因じゃん。

蒼香もそれが分かっているのか少し身を縮こまらせている。張本人だし、仕方ないね。

「あれだけのことをやらせておいてあの金額じゃ割りに合わねえつつってんだよ！」

「色でもなんでもつけやがれっ！ このクソアマ！」

「それともあんたが体で払ってくれるか？ ああ！？」

ちよつと強引に前の人を押しのけて騒ぎを起こしている人を見た。1人じゃなく3人。どれも似たような柄の悪い男。ついでに言う頭も悪そう。

その中でも1歩前に出ているリーダー格の男が青い魔力を纏っているのが見える。

対峙しているのはギルド職員の制服を着ている銀髪の女性。

怒鳴り声を右から左と言わんばかりに澄まし顔で口を開いた。

「申し訳ありませんが、金額を増やすこともあなた方に体を委ねる

ことも出来ません。気持ち悪いです、嫌悪感しか湧きません、人生やり直してきて下さい」

つらつらと言葉を重ねるその姿を見て少しかだけ相手に同情した。

しかし奴さん^{やつ}たちがここまで言われて黙っている筈も無く、米神に青筋立てて今にも爆発しそうな感じである。

「てめえっ！」

もう爆発した。

取り巻き2人が襲い掛かる。

フワリ、と風が歌い、次に確認できたのは荒れ狂う嵐に巻き込まれ吹き飛ぶ取り巻きたちであった。

「近寄ってこないで下さい、虫唾^{むせ}が走ります」

彼女が手にしているのは翠色^{みどり}の大型の弓。

それを構える姿は凛々しく、1枚の絵のようである。

などと思っていたら足を踏まれた。ブーツだからそれほど痛くはないが。

ジロリと目線で蒼香に抗議するが、取り合ってくれなかった。別にどんな感想を持つのが人の勝手だろうに。

「くそっ、称号持ちは伊達じゃねえってことか」

「一応、実力でしか認められませんから当たり前です」

なにかやりとりしているが、蒼香の機嫌が少し悪いのでこっちはそれどころじゃない。

というか何度も言うのが普通に人の思考を読み取るんじゃないよ。

「いや、なんていうかユーキは分かりやすい」

さいですか。

蒼香とそんなやりとりをしているうちに事態は進展。

ギルドの人とリーダー格の男が派手に魔術の打ち合いを始めた。

周りも巻き込んで。

氷塊と風の矢が乱れ飛びそれぞれ相殺し合うが、流れ弾がこないなんてことはない。

周りの人たちと一斉に退避。尻尾を巻いて即座に離脱。

「つーか誰も止めないのかよ!？」

「誰だつて巻き込まれるのは嫌でしょ？」

「いや、それにしたつてなあ……」

建物の陰に隠れたところでそこから少しだけ顔を出す。

嵐の中心にいる2人はどちらも1歩も動かず、眼前の敵を討とうとひたすら魔術を行使するだけだ。

青と翠が打ち合い、響き合い、消えてゆく。

命を奪うためのものと分かっていても、その幻想的な光景に目を奪われずにはいられなかった。

その状況で気付いたのは恐らく偶然。

目の前を飛んで行く氷と、視界の端に映った小さな人影。即座に陰から飛び出して踏み込む。

流れ弾と、それに気付いていない女の子が目に入る。

何もしなければ間違いなく直撃コース。

ガチリ、と歯車が噛み合う重い音が聞こえた気がした。
加速。

目に映る光景から色が失われてゆき、雑音は耳に入ることはない。時間が流れるのが遅くなるような感じを受けながら理解した。届かない、と。

確かに追いつける。だが、それだけ。

自分の身を割り込ませるには少し遅い。腕1本で防げるような代物しろものにも見えない。魔術で固めてあるだろうからそう簡単に斬ることも出来ないだろう。

どうすればいい。

いくら遅く感じているとはいえ、時間が止まることはない。

こうしている間にも視界の中で氷弾が少しずつ少女に向かって行くのだ。

どうすればいい！

掴む？

無謀

魔術で

見殺し

救えない

剣を

無理

不可能

無駄

斬って消してしまえばいい。

不意に頭をよぎった言葉のままに躊躇いなく剣を抜いて掬すくうように斬り上げた。

さしたる抵抗も響くような音が鳴るわけでもなく、無色無音の世界モノクロで砂が流れるような音色が聞こえただけであった。

ゆっくりと世界に色と音が戻る。

同時に自分が何をしかしたのかも少しずつ理解してきた。

いつの間にか地面に座り込んでこちらを凝視している目の前の少女を助けるためとはいえ、至近距離で剣を振り抜くってのはどうなのよ。

混乱していく俺の目の前で、少女の目の端に雫が溜まってゆく。

「ふえ……」

あ、これはマズイ。泣かれる。

「あー、いや、その、これは……おぶっ！」

どうにかして宥めようと言葉を探していると、いきなり誰かにコー
トの襟を掴まれて地面に引き倒され、同時にすぐ近くでガラスが割
れるような音がした。

「坊主、よくやった！」

地面に押さえ付けられたまま、野太い声と共に乱暴に頭を撫でられ
る。

ちよっ、顔が地面に擦れて痛い！

「あっちも凄いが坊主の方が凄いな！」

「まあ兄ちゃんがやらなくても俺が颯爽と助けてただろうがな！」

「反応すら出来なかった奴が馬鹿言ってんじゃねえよ！」

何この状況。

俺は押さえ付けられたままだし、頭上でドンパチ聞こえるわ、誰か
も分からない人たちの笑い声が聞こえてくるわで意味が分からん。

SIDE : A o k a

よかった。

ユーキに流れ弾が行ったときはどうなることかと思っただけ、ユーキも女の子も無事みたいだ。

気になるのは、日に日にユーキの反応速度や身体能力が上がっていること。

私の才能が、とユーキはいつも言うが、逆だ。

自惚れではないが、自分が多才であるということは何となく思う。

だけどそこから先に進んでいる感じはまるでしない。同じ場所で足踏みをしているような、そんな感覚。

ユーキの方がよっぽどそれに溢れているだろう。

いや、まあ、ユーキの覚えが悪いというのには頷かざるをえないけれど。

「このつ、いい加減にしやがれ！」

決闘まがいの乱闘はまだ続いている。

いい加減終わらせないと本当に被害が出そうだ。

まあ、私は自分とユーキとその他一般人に被害が降り掛からなければまだ許容できるけれど。

乱入しても誰も何も言わないよね？

よし、行こう。

『歌え、緑黄の風土。羽よりも軽く、鉄よりも鋭く。紡ぎあげるは敵討つ牙！』

一直線に嵐の中心に走り出し、いつものように呪文^{キーワード}を謳いあげる。左手の人差し指に付けた指輪によって少しか自分の負担が軽減さ

れる。

必ずしもイコールではないけれど、魔術の構成は綿密になればなるほどその魔術の強度が上がる。

だから私は謳う。より堅牢に、崩れないように。

……まるで私自身のようだ、と思ってしまうた。

「ニブス・ドウオノワクラ
旋嵐の双刃！」

両手に生まれた双振りの短剣を滑るように振るってゆく。

甲高い音色が連続して響く。

「てめっ、ガキイ！ ぶっ殺されてえのか！？」

何か怒鳴ってるけど、関係ない。

「30秒でいいです。少しだけ時間を下さいませんか？」

「30秒だろうが1時間だろうが頑張りますけどっ！？」

女の人の良く通る声が後ろから聞こえたので適当に返しておく。

正直、向かってくる氷弾の数が多すぎて返事をするのも一苦勞なのだ。

いくら手数を重視して風をメインに武器作ったからって私の技量が着いて行くかは別問題。

いくらセンスや才能があるからといって、経験と努力によって裏打ちされた実力には遠く及ばない。

攻めに関してはセンスがあると言われたこともあるが、逆に守りは褒められることも少なかった。

チッ、と音を立てて腕を掠めた氷弾。

ああ、集中しなきゃ。考え事をしながらだなんて、私がそんなに器

用なわけないじゃないか。

『私は誰にも囚われず 貴方は誰にも縛られず
我らは鳥 何にも属することない自由の象徴』

後ろから聞こえる澄んだ声。

それに合わせて踊るように、双剣を振るう。振るう。振るう。

絶え間無く襲い来る氷弾を視界に入ってきたものから順に斬り落としてゆく。

ひたすら防戦に徹するがそれでもジリジリと押され始めてきた。

流石にギルドの職員に喧嘩を売るだけのことはあるようだ。魔術の行使の間に隙が無い。

こっちの双剣は少し削れてきているというのに、これじゃあ直している暇も無い。

『彼は何にも拘らず 彼女は何にも侵されず
彼らは雲 誰にも捕まることない奔放の象徴』

ビシリ、と魔力の土と風でできた双剣の1つに罅が走り崩れてゆく。やっぱり耐えられなかった。ここまで良く持ったとも思える。

2つの属性 1つは固定する力を強めるもの で固めたといっても私ではこの程度だろう。

残る1本も時間の問題だろう。

とはいってもこのままでは手数が足りずそのまま押し切られてしまう。

あと10秒、かな。

イメージは水。

詠唱を省略。簡略式で速度を重視、刀身は固めずに基本性質の強さを上げる。

射出型、回転数と数を上げるために単発の大きさを小さく。

『アキュリス・アクアー
穿つ水短槍！』

水と氷がぶつかり合うが、水はなすすべなく蹂躪じゅうりゃんされてゆく。
まあそれだけでは終わらせないけど。

エルシオン
『侵食！』

氷弾に纏わり付いた水が、その魔術構成を侵おかし頑強な造りを脆くさせる。

これなら簡単に斬れ

「ないしいっ！？ ああ、もう！ いくら出力が弱いからって得意分野で負けるな、私っ！」

無理だった。

残っていた剣も3つほど斬り捨てたら普通に折れた。

あ、これマズイ。

視界を埋め尽くすほどの氷弾。そのどれもが私を貫き後ろにいる女性を巻き込むには十分な代物。

詠唱を省略して魔術を撃つても焼け石に水。結果はほとんど変わらないだろう。

それでも足掻くけどっ！

詠唱を破棄。 ” 闇 ” の属性を展開。 性質 ” 収束 ” による魔力の圧縮。 力技で刹那の間に込められるだけの魔力を注ぎ込み、発動！

適当に放たれたそれは耳障りな音を立てながら数個の氷弾を逸らすことには成功した。

無理矢理行った魔術行使の代償で右腕に激痛が走っているが関係ない。

更に撃とうとして 爆炎と、土の壁によって阻まれた。

「え……?」

「まるで狙ったようなタイミング。もっと早く来い、と言いたくなりますね」

声に振り向くとそこには異様なものがあつた。

先程まで持っていたのは女の人と同じくらいの大きさの弓だった。今見ているものはそんなものではない。

「魔術式攻城用超大型固定弩。『ウラガレステグ喰らい尽くす大嵐』」

「そんなもの街中で展開しないでー!?!」

名の通りの見た目と大きさである。

いかにも、前にあるものは全部ぶち抜いていきます! みたいなその形状を伝える女性。

ギチリ、と弦を張る音が聞こえた気がした。

「さようなら」

土の壁が崩れると同時に、限界まで張り詰められた弦が解き放たれる。

「く、そがあああああ!」

対峙していた男はいつの間にもやら創っていた氷塊を撃ち出すが、翠色の矢はものともせず貫き男を

「おおあああああああああああああ………」

男には当たらず、引っかけるような形で空へと消えていった。

……なにこれ？

後に残されたのはやりきった顔をしている女性と空を見上げる私だけ。

「快適な空の旅へ。1名様、ご案内します。出来れば世界の裏側く
らいまで行って欲しいのですが」

クルリとこちらへ向き直り深々と頭を下げてくれた。

「助力のほど、感謝いたします。どうにも決闘まがいのような戦闘
は苦手で」

「ああ、いえ、そんな。偉そうなこと言っておいてこんな様ですし」
1時間どころか約束の30秒も無理だったのに。

しかし、女性は首を横に振ってくれた。

「それでも、あなたが来てくれなければ被害は増えていたでしょう
から。この街の一員として礼を言うのが当然でしょう」

他人にお礼なんて言われ慣れてないからちよつとこそばゆい感じが
する。

多分、私の顔は赤くなっていることだろう。

ユーキの足を踏んでおいてなんだが、微笑まれて少しドキッとした
のは私だけの秘密にしておこう。

「さて、言葉だけというのも少し味気無いですし、お金はありませ
んがちよつとした物を差し上げます」

「？」

さて、何が貰えるんだろうか。

街の惨状は目に映らないように、少しだけ上を向く私であった。

SIDE : Baldus

「おい、いいのか？ 知り合いなんだろ？」

乱闘していた場所から少し離れた建物の陰。覗き込まなければ見えないような位置。

紺のジーンズに黒のタンクトップ、黒髪を纏めもせずに腰まで伸ばした女 フレア に話しかける。

こいつも随分と怪我をしていたが包帯の1つも巻いていない。
どうにも魔術の効きが他人よりも顕著らしい。

「いいのさ。見送りまでして1ヶ月も経たないうちに再会だなんて
かつこ悪いじゃないか」

影でよく分からなかったが、そう言って軽く伸びをしながら笑うフレアの横顔はさっぱりしたもののように見えた。

「ま、あの子たちを頼むよ。任せたはいいけど少年も中々に危なっかしいからねえ」

「そりゃあ、かまわねえが」

そんなに心配なら付いてくればいい、と言おうと思ったが止めた。
俺がそんなことを言っただけで付いてくるくらいなら、最初からそうした
筈だ。
ふむ。

「じゃあ、達者でな」

背を向けたフレアに声をかけると振り返りもせず右手をプラプラ
と振られた。

路地の奥へと消えていくのを見送って、壁に寄りかかる。

「はあ……」

病み上がりにあんなことさせんじゃねえよ……。

ユーキも嬢ちゃんも正義感というか、出たがりというか。

2人とも1歩間違えば確実に死んでたじゃねえか。

柄じゃねえが年長者として言っておかないと不味いだろうか。

ヒョイと顔を出して2人の様子を盗み見る。

先程まで命を落とす危険があったにも関わらず、2人は笑っていた。

……まあ、いいか。

気を配るのも大人の役目ってな。

いくつか気になるところもあったが、まあ、今はいいか。

あいつら自身でどうにもできなくなったら少し手を貸すくらいでいいよな。

* * * * *
* * * * *
* * * * *

.....

本日、第3都市にて”無”の発動を確認
またひとつ、歯車が進む

本当に申し訳ないです！

やりたいことが多すぎてこの様ですよ。

生きてます。一応。

随分長いこと書いてなかったので色々おかしいところがあるかも知れません。

もし見つけたら感想にでも書いて下さい、お願いします。

空が茜色に染まる頃。

俺とおっさんはギルドの休憩室の一角で顔を突き合わせていた。ううむ、まだ顔がザリザリされてるような感覚が。

「つか、結局どこに行きたいんだ？」

体に比べて小さなカップを持ったおっさんが聞いてくる。

ありゃ、そういえばおっさんには詳しいことは言ってなかったか。まあ、最終的な目的地とすれば……

「前に聞いた祭壇。現状として手掛かりも何も無いけどな」

「どこにあるのかも分からない場所が目的地、ねえ」

そうなんだよなあ……。

あの野郎、それ以外何も言わずに去って行きやがったからこっちとしては手探りで進まなければいけない訳で。

「何の話ー？」

ギルドの女性に礼の品とやらを貰いに行っていた蒼香が帰ってきた。蒼香の手には……一冊の本？

「次はどこへ行くかって話だ。つっても決まってるようなもんだがな」

「ん？ どういうことだよ」

蒼香は手に持つ本を膝の上に抱えて椅子に座り、おっさんに続きを促した。

バサリ、とテーブルに地図が広げられる。

「この街がここな。んで、歩いて10日前後か。北に行くとするとどうしてもここ」

トン、と一点に指を置いた。

「この山に当たる」

大陸を上下を分ける様に存在する線がある。

さて、山ねえ。それを超える手段っていうと。

……山登り？

「いや、そんな顔すんなよ。別に山登りなんざしねえっつの」

「え？ じゃあどうやって山を……？」

おっさんが言うそんな顔とはどんな顔か、知りたくもないのでそこはスルー。

そして俺の代わりに蒼香が尋ねてくれた。

山を登らずに越える方法？

「トンネルとか？」

「いや、あそこの山は鉱物も取れるから坑道はあるが抜けるような

もんはねえ。ま、鉾山で栄えた街があるがな」

「んー？」

蒼香と2人で首を捻っているとおっさんに大きな声で笑われた。そして目の前に突き刺さる翠色の矢。

「もう少しお静かに」

「……おう、すまん」

こんなに小さく見えるおっさんも初めてだな。叱られた子供のようなのである。

まあ俺も平気な顔してるけど背中では冷や汗で酷いことになってるけどな！

音も立てずに消えていく矢。

残るのは穿たれたテーブルと地図だけである。

「おつかねえなあ」

「もっとこう、物静かな女性ひとだと思ってたんだけどな」

「いやいや、街中であんなものの展開する人がそんなだったら私は偽者かと疑うよ」

ヒソヒソと3人で顔を近づけて物凄く失礼なことを話し合う。

「……一応言っておきますが、聞こえてますからね」

「」「ごめんなさい」「」

即座に3人そろって謝りました。

山越えの方法は現地で見て驚け、と言われてやることも無くなってしまった。

蒼香は貰った本を読んでいるし、おっさんは傷ついた体を解す^{ほぐ}ために柔軟をやっている。

自分も軽く魔術の練習をするが、どうにも上手く歯車が回らない。仕方がないので蒼香が読んでいる本の詳細でも聞こうとした、そんな時である。

「……何か鳴ってる？」

それに一番に気付いたのは蒼香だった。

微かに響く音。恐らく振動音だ。

俺たちの荷物の中から聞こえている。

「……なんで携帯が」

適当に自分の荷物を漁ると、使われていなかった自分の携帯が振動していた。

恐る恐る開く。

電波は圏外のまま。しかし確かにメールを受信していた。

「何それ？」

蒼香が聞いてくるが、こっちはそれどころじゃない。

充電が残ってるとはいえ、動く筈のないものが動いているのだ。どこそのメリーさんからでも電話が来たのかと思ったっつ。

いや、まあメールが届いただけでも十分怖いんだが。

呪いのメールではないことを祈りながら確認してみる。

そこには差出人も件名も無くただ簡素に文が書かれているだけだった。

『セレスパルナツソス”。その酒場”ひと時の楽園亭”。一番奥のテーブル

アカツキのツルギ』

意味が分からん。

”アカツキのツルギ”が何かは分からないがキーワードか何かとして覚えておけばいいだろう。

このメールの送り主は、まあ、あいつくらいしか思いつかない。俺たちに何をさせたいんだかな。

心の中で悪態を吐くが、そんなことをしても何が変わる訳でもない。

「無視しないで」

頭を鷲掴みにされ無理矢理首の向きを変えられる。

とりあえず叩いて掴むのを止めさせる。

「で、何なんだ？」

「ん、まあ簡単に言うて遠くの相手とも連絡が取れる機械。ここじゃ使えない筈なんだけどな」

柔軟を止めて興味深く聞いてくるおっさんの問いに答えながら、携帯を蒼香に手渡してやると物珍しそうに見ている。

携帯は無いんだよな、こっち。どうやって送ってきたんだか。

「ねえ、バルドスさん。この”セレスパルナツソス”って次の街だよね？」

「おう！ 別名、鉾石と風の街だぜ！」

蒼香の問いと、おっさんの答え。

蒼香が何を気にしているのかは分からないが、おっさんが言った街の別名にちよつと興味が引かれた。

山が近いから風の街なのかねえ。

それとも何か魔術に関係していることだろうか。

「何か、薄気味悪いね。まるで全部見られてるみたいで」

「まあちよつとタイミングが良すぎる気もするが、山を越えるならここが一番安全だしなあ」

一応別のルートもあるのか。

流石に山登りなんてしたくないし、何より安全な道を行きたい。

いや、その街で白でもその使いでもが待っているのであれば是非とも別のルートを行きたいが。

「ま、考えても分からんよ。気楽に行こうぜ」

考えることを放棄する。

もしもを考え出したらきりがない。

樂觀的すぎるかも知れないけど、俺はこれくらいで十分だね。

難しいことは分からんよ。

「そのとーりっ!」

「は?」

壊れるのではないかと思うくらい大きな音を立てて誰かが入ってきた。

その姿を見て、すぐさま脇に立て掛けておいた剣を取る。

「あんたは、どっちだ?」

「おい、ユーキ?」

病的なまでに白い肌、膝まである髪、飾り気も何もない白いドレス。上から下まで真っ白なその姿。

夢に出てきたあの姿と同じ。アレと違うのは大鎌を持っていないところか。

「ん、ああ。仕方ないか。姉さんにやられたものねえ」

「あんたがアレじゃないって証拠は」

いや、証拠もなにもない。

そもそもアレだったらこんな悠長に会話が出来る筈がない。

困ったように首を傾げる白い女を見てそ^{かし}うは思うが、体が完璧に固まってしまっている。

「んーと……、あんなに愚痴を言い合った仲なのに、私のことは遊びだったのね!」

「愚痴を言つてたのはあんただけだし、誤解を招くような言い方を
するんじゃない？」

両手を合わせて良い笑顔になったと思えばこんな発言をしてくれた。
確かにこの人は先に出てきたほうの人だわ。

先程まで緊張していた自分が馬鹿らしく思えて、一気に脱力して椅子に座り込んだ。

「で、結局なんなの？」

「……俺にも分からん」

それにしても蒼香よ。誰なの、じゃなくてなんなの、とは酷いな。
いや一連の流れを指しているんだったらなんなのでいいけど、明らかにあの白い女性を見ながら言つたし。

「じゃあ自己紹介しよっかな」

大笑いの余韻を残す表情で女が口を開く。
黙っていれば綺麗なんだよな。黙っていればの話だけど。

「うーん、そうね。イリスって呼んで。魔術は光で広範囲殲滅型。
スリーサイズは上から」

「アレらとの関係は？」

関係ないことを言い出したので無理矢理ぶった切る。
少しの沈黙。

「……戦友、が一番近いかな」

イリスの眼はどこか遠くを見ているようだった。

想いを馳せているのか、こちらのことを忘れてしまったかのように視線は中空を彷徨さまよっている。

蒼香はあまり面白くなさそうな顔をしている。

おっさんは、別段意見は無いんだろう。

「で、そのイリスさんは何のためにここに来たの？」

棘を含んだ蒼香の言葉。

機嫌悪くするなよ。後々面倒なんだし。

蒼香のジトツとした視線を受けながらも別段気にしていないようである。

「まあ、あなたたちのお手伝いよ」

「手伝い？」

「そう。姉さんとか、アキラとか大変だったでしょ？ 私がいれば少しは収まると思うし」

確かに大変だった。でもなんでそれはアンタがいれば収まる？

くそつ、分からないことが多すぎる。

情報を整理していると、突然テーブルが派手な音を立てて跳ね上がる。

「お父さんはなんでユーキを狙ったの！？」

「……今はまだ教えることが出来ないわ」

蒼香が拳を叩きつけたらしい。

噛み付くように身を乗り出した蒼香の体から赤い魔力も漏れ出しているし、少し落ち着かせないとマズイか。

「何を言って　！」

「じゃああいつらの目的は？」

蒼香を遮って質問する。

あと、少し声を抑えないとまた射^うたれるぜ？

肩をすくめながら蒼香に視線を送ってみる。

まだ何か言いたそうな顔をしているが椅子には座ってくれた。

「ごめんなさい。それも駄目なの」

ふむ。

今、俺たちが知ったらいけないってのはなんでだ？

自分の口からでは言えないなら分かる。だけどイリスは今はまだ、と言った。

知られたら困ること？

「まだ物語は始まったばかり……」

「？」

イリスが小さく呟いた。

物語？

序盤だから話せないこと？

……その物語の核心へと至ること、もしくは核心^{ネタバレ}そのもの、かな。

なんか、こつ、最後の扉を開く鍵を持つてるけどその扉がどこにあるのか分からないような感じだな。
面倒なことになってきたな、と椅子の背もたれに体を預けて天井を見上げる。

「じゃ、そういうことだから私も一緒に行くからね」

「却下。得体の知れない人を近くに置いておきたくはない」

ああもつ。また蒼香が噛み付いて。

まあ確かにこれ以上ないつてくらいに怪しい人だけどき。
でもどう考えても鍵を握る人なんだよな。
おっさんを見ても肩を竦めるばかりで何も言わない。

「得体の知れないつて……。ただの魔術師よ」

ただの、ねえ。

ぼんやりと天井を見ながら会話を聞く。

「私が今言えるのは、あなた達に死んでもらっては困る。それだけ死んでしまうと物語が進まないから。」

そしてこの物語が進まないと、もしくは終わらないとイリス自身が困るということ。

「あなたに言われなくても死ぬつもりは全くないよ」

「一番危険な職業に就いてるのに、絶対に死なないと言えるの？」

……駄目だな。情報が少なすぎる。

目的も何も分からないからこれ以上の推測は無駄かな。
とりあえず今やるべきことはこれの收拾をつけることが。

「なあ、おっさんは？ 賛成？ 反対？」

蒼香とイリスにも聞こえるように話しかける。

話しかけられた当人は露骨に嫌な顔をしたけれども。

「俺あ元々お前たちにくつついて来たようなもんだからな。正直に
言えばどちらでもいい、だ。会話の内容が8割方分からねえし」

「そっか。蒼香」

「……何？」

物凄く不機嫌な顔と声音で返された。

「アキラさんのことについて、俺らは何も知らないようなもんなん
だ。多少不審な点があるうが来てもらったほうがいいんじゃないの
か？」

「それは、そうだけど……」

「まあ、あれだ。俺は別に問題ないと思ってる」

そもそもこの人じゃなくても俺たちについてくるメリットが無いし。
ついてきても何も得るものが無いのであれば、そういうところには
近寄ってこないだろ。

「……1つだけ誓って」

「なあに？」

「裏切らないでね」

ゾツとするような声音で蒼香が囁いた。

おっさんも雰囲気には呑まれたのか少し腰が引けている。

「創世の神の1柱”フォルモント”の名に誓うわ。どんなことがあっても、私は、あなたたちを裏切らない」

真剣に、蒼香を真っ直ぐ見つめてイリスは誓いを立てた。
蒼香とイリスは視線を逸らさず、ただ互いを見ている。

「……了解。一緒に行こう」

沈黙を破ったのは蒼香だった。

正直、ホツとした。ここで折れてくれなかったら今後の方針をノーヒントで決めなきゃいけない。

「しかしまあ、あのイリスって嬢ちゃんもすげえ名前出すな」

「うん？」

「”フォルモント”つつつたら満月を象徴とする誠実さを表す女神だ。それだけ本気なんだろうよ」

へえ。誠実さねえ。

どっちかってーと俺は創世の神の方が気になったんだが、まあ後で聞こうじゃないか。

「じゃあ、これからよろしく！」

花のような笑顔、と言えはいんだろうか。

自分の語彙の少なさにうんざりするが、まあよしとしよう。

「ああ、そついや。これ、何のことか分かるかね？」

イリスに携帯を渡す。

「アカツキのツルギねえ。懐かしい合言葉……」

「合言葉なのか？」

おっさんが会話に参加してくる。よほど暇だったんだろう。

まあおっさんは蒼香の親父さんにも会ってないから話が分からないつても当たり前なただけ。

「そう、私たちの旅団だった”ピースメーカー”でアキラが使う合言葉」

ピースメーカー
平和を作る者たち、ねえ。

それに私たちの旅団だった、ね。

「……”ピースメーカー”？ 待て待て待て。あれか？ お前らが言うアキラってのは鈴谷暁のことか？」

「ん、そうだよ。蒼香の親父さん。つか知ってるんだな」

「馬鹿野郎！ 冒険者や傭兵でその名前を知らねえ奴がいたらモグ

リか世間知らずだ！」

凄い剣幕で怒られた。

そんなに有名な人物だったのか、あの男。
で、それに狙われる俺って何さ？

「そうか。あの人は今行方不明って話だったが、ちゃんと生きてるんだな」

おっさんの言葉には多分、憧れとか尊敬とか、そういったものが含まれているんだろう。

命を狙われた俺としては全くもって複雑な気分ではあるが。

「ま、感傷はそれくらいにして準備としましょう。歩くとしたら結構かかるし」

「……そうだな。ちょっと商人ギルドの方に行って手続きとかしてくるわ」

そう言っておっさんは出て行った。

準備に一番時間がかかるのはおっさんだからな。

「ユーキ、イリスさん、私たちも」

「ん？ おう」

「はいはい」

蒼香に連れられてギルドを出る。

もう外は暗くなってきたいて店もしまっているだろうから、明日陽

が上がったらすぐに出発という訳にはいかないだろう。

今から出来ることと言ったらせいぜい身の回りの物を整理することくらいだろう。

蒼香もそのつもりのように宿へと足を向けている。

「勇輝、蒼香ちゃん」

「うん？」

「何？」

イリスの声に振り返る。

言い出しにくいのか少し沈黙が続く。

「ありがとう」

真っ直ぐな言葉。

言った本人は照れくさいなどと言ってこっちをまともに見ようともしないが。

ふむ。その言葉が何に対してなのか、はつきりしていないけど素直に受け取っておこうじゃないか。

蒼香は頷いているだけである。

一緒に行くこと云々についてだったら打算的なことが大きいから少し罪悪感湧くけど、必要としている、ということなら同じだし。

「じゃあ勇輝と同衾どうきんしようかなっ」

「その白い服を真っ赤に染めますよ？」

ドーキンが何を指すのかは知らないが蒼香がこんなこと言うんだか

らまたアホなことを言い出したんだろう。
蒼香とイリスが言い争いをしながら先を進む。
なんだかんだ言って仲良いんじゃないか？

そんなことを思う夜の一幕。

同衾 同じ夜具で一緒に寝ること。主に男女が一緒に寝ることをいう。

「そおおおおい!!」

街道に無駄に響き渡る俺の声。

言うまでもなく魔術の練習である。

昼に街を出た後、蒼香に昨日貰っていた本の詳細を聞いたところ、なんと基礎魔術書の写本だった。

どうやら前のギルドの奥には書物庫のようなものがあるらしく、そこにあつた魔術書をあのお姉さんが写したものの1つらしい。

「しかし、やれどもやれども上手くならねえなあ」

おっさん、うつさい。

人が気にしてることを言うんじゃない。

「てえええええい!!」

指先に灯る光はまるで切れかけの蛍光灯のように点滅している。

あ、消えた。

ここまで持続が出来ないとは、泣きたくなってくる。

みんなにコツを聞いてみたが、蒼香は「搾り出すように?」、「おっさんは「練習しかない」、「イリスに至っては「気合!」、などと全く当てにならない答えが返ってきたのでお手上げ状態である。

だけでもまあ、折角聞いたのでイリスの気合とやらを実行中。

結果は……無残なものである。現実是非情である。

楽なものではないと分かつてはいたが、基礎でここまで躓くとは……。

「続けてれば結構簡単に出来るようになったりするよ」

蒼香から励ましたかなんだかよく分からない言葉を貰った。

そついうものか、とも思うが蒼香が出来たからって俺が出来るとも限らないので必死になってやっている。

……まあ、おっさんの言うとおり、上手くなる気配が全く無いのだが。

「イリスの魔術の腕前ってどんなもんなんだ？」

軽く休憩がてら質問してみる。

確か広範囲殲滅型だったか。

「例えるなら敵だと無駄に強かったライバルが仲間になった感じ？」

「弱体化！？」

しかも分かりにくい！

まあ、あるよな。

敵だと猛威を振るっていたライバルとかが味方になった途端物凄く弱かったりしてな……。

詐欺だろ、あれは。

と、そんな懐かしい思い出に浸っても仕方ないので方向修正。

「もしくは前作で壊れだった格ゲーキャラが修正入って最弱にされちゃった感じ？」

「少し分かりやすくなったけど使えねえことこの上無いな！？」

……ん？

違う。そういうことを聞きたいんじゃない。

「聞き方を変えよう。どんなことが出来るんだ？」

「えー？」

あれでもない、これでもないと考え始めるイリス。
そんなに考えるようなことだろうか？

まさかこれも話してはいけないことに入るのか？
いや、イリス個人の力量に関することだからそんなことはないか。

「全盛期でも国1つを相手にして壊滅させるくらいしか……」

「あんたはどこまでいけば気が済むんだよ！？」

個人で国を相手に出来るってどこの最強キャラだよ！
そんな奴がそこらにいたら世界が成り立たないわ！

「まあ今じゃ全力出しても1個中隊相手に出来れば良い方じゃない
？」

あつさり言うが、それでも規格外な気がする。

戦闘スタイルというのもあるんだろうが、それにしたって……。

蒼香の父親も強かったが1人で軍隊相手になんて……。
出来そうだな。

あの剣が飛ぶのが魔術だとして、その射程がどれくらいにもよる
けど、少なくとも戦場を引つ掻き回す程度なら出来そうだ。
なんでこんな人外たちに狙われなきゃあかんのか。

「さてさて、私の話はいいから、ユーキの魔術の練習しようか」

イリスが言う。

「ユーキは持続が壊滅的っぽいから、他のところを伸ばしてみようか」

「どうしようか？」

「形変えんのも持続が必要になるしなあ」

「ま、順当に考えて瞬間火力でしょうよ」

持続とは真逆の、一瞬の火力と質を高めること。

「お手本ね」

荷物を置いて、なにも無い草原へと向かう。

イリスの全身から白い光が湧き上がり、それはゆっくりと消えていく。

いや、違う。消えているのではなく、その全てがイリスの右手に収束されている。

ビリビリと圧力のようなものが感じとれる。

量だけなら暴走した蒼香と同じくらいであるが、特筆すべきなのは、その輝き。

蒼香やおっさんでは比べ物にならない。

満月の光がそのままそこにあるような存在感。

『 開放 』

光が放たれる。

視界を埋め尽くすほどの白は、一瞬で消えてなくなる。
残ったのはイリスを始点として薙ぎ倒された草原だけである。

「なにそれすげえ」

「わ、私だってできるよ!」

「張り合わんでええっつーに」

俺の言葉を聞かずに蒼香はイリスと同じ様に草原へと向かう。
蒼香も白い光を纏うが、やはりイリスほどの輝きはない。
錬度が違っただけでこうも変わるものなのだろうか。

上手く言い表せないが、何か根本的に違う部分がある気がする。

『開放!』

ゴウ、と風が吹く。

だが蒼香が放った光は、イリスのそれと比べると半分ほどだろう。
事実、草原もそれほど倒されていない。

「とりあえず俺の目標は蒼香に追いつくことかな」

「そうね。さすがにいきなり私に追いつけとは言わないわよ」

とりあえずはやってみて体で覚えろ、だな。

SIDE: A o k a

「さて、蒼香ちゃんはとうしうか？」

「え、私も？」

ユーキが集中し始めた頃、イリスさんが話しかけてきた。

いくらお父さんと同じギルドにいたからって、それほど実力は離れてないと思っていたけど、大違いらしい。

さきほどの魔力の放出を見れば嫌でも思い知らされるというものだ。

「そりや当然。勇輝だけが頑張って、蒼香ちゃんは見てるだけってのは不公平でしょう」

「まあ、確かに」

鍛錬を怠っていればすぐにでもユーキに追い越されるだろう。

それは、なんというか、マズイ。

プライドなんて上等なものではない。

ただ、もう少しくらいお姉さんぶっていたいのだ。

と、そこまで考えてイリスさんがニヤニヤと自分を見ていることに気が付いた。

「……なんですか」

「べえつうにいいー？」

イラストとする言い方だ。

もちろんじゃれあい程度のことなんだろうが、こちらの考えを見透かされているようで少し気分が悪い。

「ま、悪ふざけはこの辺にしておいて今から鍛錬内容を説明します」

「……はあ、了解」

「蒼香ちゃんは出力が足りないということなので、少し無理をしてみます」

「どんどんぱふぱふーとやる気の無い感じでイリスさんは合いの手を入れる。」

無理、とはどういうことだろうか。
人並み程度のものなら苦もなく出来ると自負しているが。

「とまあそんな感じなことを考えているんだろうけど、息するのも辛くなるだろうから気を付けて」

「うあつ！？」

肩に手を乗せられるのと同時に、全身に重圧がかかる。

私はそれに耐え切れずに膝を付いた。

ほんとに呼吸も出来ないし！？

「集中して！ 体の中にある魔力を少しずつ吐き出して！」

なるほど。今私の中にある魔力の8割方はイリスさんの魔力だ。
要するにこれは、魔力容量を増やすための荒療治。

自分でやろうとすれば無意識にセーブをかけてしまうから、こうで
もしなければ容量はなかなか増えない。

「蒼香っ！？」

「嬢ちゃん、大丈夫か!？」

「だ、い……じょ……ぶ……」

ユーキとバルドスさんが気が付いてくれたらしい。

声を出せないことがこれほどドキドキとは思わなかった。

汗が吹き出る。

酸欠で意識が曖昧になってきている。

気を抜けば体が破裂してしまいそんな感覚。

手放しそうになる意識を、奥歯を噛み締めて必死に繋ぎ止める。

少しずつ、ゆっくりとでいい。しかしそう思うほど焦ってしまう。

「蒼香っ!」

ぼやけた視界の中、ユーキの顔だけははっきりと見えた。

ユーキの右手が私の額に当てられる。

冷たくて気持ち良い。

最初に会ったときよりも少しだけ固くなった掌。

私のことを引く張ってくれる、優しい手。

縋り付いてしまっているのも分かっている。

依存しているのも分かっている。

ただどここれくらいの夢を見たっていいじゃないか。

じわりと涙が滲み出る。

私だっひとて女だ。

男を好きになってもおかしくはないだろう。

なんで普通でいられないのさ。

……よし。ちよつと気分的に楽になった。

四肢に力を。顔を上げて。

チマチマとなんかやっていられない。

呼吸を整えて、魔術を使うつもりで一気に

「…………あれ？」

いつの間にか普通に呼吸をしていた。

……………なんで？」

「……………呆れた。これも愛の成せるもののかしら」

イリスさんが何か言っているけど聞こえないということにしておう。

食べ過ぎのような感覚でちょっと気持ち悪いけど、息もままならな
い状態よりはましである。

腕、大丈夫。脚、ちゃんと動く。視界も良好。

まだイリスさんの色に染まっている部分もあるけど魔力も問題なく
循環している。

「蒼香、本当に大丈夫か？」

「え、あ、うん。少し苦しいくらいで他は何も……………」

むしろ魔力の循環に関しては平時よりも調子がいいくらいだ。

「無茶しやがるなあ！」

「こうでもしないと短期間で魔力容量を増やすことは出来ないから、
仕方ないことね」

簡単に言ってるけど1歩間違えれば死んでもおかしくないんだけ
どな……………」。

「さて、じゃあ先を急ぎますか！」

「まだ、最寄の村まで結構あるからなあ！」

イリスさんとバルドスさんが大きな声を上げて前を行く。
え、私のことは放置？

「ほれ」

「？」

ユーキが屈んで背中を見せる。
えーっと、これは、その。

「まだ気分悪いんだろ？ 背負ってやるから」

……。

つまり、それは、おんぶということ？

ボツ、と顔から火が出るように熱くなる。

さすがにそれは恥ずかしい。

いや、肩を貸したり（事故だけど）押し倒されたこともあるけれど！
あ、思い出したらまた顔が……。

「じゃあ、失礼しまーす」

これ以上ボ口を出さないようにさっさと背中を貸してもらっ。

うん、見た目よりも大きく感じる。

そういえば、お父さんに1回だけ負ぶってもらったことが、あった、
よう、な……。

蒼香が背中寝息を立て始める。

あんだけ元気だったのがこれだけ消耗するのか。わざわざこんな道の途中でやらんでもいいだろうに。

……まあ、いいか。役得って事で。

「ほれ、荷物持ってやるよ」

「おっさん、ナイス」

いくら身体能力が上がってるからって自分の荷物＋蒼香と蒼香の荷物は流石に重い。

蒼香は物凄く軽いんだがなあ。

ちゃんと食ってるのか不安になるくらいだ。いや、食べてるんだけどな。

「さすがに無茶すぎたわね」

「まっただ。次からは気を付けてくれ」

イリスの言葉に即座に返す。

「ありゃ？ てつきり次からはこんなことはするなって言われるかと思ってただけだ」

「詳しいことは分からんが必要なことなんだろう？ 蒼香もやる気は

あるんだ。俺がどうこう言っても仕方ないさ」

それでもイリスのことは信用、いや信頼していると言っていい。

「なあおっさん。」ピースメーカー”について知ってることを教えてくれよ」

「俺じゃなくて本人に聞きゃあいいだろっが」

「一般的な認識も知っておきたいんだよ」

「あー、そうだな。」ピースメーカー”のメンバーは6人。

”剣聖”鈴谷暁。”聖女”イリス。”魔浄”のヴェルン。”亜竜”ティール。”暴流”荒神。”悪食”のアニマ。であってるよな？」

おっさんがイリスに確認を取る。

「なんだろう。名前からして強キャラ臭がする」

「実際強いんだよ。それこそ次元が違う。6人揃えば世界中を相手にしても勝てるって言われてたほどだ」

さすがに誇張しすぎだとは思うがな、と続けた。

「20年前、だったか。俺がお前くらいの時だったからよく覚えてる。」

海の方この小さな国同士が、自分たちこのところの資源がなくなりそうだから領土ごと寄越せつつってな。始めのうちはよくある小競り合いだった。

「だがでけえ軍事国家がそれに参加してからどんどん戦火が広がっていった。……それこそ世界を巻き込むくらいに」

ふむ？

その軍事国家も資源がなくなっていたってことかね？

「周りが勝手に疲弊してくれたから横から掻っ攫っていかみたいな感じで？」

「じゃあなんで海を越えて戦火が広がったんだ？」

「周りの国から奪っただけでは満足できなかった、ってところかいまいちピンとこない。」

「だが、それも突然終わりを告げる。無名のギルドがたった6人で戦争を止めた」

「それが、ピースメーカー」

確信を持ってそう言う。

「そういうことだ。戦争が終わったあとにそのギルドの連中が普通に依頼を受けるようになってメンバーの名前が分かった、と。一般的に知られてるのはこのくらいの筈だ」

……なんだか釈然としない。

「出回ってる情報が少なすぎるのか……？」

「そも、戦争を止めたってくらいだから各方面から怨まれているだろうに、なんで姿を現した？」

「いや、これは考えても仕方がないことだな。」

「イリス、話せることだけでいいから今の話の補足を聞かせてくれないか？」

「んー？ あんまり話せることがないなあ。強いて言えば私たちだけで戦争を止めてはいないよ。」

さすがに個人の力じゃ出来ることが限られるし」

「そんなもんか」

あまり期待はしていなかったので特になにも言わない。

「まあ、属性とかだけなら言ってもいいかな。」

「暁はー……、まあ特殊だからおいといて。ヴェルンが”闇”。テ
イーロは錬気師だから無し。荒神は”火”、”風”、”雷”。ア
ニマは”水”、”土”、”氷”に”闇”。私は”光”と”癒”」

「見事にバラバラだな」

バランスが取れていると言った方がいいだろうか。

しかし、特殊ってのはどういうことだろうか？

俺の”無”と同じ様なもんか？

「あと、錬気師ってなんだ？」

「魔術を使わない、気を使った戦闘をする奴らのことだ」

「”使わない”のか”使えない”のかは人に寄るけどね」

おっさんとイリスが説明してくれる。

魔術に気。

そのうち「合成して最強！」みたいな奴が出てくるんじゃないだろうか。

改めて思うが、ほんとにゲームや漫画の中の世界だな。

「2つの違いは属性の有無とあり方だけだ。それ以外は殆ど変わらねえ」

「あり方？」

「魔力は大体の動植物がその身に含んでいる。それは、大気中にある魔力を体の中に取り込んでいるからで、自発的に生み出しているもんじゃない。比べて、気は生命力みたいなもんでどんな生き物だろうがこれが無いってことはあり得ない」

「本気で使いすぎると気絶じゃなくてそのまま死んじゃうから気を付けてねってこと」

「折角説明してんのに身も蓋も無い言い方すんじゃないよ!？」

生命力と精神力ね。

おっさんとイリスが漫才しているのは放っておいて、考える。どうにもこういう話は楽しくてしょうがない。

何も出来なかったあっちに比べて、選択肢の多いこと。ファンタジーに憧れるのも分かる気がする。

まあ、代わりに賭けるものが命なんだがな。

「……死ねないよな」

死ぬわけにはいかない。

家に帰りたい。

家族に会いたい。

友人に会いたい。

蒼香を悲しませたくない。

「参ったね、どーも」

酷く軽い少女を背負い、2人の声をBGMに街道を進む。
ひとつの想いを胸に抱えながら、ってね。

道中にある村に立ち寄って補給しながらおよそ12日。

山のふもとと一帯と少し登ったところにまで広がる街並み。

鉱石と風の街、セレスパルナツソスまでやってきた、のだが。

「……………飛竜？」

明らかに鳥ではありえない大きさの生き物が山の上空を飛んでいる。それも複数匹。

「ここの名物の翼竜だ。^{ワイバーン}あれで山を越える」

まじかよ。

事故とか無かったんだろうか。

主に翼竜に食べられるとか。

「ここの翼竜は生まれた時から人と一緒にいるから自分から人を襲うことはないんだってさ」

蒼華が街に入る時にもらったパンフレット片手に説明してくれる。

山と翼竜のおかげで観光名所でもあると。

「生まれた時からって…………。そんな前から続いているのか？」

そもそも人と竜じゃ寿命が違っただろうに。

今山の上を飛んでいる竜だって100年くらい軽く生きてそうだしな。

「人と竜がこの街を創ったんだよ。ここの関係はこの街が出来た時から続いている」

人と竜がねえ。

竜ってのは多分長生きなんだろうし、知識を蓄えて人と意思疎通が出来た奴がいたんだろうな。

そのうち人の言葉を発する竜ってのも見れるかも知れないな。

「ほれ、まずは宿だ。呆けてねえで行くぞ！」

おっさんに背中を叩かれて歩きだす。

蒼香は見たことのない風景に目を輝かせながらお上りさんの様にキョロキョロと忙^{せわ}しく辺りを見回している。

俺もやりたい気持ちには山々あるが、蒼香を見ていると少し恥ずかしいので自重しておこう。

「宿の後は酒場か」

「ひと時の楽園亭だね」

携帯に送られてきたメッセージ。

その意味するものは何か。

トラブルじゃなければいいんだけどな。

「……俺は外しておいた方が良いか？」

「変な気使わなくてもいいつつの」

おっさんが恐る恐る聞いてきたので答えを返す。

思えばおっさんはまるで関係ないんだから巻き込む前に別れた方が

いいんだろうか。

うーむ、後でおっさんに意思確認しておかないとまずいな。
やれやれ、面倒事が多すぎるっつの。

ギィ、と見た目通りの古びた音を立てながら木製の扉が開く。
中から聞こえてくるのは随分と楽しそうな声だった。

昼間だからなのかも知れないが、あまり酒場という感じはしない。

「いらつしゃい！ あ、初めての人ね。席は自由にどうぞ」

看板娘というやつだな。

顔良し、スタイル良し。 87点。

そんなことを思っていたら蒼香に小突かれた。

俺はそんなに分かりやすいんだろうか。

「ユウキ。言っちゃあなんだが、見すぎだ。俺でも分かる」

「ああ、なるほど」

それは相手にも失礼だし、気をつけよう。

さてさて、件の一番奥のテーブルは、と。

昼間から酒盛りしている男たちや遅めの昼食を取っている女性たち
を横目で見ながら店の奥へと進む。

いた。

見た目は少女。黒を基調としたゴスロリ？の服を着ている。

髪の色は薄い紫。黒猫を抱きかかえて大変可愛らしいとは思っただ
が……。

キモチワルイ。

少女の佇まいたたずというか、雰囲気というか。
あの黒に少しだけ青が混ざった様な色の魔力も。
何と言えいいのか分からないが、少女に近付くことを体が拒絶している。

「ユーキ？」

誰かが俺を呼ぶが、それに反応することが出来ない。

今すぐにでもここから逃げ出したい。だがそれをなんとか押し込んで踏み止まる。

俺を呼ぶ声に反応したのか少女がこちらに視線を向けて、静かに嗤った。

「あ……。オイシソウ」

ッ！！

一瞬にして総毛立ち、声にならない叫び声を上げる。
後ろへ跳んで、強く何かにぶつかる。関係ない。

少しでもあの少女から離れないと　！

「こーら、止めなさい」

イリスがやんわりと少女の肩を叩いて止める。

少女は些か不服そうではあるが、イリスに向き直って話し始めた。

「大丈夫か？」

すぐ後ろから野太い声がする。

どうやら先ほど後ろに跳んだときにおっさんの体に突っ込んだようだ。

肩を抑えるようにして支えられていた。

「……大丈夫じゃねえよ」

それだけ返す。

むしろなんでおっさんや蒼華が平気なのかが分からん。

蒼香は俺よりも少女に近いところにいるのに不思議そうに俺を見て
いるだけ。

「……冗談。……からかっただけ」

少女がポツリポツリと言葉をこぼすが嘘にしか聞こえん。
本気で食われるかと思っ たつつの。

「……でも、美味しそうっていうのは本当」

「勇輝、この子と二人きりにならないほうがいいわよ。性的な意味
とそうでない意味の両方で食べられるから」

イリスの言葉を聞いて吹き出した。
そんな見た目11、12歳の少女に襲われて死ぬエンディングは嫌
だぞ。

「……嬉しい？」

抱えている黒猫と一緒に首を傾けて聞いてくる。
これだけ見ればただの少女なんだけどな。

……まあ質問の内容は少女がするもんじゃないが。

「いや、そうでもない」

「……残念」

本当に残念そうに眼を伏せるが、「殺してあげるよ、嬉しい？」など聞かれて嬉しいと答える人はごく少数なんですよ。

「ほらほら座って座って。あ、アニメ1人だけ？」

「……違う。荒神、一緒……」

イリスが少女の隣に座り、俺たちにも座れと促してくる。そんなことより、今アニメって言ったよな？それにその当人も荒神って。これってもしかなくても。

「自己紹介、遅れた……。ピースメーカー、“悪食”のアニメ、です」

「ああ、うん。ユーキです」

「蒼香です」

「バルドスだ」

先ほどのやり取りが普通の様に思える。やっぱり何か突出して凄い人ってのはどこかおかしかったりするんだろうか。

しかし、人も食うのか……。恐ろしい。

「あ……、誰彼かまわず食べるわけじゃ、ない、よ？」

「どうしてそこで疑問形になるのか」

しかも安心できるような内容じゃねえし。

はた、とそういえば普通に会話が出来る。

抑えてくれればやはり普通の少女と変わらないということか。

「おーれーのーさーけーはーっと。うん？」

呑気な声が近付いてきた。

180後半の身長に浅黒い肌。白いタオルを頭に巻いて、一見すると土方のバイトの兄ちゃんである。

だが、男から立ち昇る鮮やかな紅色の魔力が俺でも分かるほどの実力者ということを示していた。

「おいおいおい、俺が便所行ってる間に随分と大所帯に」

声の主が一瞬止まる。

視線はイリスに向かっている。

「なんでアンタがここに……」

「細かいことは言いつこなしよ。あ、お酒来たわよ？」

イリスが示した通り、先ほどの看板娘さんが盆に料理とお酒の入ったグラスを乗せて近付いてきた。

男は随分と固まっていたが、やがて諦めたようで椅子を他所から持ってきてドツカリと座った。

「イリスがいるってことはそういうことだよな。荒神だ」

「あ、お姉さん。このリム肉のシチューとオレンジジュースを。パンをセットで」

蒼香よ、空気を読もうな。

リムというのはこの地方特有の羊と牛が混ざった様な動物で、肉は臭みもあまりなく、柔らかくて、安価であると、3拍子揃って庶民の食卓のお供らしい。

「俺はユーキ、そっち蒼香。こっちはバルドス。あ、俺はリム肉のステーキをライスで」

「俺もリム肉のステーキとライス。あとエール」

「おー、そうか。で、そのユーキ達がどうしてこんな所に？」

肉に齧^{かぶ}り付きながら聞いてくる。

「アカツキのツルギ」

「……ほう？」

荒神の雰囲気が変わった。

陽気な感じが無くなり、冷やかな目でこちらを値踏みするように見てくる。

それに気圧されまいとこちらも睨み返してやる。

「オーケー、どうやらマジみたいだな。俺もここで待ってた甲斐があるってもんだぜ」

「待ってた？」

ここで？

俺たちを？

まるで来ることが分かってたかのような言い方だな。

「まあ、後で話してやるよ。今は飯だ！ 姉ちゃん、酒持ってきてくれー！」

……なんというか、しっかりしてる時としてない時の落差が酷い。良く言えば切り替えがしっかりしてるってところなんだろうが、目の前の姿を見てるとどうにもそうは思えなかった。

……しかし、若いな。

ピースメーカーのメンバを見て思う。

イリスは20位に見えるし、荒神はいつでも30、アニメに至っては12歳位。

おっさんが言ってたとおりならこの人たちは40後半位じゃないと計算が合わないんだが……。

「あんまり歳のこと考えてると、お姉さん怒っちゃうぞー？」

「……イエス、ママ」

対面からイリスにナイフを突き付けられた。

口元は笑っているが、目が笑っていない上にハイライトも見えないので余計に怖い。

さて、なんやかんやありながら食事が無事に終わり、食後のお茶を

飲みながらのお話である。

「で、待ってたって？」

先ほどのことを荒神に問う。

「言葉通りだ。ここで待たされてた、って方が正しいがな」

誰に、とは言わない。恐らく奴だろう。
しかし、何のために？

「ま、俺の役割は道案内っつーか、道を示すことだ。特に考える必要はねえよ」

「……あんたたちが敷いたレールを進めってか」

自分たちが思い描くルート以外は進んで欲しくないか、それともクリアまでの道のりを教えてくれるのか。
どちらにせよそれに縋^{すが}るしかないのだが。

俺の言葉を聞いて怒るところか不敵に笑みを浮かべて、

「そういうことだ。ちなみにレールから逸れると谷底へ真っ逆さまだってことを教えておいてやろう」

そんなことをのたまいやがった。

俺らには選択権もねえってか。

嫌な感じだ。

「ま、あれだ。罌に嵌めようとか、そういうのじゃねえからそこは安心しとけ」

「安心も何もないと思うんだが」

確かめる術はないわけだし。

もし分かったとするならそれは畏にかかった後の話だ。意味がない。

「えっと、荒神さんたちはなんで、お父さんと？」

「お父さん、つてことはお嬢ちゃんがあの子のチビちゃんか。大きくなったもんだ」

こんなに小さかったんだぜ、と親指と人差し指を少しだけ広げて笑った。

いくらなんでも小さすぎだ。胎児か。

思わず突っ込みを入れそうになるが、ここは我慢しておく。話が逸れても困るしな。

「他の奴らは知らねえけど、俺はグータラしてたところを拉致られた」

「……はあ？」

理解できない。

「別の地方で山賊稼業やって食ってたんだが、それにも飽きてな。住んでた小屋で自堕落に生きていたら偶然通りかかったあいつに強制的に連れて行かれた」

「はあ……」

蒼華が気の抜けた返事をする。
うん、俺もそんな気分だ。

「そんな俺が、いつの間にやら国まで相手にして。馬鹿かつつの
悪態を吐いてはいるが、荒神の顔は笑っている。
口で言っても、というところか。

さて、こう聞くとますますヤツの人となりが分からん。

「ま、んなことはどうでもいいわ。とりあえずこれから先のヒント
を出しておいてやろう」

肩を竦めて話を打ち切り、先のことについてを話すと言う。
もう少し話を聞きたいが打ち切ったということは聞くな、というこ
とだろうか。

「放雷花の園、薔つばきは未だ咲かず」

また知らない単語が……。

「ホウライカ？」

「ある地方の一部でしか咲かない放電現象を起こす稀少な花の名前
だ。魔術の触媒として重宝される」

おっさん、解説ありがとう。
しかし放電する花って危ないことこの上ないな。
その園って。危険地帯にでも行けと？

「俺が言うのはここまでだ。後は自分たちで考えな」

「ああ、ありがとう。さっぱり分からないけど、どうにかしてみるよ」

「ありがとうございます」

蒼香と2人揃って頭を下げる。

「で、アンタだアンタ。なんでここにいる？」

「そっいえば、なんでアニマはここにいたの？」

「一人は、寂しかった……」

半眼で睨みつける荒神をさらっと流してアニマに問うイリス。
その問いに緩々と首を振って小さく呟くアニマ。
先ほどのやりとりがなければ本当に、ただの少女なのだが。

「あと、お金なかった……」

「切実過ぎるだろ!？」

「こいつの場合、報酬の8割が食費に消えるからな」

もう悪食じゃなくて暴食のアニマに改名しようぜ。
と、いうか俺たちの生活費ってどこから出てんだ？
クルリと蒼香の方へと向く。それに連動するように蒼香の顔がおっ
さんの方へと向く。

「……路銀は尽きたぞ？」

「ああ、うん。本当にスマン」

おっさんに頼り切ってたのか。
もしかしなくても不味いだろ。

「緊急会議！」

「働け。以上」

「会議終了！」

おっさんの一言により5秒で終わった。

久しぶりにギルドに行って依頼を受けてくるしかないか。

「うし、じゃあ解散だ。イリス、アンタは残れよ？」

「仕方ないわね」

荒神に言われてイリスが少しだけ浮かせた腰を下ろす。

アニメも動こうとしてないから残るんだろう。

おっさんが代金の一部をテーブルの端に置いて立ち上がる。

「ありがとうございます！ また来てくださいね！」

店員さんに見送られ、店の外へ。

振り返って見上げれば翼竜が茜色の空を舞って山の上を行ったり来たりしている。

そのあまりにも幻想的な光景を、ファンタジー少しだけ見慣れてしまった自分がいることに気付いて苦笑い。

「何？ 急に笑って」

「いや、なんでもないさ」

蒼香にそう言って、ヒントのことを考える。

放雷花の園ってのはおっさんが言ってたある地方ってところに行けば、まあなんとかなるだろう。

蕾は未だ咲かずってのはそのままの意味だろうか。分からん。

面倒なヒントだ、と溜め息を吐く。

まあ、どちらにせよ金がなければどうしようもない。

俺でも出来る仕事があればいいのだけれど。

「で、どういうことだよ」

荒神が問う。

悠輝たちと話していた時の様な感じはなく、ただ真剣に。

「止めたいのよ。分かっているんでしょう？」

それに返すイリスも普段の雰囲気はなく、真面目なものである。

「……イリスは、それでいいの？」

「ありがとう。でもいいのよ、終わったことだもの」

不安そうに話しかけるアニマに、イリスは微笑んで返す。

「チツ、わあつたよ。手え貸してやる」

面倒なことになった、と荒神はぼやく。

アニマは無表情で沈黙を保っている。

「ごめんなさい、私たちの問題に付き合わせてしまって」

小さく、しかししっかりと頭を下げる。

「それを言うならあのお嬢ちゃんたちに、だろ？」

「そう、ね。あなたに言つて損したかしら？」

「アンタな……」

げんなりとした声音で批難の声を上げるが、2人共冗談だと分かっている。それ以上はない。

「……アニマは？」

「私は……、うん。イリスの、味方」

少しだけ考えるが、やがてしっかりと宣言した。
その言葉を聞いてイリスは胸を下ろした。

「……ありがとう」

「うし、じゃあ俺らの目的は」

曉達を、止めること。

今、ピースメーカーのメンバーが、2つに別れた。

遅くなりました。

一応ネギまの二次創作もやっています。

よろしければそちらもどうぞ。

にじファンの方でブックで検索していただければ出ると思います。

森の中、剣戟が鳴り響く。

目の前には小柄な生き物。

そいつは器用に片手剣を振るってきた。

ゴ布林。

肌は茶色く、背は前述の通り小さく腰くらいまで。

襦袢のような布の服を着て手に持ったものを振り回す。

1体1体は力もあまりなく危険ではないが群れで行動するため厄介な魔物。

「おおおおおっ！」

思い切り踏み込んで相手の剣に自分の剣を打ち付け、振り抜く。衝撃に耐えきれなかったのか、ゴ布林は剣を手放してしまう。首を目掛けて、刺突。嫌な感触が手に伝わる。

剣を引き抜くと勢いよく血が吹き出る。気持ち悪い。

血の臭いに顔を顰^{しか}めながら辺りを見回す。

10を超えるゴ布林の死体。どうやらコイツで最後のようだ。剣を一振り。血振りをして鞘にしまう。

「終わったか」

「おっさん……」

後ろから声を掛けてきたのは相変わらず上はシャツ1枚のおっさんだった。

ただし、今はそのシャツに赤い染みが所々に付いているのだが。その赤い何かをあまり見ないようにおっさんの顔を見る。

「戦闘音がなくなったから嬢ちゃん達の方も終わってるだろ。森を出るぞ」

「……おう」

力のない返事をしているのが分かる。
いや、分かってる。

こんな感情は無駄だという事も、これが危険に繋がるという事も。だけど……。

赤い池の様になっている地面を見る。

相手は人ではない。人型の魔物だ。

魔物、というのは往々にして人に害を成す者たちのことを言うらしい。

増えてくれば討伐の対象にもなるし、おっさんのように皮や骨などのために狩る人もいる。

とはいえ、命を奪ったことには変わらない。

「蒼香は、大丈夫かな」

「……芯はしっかりしてるからな。人のこと心配してねえでまずはその酷い顔をなんとかすることを考えろ」

「……おう」

おっさんが酷い顔と言うのなら、多分、俺が想像しているよりも大変なことになっているんだろう。

蒼香にそんな顔を見せたらきつといらぬ心配を掛けるだろう。自分

のことを棚に上げて。
一度だけ振り返って胸の前で小さく十字を切る。
こっちの祈り方なんぞ知らないし、形なんてなんだっていい。ただ、自己満足のために。
もう振り返らない。

「あー……うー……」

蒼香の唸る声が俺とおっさんに宛がわれた宿の一室に響く。
おっさんは鉾山を見てくると言って外出中。イリスは……、よく分からない。
というか人のベッドに勝手に寝っ転がるなよ。あとスパッツ見えてる。

……別にいいのか、スパッツだから。
というか蒼華が気にしてないなら別にいいんじゃないか？
流石に下着が見えたら不味いと思うが。

「むー……」

多分だけど、蒼華が唸っているのは命のやり取りをしたことに対してじゃない。
いや、少しはあるのだろうが。
それが主な原因なら唸りもせずに枕に突っ伏してると思う。
んー……。

「さっぱり分かん」

「それだけっ!？」

蒼華が跳び起きる。

時折ゴロゴロと転がっていた所為か、髪が大変なことになっている。

「もっとこう、心配するとか、優しく声を掛けるとか! あるじゃん!」

「いや、大丈夫そうかなと」

これだけ吠えてりや十分だな。きつとやせ我慢なのだろうけど。蒼香から見えないところで拳を握り締める。

肉を貫く感触。真つ赤な血飛沫。その臭い。断末魔。

眼の奥に焦げるような痛み。恐らく幻痛。こりゃ蒼香よりも参ってるかも知れない。

牛鬼の時はいっぱいいっぱいだったから、考えなくても済んだんだが。

「ふうー……」

いかんいかん。

このままだと頭も体も腐る。

一回外でも回って気分転換してくるか。

「蒼香ー、外行くけどどうする?」

「行くー」

枕をモフモフとこねくり回して遊んでいた蒼香が反応する。

大体青が多めの服を着ているから、オレンジ色のパーカー姿は少し新鮮である。

一応剣も持っていくか。なにかあった時に困るし。
若草色のコートをハンガーから取る。

大丈夫、血の臭いなんてしない。ちゃんと洗ったし。

「ほら行こうさあ行こう早く行こう」

「押さんでも行くっつの」

なぜかとても元気になってる蒼香に押されて宿を出る。

まだ空は青いがもう1時間もすれば夕焼け色に染まるだろう。

「どこ行くの？」

「……まあ、適当に」

新しく来た街ということで結構なんでも面白く見える。

酒場、宿屋が多いのはここが山を越えるための街だから、ということなんだろう。

あとは製鉄所や武具屋、武器工房などがちらほらと。

山に上がった方はまだ見ていないが、恐らく鉱夫たちのための宿舎などが多いんじゃないだろうか。

「武器専門店だつて。覗いてみる？」

「あー、おっさんから貰った剣も少し刃毀れこぼしてるんだよな」

良く見ると細かい傷がびっしり入ってたり。

この街ならおっさんに研ぎ直してもらえるかね。

「こんにちわー」

「……うちは果物ナイフは置いてないぜ」

「いや、剣を見たいんだけどいいかな？」

明るすぎず暗すぎず、壁が見えない程に武器がずらりと立て掛けてある。

こんな風に武器しかない店はこっちでも始めてだから面白い。

剣はもちろん、槍にハンマー、斧に棍こん、弓矢に杖などもある。

一部、誰が使えるのかと思うくらいに大きい剣やハンマーが置いてあったが小人がいるのだから逆があってもおかしくないな。

「蒼香はナイフはいいのか？」

「そんなに使ってないからねえ」

蒼香の戦闘適正距離が近く、中距離とはいっても多彩な魔術と魔力強化の石があるからそうそう使わないということらしい。

というかそもそも魔術特性が武器だからというのもあるんだろうな。魔術でナイフくらいなら作れるし。

だから蒼香にとって本物のナイフを使うのは本当に最後の手段なのかもしれない。

「あ、これなんていいんじゃないかな？」

「また特殊なもん持ってきてやがって……」

蒼華が手に持っているのは戦輪チャクラムである。

真中に大きく穴をあけた金属の円盤の外側に刃を付けた投擲武器。
ブーメランのように戻ってくることはない、と思う。

「消費物だからかさ張るぞ」

「えー、じゃあこれ」

ジャラリと音を鳴らして持ってきたのはこれまたマニアックな武器。
分銅付きの鎌。

「鎖鎌は……、うん。相当練習しないと扱えないイメージ」

「あー、やっぱり？」

そう言っていそいそと元の場所に戻す蒼香。
面白半分でなんでも持ってきたりするからこいつとの買い物は時間
がかかる。

「せめて剣の範囲内にしてくれ」

「えー、じゃあこれ」

波打つ刀身が特徴的なフランベルジェ。

持ってみるがあまり馴染まない。

おっさんに貰った剣をずっと持ってたとはいえ、握った感覚が違
すぎる。

柄は交換できるんだろうけど、重さとかのバランスが何とも言えな
いくらいに自分に合わない。

一言で言つとすれば、

「持つてるだけで気持ち悪い」

「えー、なにそれ怖い」

これはダメ、と蒼香が元の場所に戻す。
やっぱりおっさんに頼んだ方がいいか。

手間は掛かるかも知れないが、金はそんなに掛からないだろうし。

「こついう刃毀れとかも魔術でパツパツパーと直せないのかねえ？」

「出来るよ？ 打ち直すのとどっちが良いかは別として」

出来るのか。いやまあおっさんなんか魔術で武器作ってるんだから
当たり前のように出来るか。

「でもバルドスさんはユーキの剣はちゃんと鍛え直したいんじゃないかな？」

「おっさんも大概に職人氣質だから……」

「さつき街に出る時も生き生きとしてたもんね」

良い笑顔を浮かべていたおっさんの顔を思いだす。

これ以上ないってくらいに良い顔してたもんね……。――

さて、冷やかしてもいいんだが店長のこつちを見る目が少し怖いこ
とになっているのもう2つ3つ触ってみて、駄目なら出るか。

無難にショートソードやロングソード、ブロードソードを手を持っ
てみる。

うーん、いまいち……。

ちよつと振ってみたいが、場所はないんだろうか。

いや、でも振ってもあんまり良い方向に変わるとは思えない……。

「まあ縁が無かったってことでいいんじゃない？」

「だな。あんまりいても悪いし」

自分の身を守るものだからこれだけは妥協できない。

合わないと思ったなら絶対に持つな、とはおっさんの言葉だ。

「おつ、と。すまん……ってなんだ、お前らか」

店主の視線から逃げるようにドアを開け外に出ると店のすぐ傍に見知った顔がいた。

「荒神さん」

「どうした、お嬢ちゃん。デートのお誘いか？ 5年は早えぞ？」

「いえ、さっぱりその気はないので。イリスさんは？」

「あいつならアニメと一緒に買い物だ。時間掛かると思っぜ」

アニメと買い物……？

駄目だ、全く想像できない。

あのどよんと沈んだ人とキャツキャウフフとか考えただけで寒気がするわ。

「荒神さんは何を？」

「俺はそっちの坊主に用があつてな。借りて行つていいか？ まあ

お嬢ちゃんも付いて来てもいいが」

「俺に……？」

さて、なんの用があるんだろうか。
首を捻って考えてみるも思い当たることなどひとつもない。

「魔術の使い方を軽く教えてやる。じゃねえとお前死にそうだし」

「ああ、そう」

何かと思えば、魔術の話か。

面貸せよ、とかじゃなくて本当に良かった。

いや、そんなことはないと分かつてはいるけれども。

「どこに行くんだ？」

「街はずれの広場だよ。付いて来い」

そう言つて、軽い音と共に荒神の体が宙へと浮き上がった。

宙に浮いた荒神の足元には緑色の魔力の球体があり、それを爆発させて推進力を作っているようだった。

緑の魔力は風の属性だったな。

空を飛ぶことも出来るようになるのか、と感心していると蒼香に引っ張られた。

「いいの？ 見失っちゃうよ？」

「あ。ちょ、行くぞ、蒼香！」

屋根の上を結構な速度で飛ぶ荒神の姿は飛び上がったときにようやく見える程度に離されていた。

幸い方向だけは分かっているものでどうにでもなるが、遅く行って何か文句を言われるよりかはさっさと行った方がいいだろう。

こちらに来て身体能力が上がっていると言っても家を飛び越えるだけの脚力は無いので、ひたすら家屋の隙間を縫うように走る。

狭い路地。前方から人。

止まってなんてられない。

膝を曲げ、体を沈ませる。

「面倒だ。蒼香、跳べ！」

「ん、分かった」

膝を、体をバネのように、力を一気に解放し空へと跳ねる。

「ほいっと」

頭上から声が降ってきた。

成人男性を軽く飛び越えているであろう俺の頭の上に蒼香の頭が逆さになってそこにあった。

結構無茶な要求をしたと思っていたんだが、

「手、貸して」

「ん」

言われるままに手を差し出す。

蒼香は俺の手を取って緑光を全身に纏い、そこに地面があるかのよう空を踏みしめ少しだけ高度を上げた。

さっきの荒神と同じことをしているのだろう。

ただ、俺という荷物があるのと、蒼香の魔術錬度が荒神ほどではないから子供が飛び跳ねる程度しか上がらなかった。

「むー、真似てみたけどこれだけかぁ」

「そんなもんだろ」

むしろ一発で何でも出来ると思ったら大間違いだ。

「風靴よ、降ろして」

重力に少しだけ逆らって着地。同時に疾走。

大通りを行き交う人達にぶつからないよう蛇のように合間を縫って走り抜ける。

路地に入る直前、後ろから小さく音が聞こえた。不意に掛かる影。

見上げると靴を緑色に輝かせた蒼香が先程とは比べ物にならないくらいに空へと飛び上がった。

……どうということだよ。

「せえー、っのー！」

ダンッ、と蒼香のそれとは正反対のけたたましい音。

蒼香のように跳ぶことは出来ない。

だが、この路地でなら 両脇に壁があるこの場所なら俺だって屋根に上ることは出来る。

即ち、三角跳び。

「ふっ！」

こんなこと子供ガキのころに遊びでやってたくらいだが、ここでならゲームみたいな動き出来るな。

誤算は思ったよりも辛かったってことか。
一息吐いて、こちらを気にしながら屋根を跳ぶ蒼香に行っていていい、と手を振るう。

あんにやろ、本気でチートくせえな。

一度しか見てない魔術を模倣？ 複製？

なんにせよ習得の早さが異常な気しかしい。

実はそういう魔術師なんじゃねえの？

まあ蒼香の能力なんぞ俺にはあまり関係ないと考えながら、ようやく目的地に着いた。

荒神は壁に寄りかかり、蒼香はストレッチをしている。

こちらに気付いたのか、荒神は軽い足取りで近づいてきた。

「よう、遅かったじゃねえか」

「アンタが速いだけだろうに……」

しかもアンタはほとんど空飛んでた様なもんだし。

こっちは走ってたんだぞ、チクショウ。

「お前これで速いっついたら本職の風の魔術師に笑われるぞ？」

「本職ねえ……。見たことないからどれだけ速いのか想像もつかんわな」

そもそも周りが多芸すぎて属性が1つしかない魔術師なんていたかも分からん。

俺でさえ2属性持ちだしな。

こうなると逆に1属性持ちの方が珍しいんじゃないだろうか。

「さて、お前の相手はこいつだ」

「……何だコレ」

荒神が差し出した掌に、赤く透き通ったクリオネのような生き物が乗っていた。

「人工精霊、かな？ 私も初めて見たけど……、綺麗……」

宙に浮くそれは、蒼香の言うとおり宝石の様な輝きを放っていて幻想的であつた。

「ルールは簡単だ。こいつに1発叩き込めばいい。……んだがまあ、なんだ。死ぬ気で逃げろ」

「は？」

景色が歪む。違う。

熱気による陽炎でそう見えるだけだ。

急激に上がっている周囲の温度。

人工精霊の周囲に浮かび上がる赤い陣、陣、陣。

出現した全ての魔法陣が壊れた機械のような不快な音を立てながら輝きだした。

おいおいおいおい、ちょっとシャレになってねえぞ？

閃光が、弾けた。

SIDE : A o k a

目前で広がる火災の大惨事には目を背けて荒神さんをチラリと盗み
見てみる。

その視線は確かにユーキの方へと向かっているが、どこか違う場所
を見ているような気がした。

「えっと、お父さんのことを聞いてもいいですか？」

「ん？ まあ話せることは少ないかもしれないが」

声をかけてみるとしっかりと反応してくれた。
どうにも切り替えは上手らしい。

「その、お父さんって、どんな人でした？」

一番聞きたいことを聞いてみる。

イリスさんにも聞いたけど、どうにも抽象的というか子供っぽい言
い方しかしなかったからさっぱり分からなかった。

うん、まあ。大切に思われてたっていうのはよく分かったんだけど
ども。

「あー……、そうだな。始めは変な奴だっと思った」

「次はおせっかいな野郎だっ変わった」

「最後はやっぱり変な奴だった」

「変な奴って……」

自分のイメージからすれば変とは真逆の位置にいたので少し困惑してしまう。

「変な奴さ。腐っていくだけの俺を拉致って、旅して、戦争を止めて」

「……」

荒神さんはさつきみたいに遠い目をしていた。

ここではないどこかを思い馳せているのだろう。

少し、安心した。いや、こんなことを思うのは私的にはあんまりよろしくなかったりするのだが。

自分の父親が、どんな理由かも分からず友人の命を狙っているなんて話は信じたくない。

この眼で見ているとしても、だ。

だから安心したというのはやっぱり私の偽らざる本心なのだろう。

「まあ、出会いはいいか。メンバーは知ってるよな？ アイツにイリスにヴェルンに俺とアニマとティーク。……冷静に考えてみりゃスゲーメンバーだな。馬鹿みてーに力を持った3人と人外2人に俺か」

なんかもう突っ込みを入れたい。

「そうそう、イリスとヴェルンは双子だったか。似てるけど似てない、似てないけど似てるみたいな奴らでな。あいつらの喧嘩を静めるのは暁の役目だったな」

双子？

……たしか、あのときユーキは　。

「イリスとか性格はあんなんだけど、見た目は美人だろ？　だから最初にあの姉妹見たときは女神が直々にお迎えに来たのかと思っただけ。……そんな幻想はぶち壊されたが」

ああ、それは素直に共感できる。

見たことも無いような美人さんが色々台無しな言葉をポンポン口に出すのだ。

でもそんなことは基本的にユーキの前でしか見なかったけど。

「思えばいろんなところ行っただな。山を越えて、海を越えて。どこぞの国の王様の寝室に忍び込んだこともあったな。山の上の龍に会いに行ったりもした」

話す内容はどれもまるで絵本の物語のようである。

「暁は生真面目な奴だな。よくイリスとヴェルンに遊ばれてたよ。他の奴等はその姿を見て微笑ましく思ったもんだ」

思わず顔が綻んだ。

小さな頃の記憶も殆ど薄れ、強烈に記憶に残っているのはユーキに向けた剣と拒絶する背中、押し殺した冷たい声だけだから。

「だが、ある日を境に変わっていった」

荒神さんの声のトーンが一段落ちる。

「暁の奴、寝てなかった、いや、眠れなかったんだろ？　目つき

が日を増すごとに悪くなっていったよ。そのうちイリスとヴェルンの口数も減っていった」

「……」

そこには押さえ込んだ怒りのような感情が秘められていて。

「あいつらさ、そんな状態でも笑うんだよ。何でもない、心配ない、つてよ。……まあ、素直に話してくれてたって、俺らには何も出来なかっただろうがな」

同時に、どうしようもない悲しみを含んでいた。

荒神さんが空を見上げるのに釣られ、同じ様に顔を上げる。

「……」

「……」

沈黙。

嫌な沈黙ではないけれど、空気が少し重いのも確かである。

「悪いな、なんか嫌な話になっちまって」

「いえ……、今話してくれたことも、私は何も知らなかったから……」

最後に何があつたのか話してくれなかったけど、荒神さんにしても私にしてもいい話ではないのだろう。

眼を閉じて、まぶたの裏に映し出されるのはぼんやりとした記憶。書斎で父の背中を見つめる私。

隣へ駆け寄って、手元を覗き込んで、びっしりと書き込まれたメモ帳のようなものを持っていて。

私に気付いて向けた顔は　泣いて、いた？

「いやあ、ないかなー」

「？　どうした？」

記憶への否定の言葉が口に出ていたみたいだ。

荒神さんに変な目で見られてしまった。

はあー、でも記憶のなかでもお父さんが泣いてるってありえないと思うんだけどな。捏造でもしたかな？

……逆に考えて私のお父さんに対するイメージは泣くことなんてありえないって思っているんだから本当にあつたことなのかな？

「まあ、パツと言えるのはこんなもんか。細かく話すとすると俺の頭じゃまとめきれないしな」

「魔術のほうに割合当てすぎなんじゃないですか？」

「あー、有り得なくもない、か？」

冗談を言ってみたのにちよつと深刻な表情で返された。

「さすがトップレベルの魔術師、日常に支障が出るほどの魔術馬鹿だとは……！　ってそんなこと考えてたりするか？」

「あんまり自分でトップレベルとか言うものじゃないと思います。事実ですけど」

おちゃらけた雰囲気に戻った荒神さんは先程までと同一人物とは思えないほどに気を抜かしていた。
ここまでくると切り替えが上手すぎるのもどうなのか悩むところだね。

「さて、あいつは、案外頑張った方か」

「え？ ああっ！？」

地面は決れ、焦げた臭いと熱気が立ち込める中心に倒れた姿。

慌てて駆け寄り口元に手を当てて呼吸をしているかを確かめる。

……大丈夫。息もしているし脈も弱くはない。

ただ服に焦げ目が目立つから、体の方も火傷があるかもしれない。

『柔らかな白。水と混ざり彼を癒したまえ』

体の中で透き通った白と水色を混ぜ合わせるイメージ。

イメージはそのまま確かな形となって効果を表した。

癒の魔術の練習をしといて良かったと思う。

今はイリスさんがいるからそれほど心配していないけど、彼女と別行動になったときとかのために暇なときにやっていたのがこんなにも早く役に立つとは思ってもいなかった。

「……そうだよな」

「はい？ 何か言いました？」

「いや、なんでもねえよ」

荒神さんに視線を向けて尋ねてみるが溜息とともに返されてしまっ

た。

何か呟いていたと思ったんだけど、気のせいだったのかな？

「ん……、んあ？」

「あ、起きた。大丈夫？ 私のこと分かる？」

ユーキの顔の前で手をひらひらと振ってみる。

まだボーっとしているようだけど火傷は大体治っているはず。

やっぱり、と言うべきか手加減はされていたみたいで体にはそれほどダメージはなかった。

「んん？ つかしーな。結構本気で術式構成組んだんだが……」

「はい？」

今の話が本当だとすると、手加減されて怪我が少ないんじゃないかと、ユーキが頑張ったってこと？

「で？ おう、どうだったよ？」

「あー……、死ぬかと思った」

そりゃあそうだろう。

これで余裕とか言ったらどんな化け物かって話だよ。

「というかどのあたりが”魔術の使い方を教える”なんだよ。ただのイジメじゃねえか」

「荒療治のほうじゃ俺も面倒じゃねえし。なにより死に物狂いで頑張

るしな」

確かにそっちの方が効果はあると思うけれども、死んじゃったら元も子もないんじゃないかなとも思う。

「で、他に気付いた事とかねーのか？」

「……あんたら相手に抵抗もクソもねえな。紙の様に吹き飛ばされるだけだ」

まあ、ユーキはド素人だしねえ。
出力上げたってどうしようもないでしょ。

「だろうな。お前らと一緒にいたでけえ男くらいでようやくまともに機能し始めるってところだろ」

「くそつ、手詰まり感が半端ねえな。自分だけ防具を装備できないRPGやってるようなもんだぞ」

「？」

ユーキはたまによく分からないことを言う。
とはいえそこそこ慣れたし言及もしないのだけれど。

「一撃貰ったら死ぬゲーム……。攻撃を避けるか、攻撃される前にやるかしかないか」

「お前に今ある選択肢はその2つだな。ここまでレベルが違つと基本的に小細工すら無意味だ」

「……やられるまえに殺れ、だな」

何かを諦めたような表情で溜息を1つ吐き、その顔を凜とした表情に変える。

うん、こうやって真面目な顔をしていればかっこいいのにな。

「決まりだな。瞬間火力上げるための練習法教えてやるよ」

「……イリスと同じ内容だったら思いっきり笑ってやろう」

おっと、私もユーキの話ばかり聞いてないで自分の練習しなきゃ。

「えーっと、まず集中」

まずなによりもこれだそうだな。

集中さえ出来ていれば多少構成が無茶苦茶であってもどうにかなる、
だそうで。

「次にイメージ」

結果を思い描くことが大切だと言っていた。
自分には出来ると思い込むこと。

「魔力の練り上げ」

深呼吸をしながら、自分の中の一番奥深くでゆっくりと魔力を燃や
し続ける。

「留めて」

練り上げた魔力を右手に移動させて漏れ出さないように留める。
ギチリ、と腕が軋む感覚。

まだ。イリスさんに魔力を無理矢理流し込まれたときのように限界を超えるつもりで。

歯を食いしばる。

腕が張り裂けそう。

もう、限界っ！

『放っ！』

自分が出るギリギリまで小さく絞った魔術陣を指先に展開して一
気に魔力を吐き出す。

全身の力が抜けてしまい、思わずへたり込む。

教えてもらってから初めてやってみたけど、こんなに辛いものとは思
わなかったなあ。

いやいや、駄目駄目。

こんなことくらいで弱音を吐いてたらユーキに示しがつかないし！
負けられないし！

「……私はなにと張り合ってるんだか」

1つ溜息を吐いて肩を落とす。

荒神さんとなにやら話をしているユーキを見る。

ユーキは無茶をしているし、きっとこれからもそうするだろう。

支えてあげたい。

頼って欲しい。

「私だって、力になりたい」

脚に力を入れて、立ち上がる。

燃え上がれ。

凍りつけ。

吹き荒れる。

なんだっていい。

ユーキたちの、ユーキの力になれるなら　　！

「なんだって出来ないけど、出来る範囲内ならやるんだから
っ！」

この思いを全部。

集中しろ。

練り上げる。

絞れ。

全部、魔力に乗せて吐き出してしまえっ！

突き出した手の先の魔法陣から放たれた光が視界を染める。

光は一瞬。

すぐに今まで見た光景が目に映し出された。

我に返ったせいか、どっと疲労感が押し寄せてくる。

うん、もう無理。立ってられない。

尻餅をつくようにその場に座り込む。

……なにやら視線を感じる。

ここにいるのは私たちだけ。

つまりはあの2人だと思っただけ顔を向けると果然とこちらを見ていた。

「……えっと」

「いやいやいやいや、なんでもない」

ユーキは首を横にブンブンと振るだけであった。

「荒神さん」

「まあ、なんだ、その、悩みとかあったら誰かに相談するといいと思うぜ……？」

「なんでそんな話が出てくるんですか！？」

集中してたときになにかやらかしてしまっただろうか。

ユーキと荒神さんの生暖かい視線が痛い。

視線から逃げるように顔を背けると目の前の惨状が眼に映った。

山に面していた広場で、私の目の前はその山の壁面だったのだがそこに浅くない穿^{うが}った様な穴が空いていた。

……なにこれ。え、これやったの私？

さっきの練習でこんな風になったってこと？

一応間違いがないかユーキたちに振り返ってみる。

2人とも頷くだけである。

………どうということなのさ。

首を捻って考えてみるけれど分からない。

まさか、さっきのモヤモヤとした状態で撃ったのがこんなに威力が出るだなんて思えないし。

………うん、見なかったことにしよう。

いや、この穴はもともと空いてたんだよ。きっと、たぶん。

「でも、悩みか………」

1人だけで悩んでたって仕方ないこともあるけれど、別にそんなに大きな悩みは……。

と、そこまで考えてユーキをチラリと見る。

うん、まあ色々な意味で悩みの種ではあるけど相談できるようなことでもない。

というか相談したくない。からかわれる事が分かりきっている。

「おい蒼香、大丈夫か？ 目が死んでるぞ」

うふふー、と虚ろな笑いを浮かべていたら本格的にユーキに心配された。

いけないいけない、だいぶユーキに毒されてきてるね。

……うん、まあ。

もうちょっと親密になれば、相談しても、いいよね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7979g/>

俺の異世界譚

2011年10月11日17時41分発行